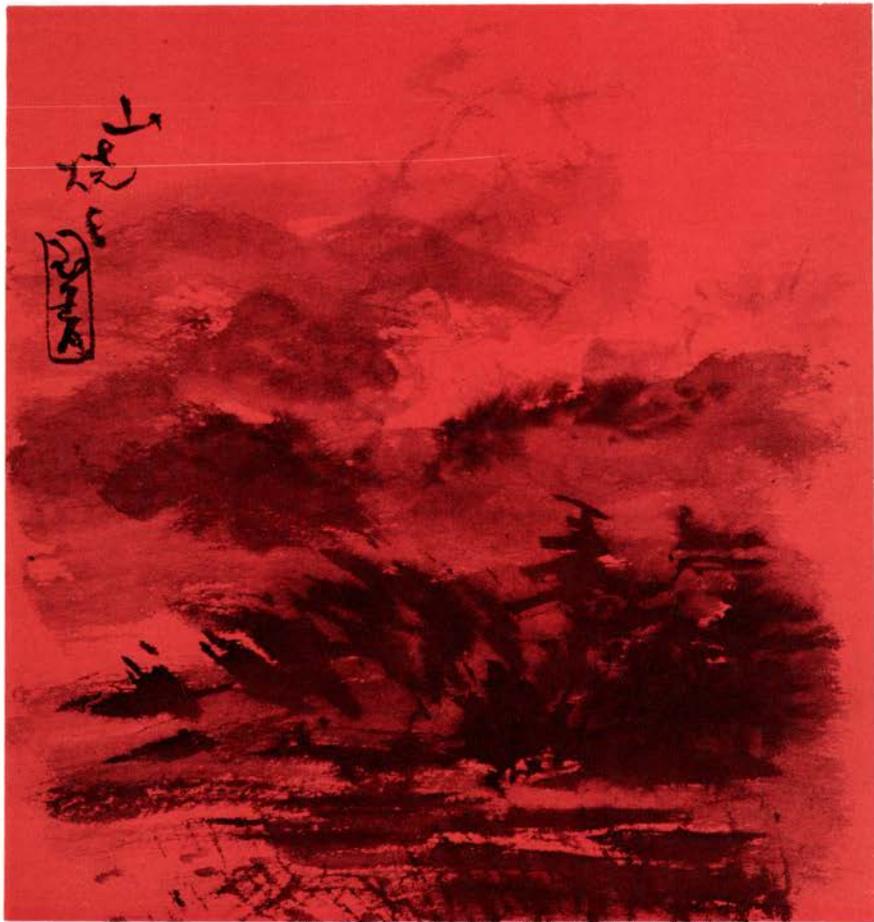


川柳塔

昭和五十九年一月二十五日
昭和五十九年二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷六八一号



日川協加盟

No. 681

二月号

川柳塔誌寿60年選暦記念

句集『川柳塔』発刊!!

大正十三年川柳雑誌創刊から数えて六十年。川柳塔は昭和59年2月めでたく選暦を迎えます。これを記念して同人・誌友句集「川柳塔」を発刊することになりました。

同人句集は昭和四十九年発刊の「川柳塔」以来十年ぶりです。

左記要領により一人でも多くご参加下さるようお願い申し上げます。

体裁 四六判・約六百頁

発刊 昭和五十九年六月表予定

★同人・誌友どなたでも参加できます。句は十句 百選 二提出下さい。これを一頁に組みます。

★原稿締切は59年3月31日。句稿と共に二冊分・五千円を同封の上、本社会計室宛お申込み下さい。 指定の応募用紙を使用のこと。

★冊数がふえると世帯が安くなります。ご協力方お願い申し上げます。

川柳塔社

NEW FORMAL COLLECTION



泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた
男のロマンと
フォーマルと。

OSK JEFF
ORIGINAL DESIGN

株式会社 **オーエスケー**

〒540 大阪市東区南新町1-13
☎ 06(941)8015

覚悟と目的と自信

一月一日の朝日新聞に、太平洋横断、堀江さん今度はソーラーボートでという記事を見た。もう四、五年も前に八尾の公民館で堀江さんの話をきいたことがあるので、フトそのことを思い出した。

その時の堀江さんは、「私は、しばしば一人っきりの太平洋横断は淋しかったでしょう」といふ質問を受けますが、私は言下に、淋しくはありません、その理由は初めっから、一人っきりのことを覚悟しているからで、そして、サンフランシスコへ向っているという目的があるから、一向に淋しくありません」

「もしも、ヨットが強風と荒波でたたきつぶされたら、誰にも見られないまま、海の藻屑になるのでは」といふ質問に、

初 暦 之 か ら 続 く 日 の 新 た

初 旅 や 車 中 の 声 は 雪 の 富 士

初 旅 や 伊 豆 は 菜 の 花 豆 の 花

初 旅 や 凧 凧 上 る 凧 を 見 る

湯 の 旅 や 山 茶 花 の 宿 一 人 酒

西 尾 栗

「僕の手で作ったヨットだから、つぶれない自信がありますよ」と答えたという話をきいたことがある。

成程、初めっから一人っきりだといふ覚悟そして目的のあること。更に自信のあること。これでは淋しいとか、孤独という感じが迫ってこないのであると感心した。もし堀江さんが川柳をやっていたら、そこへ川柳を考えていますからとつけ加えたかも知れない。

私もよく旅行するのに、一人旅を礼讃すること、一人旅など淋しいでしようと言われることがあるが、堀江さんのように、覚悟と目的と自信があれば、孤独感など、むしろ楽しいものであることを、これから強調しようと思ふ。

川 柳 塔 二 月 号

川柳塔 二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

覚悟と目的と自信	西尾 栞	(1)
ご挨拶	中島生々庵	(3)
還暦	西田柳宏子	(2)
川柳塔(同人吟)	西尾 栞	(4)
自選集	東野 大八	(34)
■川柳太平記(69)《川柳の群像》木村半文銭	黒川紫香	(38)
■連載 誹風柳多留廿六篇研究(十四丁・十五丁)	若 柳 潮 花	(53)
水煙抄	藤 村 メ 女	(57)
二賞候補作品中間発表	橋高薫風	(58)
秀句鑑賞 同人吟	野村太茂津	(61)
愛染帖	菅井智水庵	(62)
中筋三幸氏を悼む	森井菁居	(64)
中筋三幸先生を偲ぶ	政岡日枝子	(64)
「素人」	宮園射月芳選	(65)
一路集「歩く」	本田恵二朗	(66)
「コンピ」		(63)
初歩教室		
柳界展望		

還 暦

西田 柳宏子

本年は^{キノエネ}甲子の年で、十干十二支の夫々最初の甲と子の組合せ即ち最初に立ち還った気にもなる年である。大正十三年の甲子の年から満六十年を経過した還暦の年である。

私達にとっては特に意義深い還暦の年なのである。川柳塔の前身川柳雑誌が師麻生路郎によって創刊号が発刊されたのが大正十三年二月十五日であり、同年一月十九日には大阪南堀江書林俱樂部にて川柳雑誌社創立川柳大会を開催、路郎、水府、浪花坊、紋太、文久二柳子等々錚々たる顔触れ五十六名出席の盛會裡にスタートを切ったのである。

今私の手許には薫風氏の御好意により、その川柳雑誌創刊号から三号まで三冊があるが、実に感慨深く拝見している。

私の胸を強く打ったのは、今まで先輩諸氏から聞いていた師路郎の川柳に打ち込んだ情熱の素晴らしさが、色褪せた三十頁そこそこの川柳雑誌から未だに活きいきと脈打って伝わってきたことである。

創刊号の冒頭には「誤れる川柳観を排す」と真向から社会に訴え「現代人は刺戟に生きる」「白紙になって研究せよ」と、本文二十七頁中四頁に亘って強く論じている。

本社一月句会……………(69)

〈句集紹介〉なや・けんのすけ「掌紋」……………谷垣史好…(71)

各地柳壇(佳句地10選／藤田泰子)……………(73)

編集後記……………薫風・鬼遊・史好…(85)

ご挨拶

中島生々庵

この二月号を以て「川柳塔」も「川柳雑誌」創刊以来通算六十年世俗に謂うところの還暦の年になった。大正十三年といえは路郎先生は元氣一杯の年である。ご苦労も多かったであろうが、他面足跡が到る所に輝いているし、またこれから将来への一里塚として、永久に輝き続ける事であろう。また還暦といえは人生の節目から言っても大切な歳であるのである。

路郎先生の「六十一まだ情熱は燃えに燃え」を地に行つて表現もされ、その熱情を秘められた。その熱情と輝きをそのままに「川柳塔」も燃えつつづけているのである。

この上とも皆様のご支援、ご指導をお願い申し上げる次第である。

三月号(発刊二号)には早くも「一句を遺せ」と説き、更に四月号に於ては「新聞柳壇雑感」として川柳を育ててきた新聞の功罪を鋭く衝いている。今日私達が新聞、テレビ等マスコミに乗つて川柳の普及向上の機運を云々しているが、既に六十年前に喝破していたと言えよう。

六十一まだ情熱は燃えに燃え 路郎
この句は師路郎が還暦の時の句である。正に川柳に一生を捧げた路郎の面目躍如たるものが伺えるといえよう。

最近何か技巧に走り、枝葉末節にこだわつてみたり、徒らに持論に固執して排他的或は従来川柳蔑視的な新しがり屋的傾向が散見されるが、今こそ私達は初心に立ち還つて、本当の人間川柳、心の川柳を見直すときではなからうか。川柳塔と改題こそすれ、川柳雑誌創刊から六十年を経て、還暦第一歩を踏み出した川柳塔二月号、心新たな気持で今後を進みたいと思ふ。既に路郎を知らぬ同人大半を占める現在ではあるが、還暦を機に路郎の尽きることなき川柳への情熱を享け継いでいることを再確認して精進を続けたいものと思ふ。同人諸兄の繞まぬ御精進と、御協力を切にお願いします。

因みに創刊当時一冊三十銭、一年三円。
更に甲子園球場も同年造られたので甲子園と名付けられている。



西尾 葉選

大阪市 川口弘生

松原市 谷垣史好

瀬田川が宇治川になる橋渡る
唐橋で午後二時の虹十二月
扉しめ平安の闇鳳凰堂
新婚にお線香など用意せぬ
出陣へ齒の浮く言葉など要らぬ
煮凍りに肉親を恋う舌ざわり
神と神出雲の国で結ばれる

少年期脱せず無花果を嫌い
天罰か男五十の水仕事
好いて好かれて君ら所帯を持ったはず
眼前を遮断機我に返らねば
愛嬌が少し足りない乾物屋
何となく鬱の日鯉の切身買う
不眠症ゆうべ軒をかいてたぞ

新宮市 川上溪水

岸和田市 高橋操子

世話好きが噂の元になる恐さ
読み筋が一つ違っていたあせり
女から母に戻った児の話題
マイカーに乗って集まる歩く会
束ねると人間弱くなる紙幣
呼鈴に息を殺している居留守
宿帳へ無職「無職」と書かぬ見栄

灯の殿堂画面は札幌大通り
朝のときめき糠漬の色すばらしい
深刻です一人娘の適齢期
頼まれる票ハイハイと罪つくる
三女三十三回忌(三句)
あれからが三十三年吾子の忌よ
合掌のまぶたに吾子はまだ四つ

読経へ飛びはねている吾子の忌よ

米子市 八木千代

うろろうと人さし指は接続詞
裸木を見染めてからの中の指
出会いから鎖がとれぬくすり指
円周を背中あわせに出た二人
諦らめてあげる小指のひとり言
焚火囲もうよ傷の掌かざそうよ
一人ずつ帰し焚火は眠くなる

和歌山市 西山幸

今日が逝く自嘲の影をおきざりに
埋み火を狂わせにくる北の風
雪催いひと恋う鈴が疼きだす
おもちゃとは思えぬ玩具売っている
あの眼この眼が小さい城をおびやかす
追伸の書き消した字を無視出来ぬ
美しく終わる喜劇は童話です

八尾市 納糸葉

なさけにはとつても弱い抱き人形
けもの道一つのなさけについて行く
恋人のいない下宿の日曜日
人に皆生年月日があるように
自惚れの鼻もやがて冬に入る
母病んで母の姿になる仏
母の事祈る言葉はたとと持ち

和歌山市 福本英子

弾まない毬へせつせと糸を刺す
瘦せる本読むのにおやつ食べながら
退屈に練ったアルバムから採める
ライバルに勝ったと思う贗ダイヤ
大根めしイカもお揚げもたんと入れ
子報官にさせたくは無いい重傘
鈍くとも子の真面目さを買っている

豊中市 安藤寿美子

寒さ身にこたえ父の死身にこたえ
相合橋公衆トイレと交番と
裏道で見事な萩の花に遇う
ちりしいて桜紅葉のうら表
炎から生れ白磁の壺となる
二人とも無口になって雪しきり
指切りの男女どちらも針千本

八尾市 高杉鬼遊

横顔が真面目に遊ぶパチンコ屋
パチンコに勝った話を妻にする
自転車鍵のていどの男たち
躁の日と思うしきりに亀の首
立食いのうどんへ連れもなくひとり
おそろしい紙がおかみから届く

桜井市 岩本雀踊子

はずまない毬の行方をききもらす
巢立ちせぬ子がひとり積木
手品師の鳩はいつも飢えている

無職でいる人が贅沢してゐるなり

春近い風をかめつれてくる

正月の鼠胃ぐすりのんでゐる

ホーナス日豚鰻だけではすまされず

重箱も空の儘なり尉と姥

かくや姫京の男はよう追わず

初恋も名前も忘れた事にする

しゃべり上戸の母が気になるPTA

支払日ばかり続いて退職者

夜が明ける生きていたなと眼が覚める

コンバインにお餅供えて手を合わせ

逝く秋の酒はゆっくり飲むべかり

みの虫よ今年や大雪降るだとも

親切に母をいたわるそれだけで

泣いたことのない母さんが泣いていた

亡父の墓故郷の寒さに馴れましたか

故里へ亡父を帰してやすらぎぬ

忘れられてゆく焙烙もゆきひらも

日めくりをめくる生き甲斐だけはあ

竹の皮で包んでほしいにぎりめし

ありがとう冬にはふゆの花が咲き

まっ白な明日へ始発ベルが鳴る

倉敷市

小野 克 枝

小 出 智 子

大阪市

鈴 木 村 諷 子

嫁がせた庭に夕暮れ早く落ち

二人になりました肩でももみましよう

旅行でもなさいと親の気も知らず

嘘付きになれない父の膝小僧

磊落な妻で隣を気にしない

ストーブが炎えているから毛糸編む

かす汁が匂うて遠い日の慕情

冬の虹とても楽しい錯覚で

色足袋のまままで小さな冬といふ

太く短く遠い日の男のセリフ

新春の出逢いの彩を信じとく

満州戦友会(二句)

また来たと「平陽よいとこ」唄いだし

心からもつたい無いと思う日々

言い勝つてどうなるものでとあきらめる

うぬぼれを持つのとジャンケンなどしない

正一位お稲荷さんの路地が無い

妻の留守明日の旗も振り遅れ

倉吉市

奥 谷 弘 朗

さすがプロ見せ場はちゃんと心得る

見るよりも踊る阿呆を取る世相

怒鳴るけど優しいとこがあつて惚れ

現実と理想の谷間で出た手腕

見栄を張るやりくりだけは止めなはれ

富田林市

岩 田 美 代

藤井寺市

児 島 与 呂 志

逆転で勝った誇りが顔に出る

米子市

林

瑞枝

疵口の深さへ赤い実を落す

雪釣りの縄よ春まで耐え切るか

始発駅まだ寝不足のブルートレイン

雪国を追われて鬼の冬籠り

御飯粒ひとつで閉じる置手紙

カナリヤの招きを信じ逢いに行く

吹田市

藤

村

メ

女

フルコース私の胃袋小さすぎ

髭面の男の気骨に惚れてみる

ふと憎い男に逢ってみたい夜

眨された娘が一番先に嫁き

厄介な姑を上手に使う嫁

母と娘のせなかあわせに愛がある

八尾市

高

橋

夕

花

捨てられぬ物で埋まる母の部屋

不器用な女にいつも矢が刺さる

告白の出来ない胸に雪が降る

別れのタンゴそれから長い冬になり

躓くとしばし他人の目がやさし

ポーナスの不足は言わぬカレー皿

堺市

高

橋

千

万子

冷静にもどり喪服の薄化粧

口実を素直にとられ愛哀し

微笑しても何と空しい影法師

定休日素顔のまままで日が暮れる

遮断機の向う側にも急ぐ顔

前向きに来た恋人の預金高

米子市

小

西

雄

々

一粒のダイヤへ鬼と手をつなぐ

決心へ気になるメッキの剥げ具合

札節をわきまえ銀行妥協せず

主婦としておとぎ話は受付けぬ

雑用へ今日もちぎり絵つなぐよう

流行の服で職安には行かず

大阪府

中

川

滋

雀

長いながい話に乾く足のうら

山門を出る安らかなヒント抱く

三日月に傾く弱音突きさされ

妻にしか出来ぬ話か出直され

耳打ちをトイレに残し消えたまま

金封の重さにもろさ裁かれる

岡山市

嘉

数

兆

代賀

ささやかな安らぎといふ冬ごもり

貞淑な女にもあった裏ばなし

人ひとりかばう女の縄梯子

貧しくて傷つく事の多かりき

うつぶんを鎮めたい日の花を活け

忠告もようせず反旗もよう振らず

八尾市

宮

西

弥

生

人の世の人に支えられ初日の出

老母だけが豆煮る聖しクリスマス

止り木の酒は綺麗ごと言わぬ

冬の木で羽すり合わすラブコール

青春がつづくわたしの三面鏡

誇りの一つに澄んだ鏡をもっている

島根県

堀江芳子

背を伸して年男だぞと笑う夫

ここまでの話が向きを変えてくる

療友とひよっこり生きてきた握手

冗談が過ぎると誰も笑えない

うわさ噂また移り気な風の罪

夫婦箸飽きのこぬのを不思議がり

柳井市

弘津柳慶

国技館陸下平和な笑い顔

睡れない寢床は過去のざんげ録

まぼろしの色で虹は消えて行き

教科書の通りに思想染められる

あつさりと脱いで主役の座にすわり

舅の無言気になる塩加減

島根県

小砂白汀

草紅葉雪よぶ前の一呼吸

鮭やつと帰ると頭をなぐられる

さっぱりと脱いで出直す冬木立

大風を揚げて北風おだてあげ

裏方は種も奈落も知りつくし

ラッパ吹くおとこの線がばけはじめ

松原市 玉置重人

元旦や風のぬくさにはまされる

老夫婦昔恋しいミナミの灯

確實に残高が減る孫がいる

煩惱よ輪廻よ短い命です

恙なくコマが廻っている不安

過去型の話が好きで老化する

大阪市 津守柳伸

星と仲良しで明け方に眠る

立ち向う風へ寄り添う影法師

ちぐはぐな男を殺す闇の鬼

郷愁がつのるローカル廃止線

あかね雲旅情はここに極まれり

他所行きの貌にダイヤがよく似合う

京都市 松川杜的

銘柄は何でもよろしい僕の酒

六兵衛と聞かされてからの猪口の味

ブックカバーとれない本もあってよし

落葉にもそれぞれ落ちつく場所があり

橋寺にて

二面石やっぱり善相の方を撮り

新薬師寺にて

十二神将懐中電灯で拝まされ

伊丹市 榎谷寿馬

後悔はせぬ約束でいる夫婦

言い過ぎた詫びの温度で出る番茶

ざんげする鐘ばかりなり冬の寺
供養では足りぬ心へ降る時雨
耳に穴明けて女の悔い多し
さっぱりと諦め昼の齒を磨く

松江市

恒松 叮紅

部屋中を散らし無職の趣味が生き

ウイスキー持たせて帰す核家族

珍客へ一日延ばす休肝日

世代交替しきたりが捨てられる

灰皿が別れ話を聞いている

庭石にすえると見える裏表

松江市

小林 孤呂二

窓際に居て仏ごころが先に出る

易もサタン暗がりだけを好むなり

向こう三軒両隣にも右派と左派

事勿れ主義でみんなが距離を置く

だんだんと黙りつぽくなる冬の酒

血の通う話で暖まる炉辺

松江市

柳 楽鶴丸

さよならの声は私にだけ聞え

感謝の気持でするアイバンク

ほうけ呆けと白鳥鳴いている

現人神もうご免御免です

うぬぼれは馬鹿の骨頂です

初夢銀河ステーション応答せよ

松江市

舟木 与根一

目も耳も達者で絵にもなる頑固
年金が有り百姓に戻れない
若さとは謎の微笑が分らない
十二月パントマイムの窓に住み

倫理倫理野党靴の裏を搔き
責任党でない公約夢があり

岸和田市

福浦 勝晴

さりげなく明日を視つめる終電車

どっちみち外れるつもりで並ぶクジ

そっくり撮れた写真で気にくわず

看護婦はハチきれそうな健康美

政府誹謗して銚子転ばせる

持参した菓子を出される見舞客

奈良市

宮口 笛生

十二月らしき事件の十二月

栄転の噂麻雀強くなり

年金が出世頭とされている

冬の来る島に地酒を貯える

大きいの居そうで憎い旅の川

大晦日電車が空いたまま走り

竹原市

小島 蘭幸

新しいジョギングシューズ亡父のもの

長電話終り大きなクシャミする

玩具買う淋しい大人だと思ふ

あたたかい電話と女ひとり住む

お姉ちゃんばかりが泣いている平和

もう一つおめでたがある十二月

藤井寺市 吉岡美房

青い性真珠のような恋を恋う

牡丹雪指をからめたまま溶ける

熟年の最後の恋は琥珀色

恋の糸もつれたままで冬となる

情念の行き尽くところ氷雨降る

恋すべて雪に埋めて旅に出る

寝屋川市 江口度

日進月歩そうかお前も人力車

雑音ばかり聞えてしまふ負け戦

神様は決して人を裁かない

土曜夜どんでん返しきつとある

ざまみろと風置いてゆく特急

息子帰ると猫なで声になる妻で

大阪市 天正千梢

語尾を引っぱり反響気にしてる

したがう者を塩に乗せて行くさだめ

教えてくれなかったのがよい教えと気づき

その金高が悪人にしてしまい

地下街の人波誰も住んでいないのに

営みは確かなりけりごぼうの根

岡山市 川端柳子

誰ひとり欠けても困るかごめの輪

三食の感謝灯(あかり)に包まれて

温泉に浮かぶ各々方の首

この天使やがていくさを知るだろう
母方は士族よお墓だけいばり
奥さんが高峰三枝子にみえる酔い

和歌山市 松原寿子

距離おいて絆あみ込む糸を撰り

もひとりの貴方が鏡こえてくる

記憶の糸たぐるあたりに海の蒼

横波を喰ってかしくくなるんだね

さよならの杭一本を胸に抱き

鉄溶かすほのおをくださいまだ二月

和歌山市 内芝登志代

支えられ支えて世間の風へ立ち

雛を抱く近よりがたい眼の動き

地味を着て一生嫁がぬ炎抱く

珍客へ虎の子出番いさぎよい

姫ダルマ好きなあなたへ手を出せず

父は父母は母なりの情をもち

和歌山市 垂井千寿子

除夜の鐘歳月買えぬものなのに

責任のある役ボケぬ葉です

お見事な指輪すらすら奉賀帳

母という足跡見事な花咲かす

千羽鶴千羽で痛み分かち合う

タクシーの中に時間が落ちてる

和歌山市 堀端三男

片寄りがあって釣り合うこと多し

実力があるから出来る駈け引きだ
木守り柿熟れて故里雪模様

酒一合警戒線というカルテ

天寿全う九十歳では早すぎる

諸行無常見事な花も手折られる

和歌山市

坂口 公子

袖裏の紅が哀しい舞扇

帯買って女心静かに揺れてます

見事さはこの母が居て父が居て

残り花束ねてきれいな春の詩

孫達の護衛つきです紅葉狩

残照へ亡母の笑顔をぬくめます

岡山市

土居 耕花

雑兵でよし初風呂でオナラする

腰少し伸して女とすれちがう

こけしの眼甘えた時の妻に似る

退職金貰うた人も十二月

税務署に子を勤めさす法もある

カラオケに爪先だけは合う音痴

島根県

梅 みどり

友禅の端切れで作る宝入れ

地球儀をまわして冬の風をさけ

水中花ゆれてひとりの愚痴を聞く

塩甘味健康食に切りかえる

押し売りの肩を師走の風が追う

エプロンをはずして雑煮の膝をよせ

倉吉市 渡辺 独歩

輪の中で焚火に解けてゆく控

節分の豆が効いたか嫁がくる

粟田を耕し達磨の目を拾う

妻の座で描く円周なら確か

火と焔えて女が忘れた計算器

耳飾り千の泣き聞かされて

堺市 大道 美乙女

根性も意地も捨てずに運がよい

真夜中の電話もしやの胸さわぎ

別べつの趣味で夫婦の日日ゆたか

笑い声あふれわが家の灯が温い

美辞に酔う自信がいつか掘る墓穴

青虫も耐えて華麗な明日を待つ

大阪市 柳原 静香

洗濯機夫婦親子がもつれ合い

孫が来て只今台風通過中

おバアちゃんのサンタはバスに乗ってゆく

嫁かぬ娘の心は聴かず覗かせず

望郷の心に残る眼鏡橋

冷戦の夫婦の中にあるこたつ

西宮市 杉浦 婦美子

妻多弁何かいい事あったらし

鬱の日に刺激をくれた冬のばら

編み針を数えひとりの置炬燵

猫の髭くらいの自負はもっている

信じ合う夫婦茶碗の自己暗示
足裏にも言いたいことはきつとある

大阪市 西出楓楽

東西屋来た頃街はぬくかった
西高東低温い言葉が見つからぬ
目一ぱい生きててしゃれが通じない
ちがいがわかる男の自信が憎らしい
コンピュータ時代へ片仮名読む稽古
茶の間でも台所でも飼う青い鳥

大阪市 本間満津子

顔見たい会いたい話したいこたつ
妻が居て冬には冬の花咲かす
妻近視夫遠視の行き違い
飲む人が飲まない日には皆黙り
まぼろしか鱈大漁というニュース
七光あの世の顔も借りている

大阪市 神夏磯道子

冬の雲わたしの弱気笑うよう
体重計といつも喧嘩で喰べている
上昇運曆を信じることにする
目立たない苦心脇役に徹して
供養する金惜しくない齢になり
まだ五十もう五十だと言いながら

吹田市 西川景子

誕生の日も雪だったと聞く二月
出生の秘密風花もつてくる

うらやまし恋の遍歴聞くこたつ
うぐいすのふんで不貞が消えるなら
正直な涙で私を困らせる
好意もつ人がことさら優しく

寢屋川市 稲葉冬葉

恋女房は非売品だと思ふ
チャンネル権争うこともない猫といふ
初産は二月だったとぼたん雪
仲間から逃げてふたりの足になり
雑用を嫌う毛皮の拒絶感
仏滅が大安を引きたてている

尼崎市 角野かず子

国境がなくて気ままな雲がゆく
防波堤できてカラスが寄ってくる
お互いに物忘れして恙なし
帰るのを忘れたように昼の月
指切りをしてから足が重くなる
手袋の下は汚れた指らしい

西宮市 奥田みつ子

妹を叱ると姉が先に泣く
も一人の私がいとも邪魔をする
宍道湖の夕陽弱気に鞭をあて
長城をその眼にとどむ武官備
城跡に誰の血溜か蔦紅葉
ふり分けた荷物の重さ影法師

松原市 佐藤藤子

いい歳と悟ったような顔をして
不惑にて母のまろさにはほど遠く
クラリネット今日も半端な音を出し

芋を切るように脳を切る医学
軌道修正追風に助けられ
右の顔左の顔のある怖さ

高知県 松岡三吉

滑ったり転んだりして口達者

欲ふかくして冷蔵庫で腐り

知恵袋が空っぽになる十二月

職のない男でめしは三度食う

通りすぎできない私募金箱

散らかして捨てるものない僕の部屋

川西市 氏林洋敏

公務員の妻にポーナス負けている

ポーナスがでたから電話よくかかり

教会のチラシが入る十二月

デパートに師走のエネルギー吸いとられ

日本のひずみ残留孤児がいる

川柳を書くから賀状受けがよい

弘前市 波多野五楽庵

意地通すこぶしの指が白くなる

蝙蝠の一人が踊り出す人事

肩書がないから共感できる愚痴

定年をひたすらに待つ落ちこぼれ

結局は友を失う義侠心

支配者の顔でポーナスつまみ上げ

出雲市 原 独仙

丸印さてなんの日ぞ十二月

オクターブ高く師走を父怒号

もう趣向変えるべきだね歌合戦

また減反ねずみの世界も産制論

父の無いわけは酷なり質すまい

倉敷市 野田素身郎

順番とはいえ父の死よ母の死よ

母逝って明治の話もう聞けぬ

虫歯などなし浅漬けの好きな妻

駆け足で見舞もすまず十二月

再会はしたが昔は戻らない

島根県 堀江正朗

やる気さえ出せばお陽さま加勢する

耳に音重なる師走の急がしさ

大工さんが若いので若い日を語る

音もなく雪が日めくり薄くする

手に触れる音みなはじく十二月

兵庫県 遠山可住

難関を突破マンガが見たくなり

勝ちほこる女がひとり星凍る

香水の臭う男を信じるか

北風野郎山茶花をふり向かず

親・子・孫結ぶと型をはみ出さぬ

下関市 国弘半休門

病院で旧友と会い力み合い
豪傑をみっちり夫人が手懐ける
ふるさとはテクノポリスで田家消ゆ
年の瀬の信号待ちが頭に來
会って泣き会わずに泣いて孤兒哀し

今治市

越智一水

かけひきが恋にもあると恋が言う
逢いに行く肌へ化粧がよくのびる
大根を洗う小川に詩がある
頬杖をついても赤字の十二月
一生のバクチと想うてする見合

竹原市

森居菁居

先頭に立つと現実主義になる
グループを組むと無敵になる野犬
四面楚歌むかしを訪ねてみたくなる
結局は一人で渡る丸木橋

静水氏竹原市教育功勞賞

晴姿これから先も坂ばかり

呉市

横田英詩

淋しがり屋の子のお喋りがいとおしく
成功の子感茶柱からもらい
線香くさい過去から抜ける束ね髪
急用は呑むことだった呼びだされ
ロケットよお前屋台を知ってるか

美祢市

安平次弘道

おしゃべりな妻人形に裏切られ

定年とは淋し埋まらぬ予定表
グム補償民話にグムの底に消え
雪月花過疎には過疎の良さがあり
妻がネジ巻くから朝の靴をはく

大田市

藤田軒太楼

鶴の一声父の座揺ぎなく
ぼけたなと苦笑の父の忘れ癖
懐ろ手なんとかなるさ年の暮
熟年の昔語りに艶も出る
趣味一つない頑老の日の長さ

綾瀬市

大山と金

今日一日愚痴を言うまい洗い髪
雲行が妖しくお茶を出しそびれ
犬ジヨイも家族の一人クリスマス
運も実力燃ゆる想いを詩にする
ガメツさもほどほどにありお人好し

奈良市

森田カズエ

交渉もさすが唸らすテクニツク
交渉は声のソフトな人がよい
鏡よ鏡ようやく秋の顔写す
闇の道夫婦で行けば恐くない
レタス言う僕マヨネーズ好きでない

宇部市

平田実男

三回忌亡父へすまぬことばかり
恩人の皺の一つは僕の皺
ホステスのこれはチップの効いた媚

肝臓はだましきれない酒の量
級友へ我が老いを見たクラス会

河内長野市 竹中綾珠

五十年暮らした家の沈丁花
転宅も子等にまかして身ひとつ
子や孫のくらしの中へ割って入り
嫁の希望私の希望と新居出来
息子より嫁の言葉のあたたかし

玉野市 小谷仙山

何もかもピントはずれて悪めない
後悔の風が師走を吹きぬける
税金は年金までも追い回す
熟年のプランは遊ぶ事ばかり
零囲気に弱い男が赤旗を振る

東大阪市 斉藤三十四

おとなになれとは汚職見逃せか
独身の気軽さ貯金などはない
間違いであつてよかつた非常ベル
名人の手に妥協ない鑿のたこ
晩酌の一合古希の祭笛

岸和田市 植山武助

私がわたしを苛めて一人居る
檀山へまだまだ行かぬ万歩計
金持から見ればきれいな冬の雲
昨晚と同じおかずの一人膳
子供等の思考の外へ住む夫婦

縄電車夢は故郷の駅に着く

昨日より一步早目に家を出る

限界が来ても捨てない自尊心

職安でつないでくれる夢がない

雑兵もいつか持ちたい馬印

鳥取県 両川洋々

合掌を解けば人間欲ばかり

敵のない王座孤独にさいなまれ

裏門をあけていただく金を積み

欲に目がくらむと結ぶ手が離れ

レシートよ僕のアリバイここにある

鳥取県 清水一保

五十年尽した足と語る風呂

地球儀の一隅しつかと僕の城

雪景色の中で耐えてる冬木立

人生の行きつく所皆大地

趣味一つ明日へ希望のネジを巻く

守口市 羽原静歩

耕して天に至るも宿命か

千人の祈りは千人の幻か

風邪ひくな氷雨降る日の野の仏

包丁の視野に女の冬がある

雲は流れて山頭火の春

大阪市 河井庸佑

桜井市 河合茂雄

感情をおさえ切れずに若き出す
はしたない自分を見せて自省する

節々に態度で見せる役不足
歯車がひとつ狂ってからこじれ

倉敷市

藤井春日

盲愛がとんでも無い子にして仕舞い

灰色の青春越えし老母強し

酒よ酒明日に生きる夢を呉れ

金貯めて心貧しき人のあり

菊活ける鉄の音に邪心無く

諫早市

原田明春

薄給へ肩に冷たい冬の雨

就職難ボウフラは蚊になれるのに

強行裁決してまで政治の裏を見せ

茶の会と云うて巨頭の謀議談

レーガンさん引金に指かけたまま平和論

倉敷市

稲田豊作

肩寄せて妻は家計の黒字見せ

一徹に生きて孤独の日めぐりよ

禍いの口が休まずよく喋る

世の中がどう変ろうとかたつむり

親切を売られ気持に借りが出来

岡山県

直原七面山

古稀越えて坂は急

竹踏んでふんでふんで防ぐ老い

家元と言う白足袋の足確か

万能のゲーテを座右の人として
酒提げて雲の峰訪う久米雄居士

平田市 久家代志男

よく動く嫁に奨める獅旅行

信条が崩れ蛇行の日が続く

母の頼吊大根に似てひなび

川に寝る子の手は父母を繋ぐ橋

元日だ噂ばなしは明日でよい

岡山市 時末一灯

泣き笑い白い日記が待っている

陽のあたる男の旗へ風が寄り

継ぎはぎの旗が柩へたたまれる

ここという時に無言の世間様

ゆえなくもせかせか師走のピラを踏み

呉市 林野甦光

夢を買う只それだけのやすらぎで

お喋りがしたい茶房のクリスタル

悔いた日も少しはあった振り向かず

風化したロマンへ当てる聴診器

ぼたん雪ほろり人肌恋しかり

兵庫県 辻文平

君の手へ眠り人形になれずいる

さよならの瞳に残された遠花火

吊橋のたもとに別れの曲がある

色のない返事で自説曲げられぬ

数珠を繰る女が探している逃げ場

倉敷市 小幡里風

追伸で受胎を知った十二月

それとなく歩調が合わぬ十二月

春やはる満を持してゐる福寿草

今日のねじ妻が程よく捲いてくれ

黙認のそれからの妻無口です

京都市 都倉求芽

今日はちと広げてみたい輪をえがく

コシヒカリでなくとも大釜で炊くうまさ

屑籠の中に本音が捨ててある

五十五でやつと一ページ目をめくり

遠縁に代議士いるが田中派で

京都市 山本規不風

かりそめに触れて落した花の首

生い立ちを話して女目をつむる

乗り換える豪華な車を選ぶ女

見られてるようで露天風呂からあがる

丸坊主になって女の袖の下

和歌山市 若宮武雄

雑草の意地は大樹へ寄りつかぬ

干し大根の味も匂いも亡母の影

散り果てる覚悟足りない枯れ尾花

立て役者を上手に乗せて馬の脚

一票へ政治不信をぶつけたり

和歌山市 浦野和子

凋落のさだめを木の葉疑わず

分れ道悔い残したはあの辺り
水仙花風の噂は聞き流す

非売品だから欲しくもなつてくる

十二月遊んだつけがどつとくる

兵庫県 河原みのる

さすが中国兵馬備ぐらい怒らない

手袋でマイクの嘘をみそぎする

口約は川が無いのに架けまする

ゲートボールまだまだ惜しい伸びた腰

生きていたらと前置きの要るプラン

八尾市 飯田悦郎

老いてなお前輪駆動へ油さす

最愛の妻を娘は嫌い抜く

動く腹なぜ撫ぜをして子守唄

エリート乳房はついに熟れぬまま

好奇心少女が急に脱皮する

大阪市 藤田頂留子

雨だけでこんなに伸びる草のたね

梅一輪たしかに陽差し伸びてます

当り年けどスパーに殺鼠剤

余寒なお一日多い年の豆

お水取りじつとまつてる春の音

高槻市 傍島静馬

頂上を指呼にビバークするゆとり

土つきの野菜が届く年の暮

スクラップに秘境をためた旅心

精勤の胸の名札のありどころ
歳末ご多忙紋切り型で来る便り

笠岡市 松本忠三

編棒の先で答の上の空
交際費いちいち明細まではねえ
責任は胸をたたいてみせただけ
上役の鼻であしらうことに馴れ
待ったなし顔をたたいて活を入れ

寝屋川市 宮尾 あいき

病み上り鏡に私の顔が無い
心の張り抜けたら急に顔が老け
手折られもせずに残菊霜枯れて
木枯が女独りの戸をたたく
年末というに風邪まで背負い込み

米子市 石垣花子

胸張って向い風にも負けぬ母
父の無い子へ面接の目がきびし
政界の駆け引き見てる昼の月
真中に内緒が匂う落葉焼き

老母危篤

はつきりと医者は余命を告げて去り

米子市 桑原伊都

秋の雨少女は夢を深くする
何ゆえに亡父は愛した秋海棠
仲間からはなれてからの落椿
数え唄山が次第に近くなる

さわやかな挨拶朝がうごき出す

米子市 田中亜弥

笹舟は望みかなって旅に出る
逃げ場所の予約は月へしておこつ
定年を飾る仕事は惜しまない
せつかちの葉キリキリ舞いをして落ちる
後味の悪い話で夢がさめ

米子市 菅井とも子

縄張りを解いて上げたかごめの輪
仲間からはぐれないでね渡り鳥
万歩計数えて日課終りとす
割り切れぬ傷に悩みがついて来る
切り捨てて齢にこだわらない暮し

米子市 雑賀美世

霜踏んで母の願いの百度石
対岸の花へいそいそ橋渡る
土壇場の命へのびる縄梯子
二次会で社長と並び合う話題
割切れぬ数へひとりの夜が更ける

米子市 青戸田鶴

さからえぬ流れと知っている暦
芸術の秋に疲れた美術館
仲間意識なのか負け犬よってくる
数え詩もベエゴマもない路地になる
世渡りの下手な夫と行くばかり

米子市 野坂なみ

数え唄初春待つ子等の瞳はつぶら
朝焼けの気まま知ってる冬の靴
当り前の顔してみんな生きてる
「さあ歌舞伎」亡夫の遺影も並ばせる
風の中女は寒い色を撰る

米子市 寺 沢 みど里

保険契約かるい生命の約束で
九十の老母に日課の艶ぶきん
指先へ折りふかめる鶴の数
旅立ちに傘のはなせぬ雨おんな
出おくれた虫あわてさす秋の冷え

米子市 澤 田 千 春

気がかりなデートのあとの舌足らず
冬木立亡兄の軍歌が聞えます
出稼ぎで故郷のなまりに足とめる
安売りの妥協はせぬぞひげ男
冬の海きこえる亡母の数え唄

西宮市 野 呂 鶴 汀

今日切らる菊は悲しい場に並ぶ
窓越しに冬空があり風邪の床
不幸にも子は銚いにならなんだ
年の暮れ四季を忘れて苺買う
日めくりも残り少なく窓を拭く

西宮市 林 はつ 絵

どの耳もわが身鼻肩の声ばかり
野次馬の視野へピエロになってやる

閻魔の耳が聞きそなった安楽死
その日から寓と表札掛け替える
馬の骨ゆずりどうにもならぬこと

西宮市 妹 尾 春 江

叱られて指切りげんまん膝に来る
今のうち膿を出してとお節介
欲しいとは言えない妻の胸算用
年頃はいいな犬までじゃれてくる
歯車を合せて五十の峠越え

西宮市 藤 村 宏 子

新春の彩心の弾むままにゆく
小包の結び目ごとに母がいる
淋しさもころがしてみるたなごころ
貧しさの形で路地の暮れのころ
つきあいのむなしさを知る賀状かく

岸和田市 島 崎 富 志 子

猫に鈴つけて平和を願う年
平和です日の丸なびく三が日
成人の娘と酌み交す松の内
五十五歳定年というつけがくる
我がままを言いだして来た肩と腰

岸和田市 古 野 ひ で

それぞれに自信溢れる菊花展
年寄りのとしより同士と言う安堵
病んで見て人の情の深さ知る
柿ひとつ秋の名残りを熟し切り

それなりの苦勞ありますお金持ち

岸和田市 原

さよ子

ばあちゃんもおしゃれしている初詣で

済んでほし済ましたくない子の拳式

何歳になっても怖い夜の道

「帰ったか」それだけの電話にある温み

週休二日ごろごろ息子うとまれる

岸和田市

清野 こう

調子よい話半分聞いておく

金持ちでないが吾が家の灯があかい

ひそひそと言うから耳をそば立てる

死期せまるバツタに燃える草紅葉

笑われた傘が役立つ秋の空

大阪市

江城 修史

冬空よいつの日逢えるちぎれ雲

生きる汗明日の糧より今日の糧

セールの追われて戻る風の街

妥協する事のみ多き浮世かな

人名簿一人の友が消してある

大阪市

黒田 真砂

はずむもの秘めて熟年の紅の色

紫を選つて今日逢う人想う

古時計に素顔のぞかれた日の不安

酒好きの気持が解る妻と自負

帯少し派手目をめて初春の街

大阪市

北 勝美

柏手が山に吸いこむ三輪の神

この石もあの木も神か三輪の里

善人の顔で砂利踏む杉並木

松原から見ると三山は春かすみ

石仏朝日が遅い弥勒谷

大阪市

欄 蘭

又落ちて人生長いと慰める

寸借のお詫びを兼ねた賀状が来

おの店は溢れる程注ぐコップ酒

お迎えが早く来てほし老いの愚痴

町内の訃報公民館に密立ち

大阪市

鈴木 節子

へそくりを入れた財布で孫に逢い

言い切つてそれから向い風に逢う

しつべ返しを考えている枕

胸さわぎコーヒー少しぬるすぎる

人形になつて遺言状を書く

大阪市

大野 武太

真相はこうだと亡父の七回忌

おべんちゃら過ぎて自分を見失う

自重したこの一年を踏み台に

いちからの出発五年のプランたて

身の程を知っているから力まない

大阪市

山根 いつを

時化の暮れ島が目に入る渡り鳥

もててもてて左程美人でない美人

人情の北国からの餅の味

美人ぬか蝶よ花よも浮き沈み

おもちゃ屋で無理な引き算汗を拭き

大阪市 中西 兼治郎

娘の寝言までは仲人も知らず

幸運の手紙の無視に要る勇氣

もう人が歩いたらしい雪の朝

足跡を残して行つて足が付き

蟹のよう横に歩いて見る画展

大阪市 橋本 美恵

うどん啜るみず鼻啜る片想い

熱いお茶愛することはやめている

恐がりな彼は冗談ばかりいう

階段をのぼる何かを期待して

冷え込みのラツシユに匂うナフタリン

大阪市 鍛原 千里

鹿児島の旅

ペアルック少してれてるフルムーン

城山は薩摩隼人の風が吹く

佐田岬かすめば指宿の灯がうるむ

「よかおこじよ」並んで砂むし旅の顔

ときめきをちよつぱり覚えた冬の花

大阪市 長谷川 春蘭

気まぐれにしてはあまりに念がいり

広告につられ手も出るあしも出る

先祖から受けた暖簾の浮き沈み

痛いところ治るまじない信じる児

ローンゆえの重荷担いつ夫婦船

大阪市 坂本 仙吉郎

東京旅行記浅草回顧

浅草に田谷力三のポツカチオ

木馬館お寺につづく花屋敷

十二階工兵隊に毀される(関東震災の跡)

東京葛飾

門前町手焼き煎餅と草だんご

彫刻に見とれて堂を一廻り

尼崎市 奥山 美智子

寿と一筆墨の香が匂う

福耳の女が好む花ことは

紫の似合う女の恋ごころ

筋書きになかった鍵が置いてある

気が合うてほめるかわりにケチつける

尼崎市 春城 年代

移り香がそこはかとなく長い夜

おしどりのドラマもやがて冬に入る

飾らない質で千客万来で

よくもまあ電話鳴る日の秋深む

山茶花に締めくくらせる花暦

尼崎市 伊藤 春子

姑となる鼻柱は折っておく

チームワーク乱すひとりが鍵にぎる

運動部のリーダーと言う紹介状

傷心を流してほしい滝の音

携帯ベルスイツチ切つとくわけができ

尼崎市 西村 かすみ

共稼ぎ妻のブーツも出してやり

無駄一つ買う日女ははしやいでる

冒険が出来ずに父のあとを嗣ぐ

本心をあかすスイツチオンにする

野心持つ男の好きな急な坂

鳥取県 川崎 秋女

ネズミにも生きる権利の甘諸かじる

かまくらの子等にもうじき春がくる

生かさされて金魚が冬の部屋に舞う

手さぐりは止そう今日から父となる

万病のくすりは茶の間に置いてある

鳥取県 森田 布堂

春の雪降るほど降って空が晴れ

着飾った和服が揃う歌かるた

心機一転机の位置を変えてみる

お茶の間の客待つ床に福寿草

山陰に生れ豪雪にも覚悟

鳥取県 林 露杖

日溜りでそつと古傷撫でてみる

日銭追う肩腰ピツプエレキバン

揺さぶりをかけてサイドで身構える
雪連れて来るぞとでつかい冬の雷

旅終る故郷の駅の小さきかな

鳥取県 金川 満春

喜寿間近余白人生貴重品

呟いた妻のひと言胸を衝く

老妻に内緒でほくそ笑むスリル

神代から男と女夜と昼

旧友の握手が温い十二月

鳥取県 森田 熊生

欲少し出して結局だまされる

仲裁が来てから話でかくなり

アルバムの顔は大志を抱き続け

大げさに笑って涙冷えてくる

好き嫌いない子ねずみの歯をもらう

出雲市 板垣 夢酔

亡妻がくれるか寒の水温し

しゃべり過ぎ酒に吞まれた舌を悔い

毒消しを飲んで饒舌家と向い

老い夫婦いつかは別れある定め

女房へせぬ親切を寡婦にする
出雲市 吉岡 きみえ

長居して秋の日暮れはもうそこに

雑草のひとり言もれて冬きびし

越す人に越させて先の長い旅

きかせてはならぬ便りが風にのり

子供だと思えば夫をゆるせそう

出雲市 園山 多賀子

メンソーレ一つ覚えの旅帰り

雑音は左の耳で聞き流し

手のひらに載せる言葉が見つからぬ

耐えること馴れて人生裏を読む

盲点を突かれて男具になる

出雲市 石倉 芙佐子

ままならぬ浮世にしては捨てがたい

拾い物したと命を粗末にし

だんだんと情は深まる雪の宿

身軽になつた蝶に翔べない春の丘

尾髭骨男の夢は退化する

島根県 西村 早苗

言いたいが妥協する気も齡と知る

耳そうじひざはいいなとそう思う

無人駅の朝生け花のいきとどき

香手向け水子地藏の年を繰る

手を止めぬ答師走の手内職

島根県 榎原 秀子

絶対の孤独にされる深い罪

やつて来た冬のはしりの大霰

何がどう気に入らないか生返事

出嫌いの夫でも留守居は嫌らしい

針供養今日は豆腐の災難日

島根県 錦織 文子

裸木の私語ぼろぼろと聞えだし

山茶花の彩惜しみなく画布にのせ

吹き溜り枯葉同士の自尊心

いちよう燃え小庭自演の秋にする

長持も籠も家宝なり秋に干す(祖先の嫁入り道具)

島根県 大森 孝華

本心は許してやりたい親心

妻と居て風を包む温い風

こと金になって冷たい風が吹き

花道へかかる手前で落し穴

美しく夢抱く人のおひと柄

島根県 松本文子

みかんむきながら妬心は燃えてくる

身勝手なものさし使う人の居て

月からの伝言やがては来るだろう

裏山へ園児小さな旅をする

誇り少しあつて苦しむこと多し

島根県 松本 はるみ

くもりガラスの外でいくさが近づきぬ

牛の佇つ原野にすべて音が消え

いみじくも貴方の胸がそこにある

意地はつた軽い命よ霜柱

門がまえ人になじまぬ人が住み

砂山へ続く結婚行進譜
島根県 藤原 鈴江

芝に寝て大地の鼓動しかと聞く
ひとすじの煙が誘うノスタルジア
小型バイク亡父の夢が今走る
花好きがいつも抱いてる花言葉

島根県

岸 本 輝 水

腕枕今日の休みを灰にする
酒の上だと我慢強いられる
その道に長けて風貌の穏やかさ
お役所で法ぎりぎりを教えられ
痩せ我慢妥協の線は引いておく

唐津市

仁 部 四 郎

二人とも素足になった夜の海
我が庭の苔も縁起が欲しくなり
言論の自由はここだスポーツ欄
スポーツ欄腹は立てないはずで読む
振り向けば折れてくれるか後ろ指

唐津市

浜 本 義 美

寢床から妻の夜深したしなめる
母の乳房は億万の財に勝ち
絆纏を着せられ好々爺にされ
争いを聴きつつ妻は毛糸編む
泣き黒子笑い黒子にして女

唐津市

久 保 正 敏

助手席で足を突張る娘の免許
ライバルの首受皿に見当らぬ

新しい生命を抱いてくる暦
顔振れに安堵は出来ぬ羽づくろい
視聴率ハッピーエンドに向くドラマ

唐津市

浜 本 久 仁 於

元旦や古稀の末座に坐りけり
元旦の首相今年の法螺を吹く
魚河岸の吹雪に躍る初荷旗
街灯の円みのなかの雪の修羅
ひとり酌むさんさ時雨を口ずさみ

唐津市

木 塚 素 石

代議士もタガはめられた選挙戦
おせちにはコビー食品はずさせる
生きているだけで今の世ドラマかな
わびとさび似つかわし秋茶をすすめ
一年の早さ重ねてメ飾り

富田林市

中 村 優

割箸を素直に割ったエトランゼ
眼隠して手の鳴る方へ導かれ
しとやかな三味を乱したポチ袋
カーテンがまっ赤に燃えた朝の悔い
そこからは言うなど見舞へ釘をさし

富田林市

藤 田 泰 子

碩石に輝いていた過去があり
女には女の計算よく解り
帰る子を安心させる厨の灯

道草をたのしみながら遠廻り
雪道を歩く運命の藁の靴

松原市 北野久子

義父のためお昼の笑顔買いに出る
旅先で夫も食事してる頃
お互いに病んで話がよく弾み
孫の守り後に目玉欲しくなる
愛されて愛して聾のままでもよし

松原市 本多洋子

東洋陶磁美術館を訪ねて(二句)

やわらかき慈愛の肌の白磁壺

清々し無心の中の青磁壺

捨て犬の目と目が合うただけの運

手を拭き拭き来たのに電話切れており

酔い覚めの怖さを知らぬさくらんぼ

神戸市 仲 どんたく

霹靂の計を夕刊が持つて来る

ほのぼのとOBの会温め合い

回復期腹のチャックを見せるほど

一本のろうそくだいに古稀の坂

凡人に徹して安き日を泳ぐ

神戸市 山 口 美 穂

十二月八日世代の違いいたく知る

ひもじかった話は信疑の目でみられ
灸すえて老母弘法さんへゆくという

喜劇の中の人生訓が胸を突く
煩惱のくるしみわたしもただの女

和泉市 西岡洛酔

朝霜を踏む天職に甘んじる
寡婦そつと紅取り出した春の宵
昼サロが都会の裏を見せつける
もう一人の俺が御前様の足
つまずいたプランに年の嵩を悔い

和泉市 岡井やすお

外賓が続々歳出またふえる

国会劇終ってテレビ正常化

金出さず作れ作れと新空港

動物に無毒か聞いて河豚を食べ

輸入ガニ値段はタテに上ってく

松江市 梅本登美也

偉方のおっしゃる事に実がない

出戻ってふつと我が身の置きどころ

忘却の彼方にふつと星が散る

耐え切れぬ風が頭の中で吹く

裏切った男が憎い夜の雨

松江市 竹内すみ子

ウインドに飼うマネキンにある謀叛

楯山の凶面は母に渡さない

年暮れてたたんだままの設計図
束の間の倅せかける冬の虹

顔ぶれは変らず風も同じ風

八尾市 山下みつる

姫路市 松浦輝月

息切れの財布を抱いて寝正月

歩くのを日課に入れる年になる

提灯がゆれてまっすぐ帰れない

紛争を他人の顔で見る日本

便利さに負けて都会を抜けだせず

浜田市 佐々木裕

兵庫県 梅谿庵朝翁

一杯のコーヒー恋が行き来する

シクラメン乙女のほほにくすぐられ

倫理感日本の土の拒否に合い

受験にも四年の先の景気読む

新潟の雪の白さに目がくらみ

浜田市 中川幸一

兵庫県 藤後実男

屈折のころ伝える手話がない

両手では足らぬ数学第一歩

人情のカケラを探す都市砂漠

間伸びした顔がそろそろ観光地

良い人を探す会社でお茶を汲む

姫路市 大原葉香

東大阪市 崎山美子

歴訪の世界の顔にあるおごり

虹消えた老後時計に生かされる

色盲の群れへ政治ががなり立て

空の広さに心奪われ木偶となる

コマーシャルお茶漬けの味子に教え

檀原市 岩井本蔭棒

丸髷の乱れを知らぬ母の袴

歴代の城主が語る紋瓦

オベ待つ間家族の絆に支えられ

喪の客を送り仏間で帯を解く

流行に遠い暮らして皆達者

兵庫県 梅谿庵朝翁

率直に言えぬ心にある曇り

もの言えぬ人間うそも楽に言え

畜生も泣いたりほえたりジャレもする

明日からは禁酒しますとお元日

責める方逃げる方にもある理窟

結局は数に追われている孤独

好きな物食べよと言われてから不安

つきあたり金の重さに泣かされる

判一つ押して明日からもう他人

糸電話内緒話がよく聞こえ

後味のわるい別れに酒があり

後味の悪さへ孤独感つのる

同病の体験談にはげまされ

めずらしい体験マイクがとり囲み

落葉たく煙ひとすじ古寺に佇つ

どこ掘ってみても宝が出る明日香
韋駄天の速さを嗤う亀がいる

一握の砂の主張を畏るべし

こわいのはこの倅せが終るとき
ローソクが燃え尽きるのを見て居りぬ

倉吉市

渡 辺 菩 句

地下足袋のゲートルが在る晶子が在る

花野へ足投げだしたまま日は西に

からっぽの頭花野に置いてみる

前代未聞の秋晴と信じたり

枯葉へらへらへらへらと笑い舞い

高槻市

田 崎 あき子

夢を食う糞と暮らしている女

ウーマンリブ女の匂い封じ込む

冬の日に神経細き子の微熱

マニキュアをすれば妖しく若返り

そろばんの掛け算出来ず電卓器

羽曳野市

佐 野 白 水

三井寺の晚鐘三百円の音で鳴り

集印の列へ石段駆け上り

自我没却阿呆か仏になれと言ふ

床上げをしたら市場へ行きたがり

誕生日変えたたい学期試験中

守口市

野 呂 右 近

お早うもお休みもなく夫婦です

続いてた会話くしゃみで杜絶えたり
追われたり持て余してゐるのも時間

うす味のどこかに籠る愛がある

サングラスでは見抜けない人心

倉敷市

斎 藤 通 風

千支になるねずみ善意でみな画き

隅っここの貞女におくる玉の輿

思い出も積むかローカル消える朝

大海に糸を垂らして雑魚をつる

偶数を嫌う男が支那の旅

和歌山県

天 満 三 千 代

順当を時々神様まちがえる

ふくれ面疎外視されている孤独

朝と昼餉かねる日曜すぐに暮れ

明日あるを信じて日めくり薄くなる

赦しとこ心の鬼が留守だから

河内長野市

井 上 喜 醉

行革の箸でつつかれ渦にいる

ゲートボール歳を忘れた笑い声

逆らえば早速いやな影法師

床の間で退屈してる七福神

栄転も左遷も知らぬ車椅子

七尾市

松 高 秀 峰

よく売れる自販機お礼言う仕掛
学歴のない順番に結婚し

化粧品要らない日々の母となり
父さんに旧姓があり母強く
人柄で押しつけられた町会長

貝塚市

行 天 千 代

減量の決心にぶる秋の味
浮いたり沈んだり老いの孤独感
石焼芋電車の中で匂い出し
薬にも毒にもならぬ姑で良し
日めくりをはぐ我が命はぐに似て

高知県

赤 川 菊 野

サラ金の怖さも言うて息子を送り
病床の老父へチャンネルそと変え
才女にはない温もりをたんと持ち
やりとげた心空しい風がぬけ
シナリオを変えて女の翔ぶつもり

加賀市

細 呂 木 魯 木

孫の守りもう要らなくて失業感
命より負担が入院にぶらせる
魔がさしたですまぬ冷たい目が光り
一人だけ探すに電話帳重たすぎ
判定への不服神だけが知っている

高石市

牛 尾 緑 良

男と女やがては風となる出会い
手をあげた痛みが胸でまだうずく
涙した後の素顔は信じよう

負けた日も見事にライバルと握手
群衆の一人が寒い便り抱く

福岡県

横 地 雅 風

むつかしい雅号は八卦に負けた末
人生は祭りだたまに会う恋も
正月も師走も同じ年金だ
停退後男の意地が畑に立ち
難聴の人とは知らず腹を立て

羽咋市

三 宅 ろ 亭

子の年や今年は少しは貯めようかい
新年の誓いは小正月で破れ
肚読めぬ相手へ調子だけ合わせ
親戚でも致し方なし好き嫌い
師走でもゆったりしてる雲もあり

枚方市

稲 葉 星 斗

選挙戦女性候補の目鼻立ち
絶食へ手術はあすと知らされる
手術前女聖書をはなさない
手術後の女トランプ占わせ
全快が近づき手術が嘘のよう

境港市

細 木 歳 栄

宍道湖を我が故郷ともゆりかもめ
欲望か夢のつづきか蟹気楼
朝が来て矢張り昨日と同じ今日
親しげな言葉に今更名が問えず

冗談でひいたおみくじ気にいらず

豊中市 田中正坊

畜生は暦を知らぬ日曜日

OB会黒い頭がそねまれる

にんげんも寂しいんだよ冬木立

裏話書いて乱れた世を稼ぎ

万国旗ソ連とアメリカ仲がよし

町田市 竹内紫靖

口べたの見本のままに技師は古い

横書きの本クスクスと読み慣れる

文盲率減ってスポーツ紙が売れる

手みやげはこっちのパンがうまいので

宇宙からノッシノッシと帰還する

岡山市 井上柳五郎

腹時計いつもめし時耐えた過去

てっぺんに攀登り奈落の底が見え

胸張れという自画像かきつづけ

選挙戦へチリ紙交換わけて入り

十二月きょうも喪中のハガキ読み

岡山市 行吉照路

初詣息子の車でいびきかき

初春を親子縄飛び競い合い

耳かゆい宝くじでも当たらんか

食卓をまた拭いている父の酒

津軽三味心のうさを晴らすまで

仙台市 川村映輝

美辞麗句書いてもらって読む用辞

外米を輸入する分減反し

牛肉を買えと自動車責められる

あかんべえに熱いご声援有難う

島根県 石田清泉

鈴なりの柿さえ鳥に見放され

築地松そこのけ夕陽沈むから

従順な川の流れに教えられ

膳立てを拒んで一人酔うている

大東市 土岐トク子

老いの輪の一人先立ち寂寥感

テーマソング旅情のトレモロ酔いしれる

くちなしの花が別離を追いかける

主の御手にふれた祈りの深からむ

岸和田市 吉水照江

エリートに育て老後は独り者

きめ込みの人形を造りおすそ分け

お鏡も代用品のひとり部屋

商魂をチラシに見せて十二月

岸和田市 芳地狸村

顔見世の招きに女燃えてよし

焼きものと倒れて判る兵馬備

浮世絵の姿に女は嫉妬する

合掌で躰の作法教えられ

東大阪市 奥山 弥山人

反省会敗因終に見つからず
道問えば辻まで送り指をさし
口々に家柄たたえる聞き合せ
口うらを合わせた苦がじらされる

倉吉市 野中御前

金銀のくるまにのつた仏さま
ジェラシーの翼を閉じた揚羽蝶
真実を探してさがして科学の眼
根限りさけんでみたい地平線

唐津市 田口虹汀

頼まれてシャッターをきる露天風呂
お天気と金と休暇が溶け合うて
草千里忙中閑の放ち牛
深夜風呂阿蘇の気が忍びよる

岡山市 岩道博友

風垣をしても噂は越えて来る
減量をしたいが美食へ義理でゆき
高飛車に椅子へ構えている小心
人違い女へ勝手な私語を投げ

交野市 山本テルミ

千とせ鉛カメラを意識した笑顔
旅かばん明日の期待を詰めて寝る
赤い羽根善意の街のバスポート

四国にて

信心を生き甲斐にして残り旅

島根県 木村はじめ

針箱に明治女の灯が絶えず
髪洗う背に再婚を聞き流し
再婚を拒んで女の坐りだこ
真実は誰が裁くか北の海

和歌山市 坂部紀久子

満ち足れば欠けるを月に教えられ
見られない見られたくない二人連れ
水滴は組織の流れ知らぬまま
義理の耳と知らずカラオケ酔うてはる

大阪市 吐田公一

日曜大工棚の一つが高くつき
素人の頃を忘れた師匠風
十字架のお慈悲にすがるユダ一人
急ぎたくないのに急かす下り坂

奈良県 宮川古都路

寒日和うつつに居れぬ草むしり
もみじ散るくるくる舞うて地にかえり
定年へ手持無沙汰にお茶が来る
トンネルの出口に広がる雪景色

西宮市 津山冬子

退院のカルテ裏切る年を越し
世事疎く反省をする老いの日日
喜寿迎えあゆみを語る人もいず
余生まだドックへ入って生きたがり

白選集

妬き損になつたが愛は確かめた
同床異夢汗かいたのが先に醒め
消えぬ罪いくつか持つて長寿逝く
老夫婦目方も減つて背も縮み
長生もしたいし酒も呑みたいし

市場没食子

木枯しへとぎれとぎれの犬の夢
鏡かけ主婦の日課の幕が開き
新年の抱負は酒のある間

本田恵二郎

新潟回天子

いそいそと空気が動く嬉しい日
ちよっぴりと呆けたのもいるクラス会
柿熟れて熟れて童心かきたてる
またしても情に流されそうになり
翔んでるのと乗っているのがにらみ合い

黒川紫香

二十人孫寄り添つて喜寿の宴
一堂にはいれぬ賑やかさ喜寿の宴
これが歌これが踊りと喜寿の宴
今日と言う今日が来れない喜寿の宴
さまざまに暮らしの見える喜寿の宴
荷造りの紐無器用な父が好き
十二月ここは静かに枇杷の花

月原宵明

美しい尼ありすこし枯葉舞う
ついてくる犬とさむざむ冬の道
尾をふつて少し修羅場を切り抜ける
武装する男はとも気が弱い
おじいちゃんが好きと言うギャルに逢う

正 本 水 客

何気ない言葉で心ゆきとどく
友達が一人もいない人と知る

街灯の明りが敵意に見えてくる

虫も殺さぬ背なで女が柿をむく

芝居はええとこで幕を下ろさねば

若 柳 潮 花

事始め句座とは別な膝かこむ

反核の声が地球にこだまする

底冷えの朝は痛みの走る足

忙しい暮れを寝ている玉子酒

除夜の鐘聞いてカレンダーかけ変える

工 藤 甲 吉

世の中は円く生かしてしてくれず

政治屋の舌をみな抜けエンマさま

老人クラブ枯木も山の賑いか

戦前の発禁という本で売れ

人妻のからだの奥に女いる

大 矢 十 郎

日中友好目白の下駄にある人気

ひだり足の冷えへ亡父の血が通う

網の目で泣いたさんまの目が赤い

女房に嘘字教わる原稿紙

同級会儲け頭は自覚して

野 村 太 茂 津

猪突した余力で明ける鼠年

創作かも真似かも先祖の道を往く

創作へ突然変異の実が甘い

盗作の薔薇は咲いても手の傷み

次の世紀も人間であれ同胞よ

山 内 静 水

これからが夫婦三年したら古希

死亡欄赤の他人でないのち

お泣きなさいお泣きなさいと泣いてあげ

小休止おちちの匂う孫だいて

おかげさま十と二貫メ異状なし

藤 井 明 朗

百葉の長ほどほどにひとを恋う

一年の反省ため息うつしあい

肩書の順が生きてる酒の席

喜寿祝とたん米寿へ意欲湧く (柳友喜寿)

念願の新築福が来て坐る (柳友新築)

米 沢 暁 明

口出しをした子のヒント役に立ち
ついて来いそんな自信が持てますか
予想外れあつて世の中面白い
それなりの知恵で間に合う路地に住む
取り消しの取り消しがいる早合点

水 粉 千 翁

生きざまへ見果てぬ夢の長さかな
見殺しに出来ない癖を持つて瘦せ
長いながいなあがい旅の川のどか
約束を果たす素足の道つづく
業も知る玉三郎のおんな道

金 井 文 秋

孤独とのたたかいがある妻の死後
足を知る男の好きなマイペース
ダイエットフード飢えには遠くいる
子供部屋出来て非行の芽が育ち
歳時記を守つた花にある香り

寒中お見舞申上げます

皆々様お揃にてご迎春のこととお喜び申上げます。
小生 発病以来、早二年半 相変わらず歩行不自由な
がらも無事過しております。御休心下さい。

(蓬太郎)

私事昨年二月手術以来一年、大変ご心配頂きまし
たが、次第に元気になり全快も間近い事と療養に努
めております。

(壽代)

近況ご報告旁々御礼申し上げます。

生きてゐる私に今朝の深呼吸 生々庵

授かりし余命尊み初春祝う 小石

昭和五十九年二月

中 島 蓬 太 郎

壽 代

沢山の方々から早々と賀状を頂き誠に有難う存じ
ました。主人もまだベンを持ち難く、私も又無理の
出来ぬ体でございますため、賀状失礼いたしました。
誌上をお借りいたし、お礼とお詫び申し上げます。

小 石

川柳の群像

木村半文銭

東野大八

―芭蕉去って一列しろき浪頭

半文銭

大正末期から昭和にかけて伝統派対革新派の狂乱怒濤の新興川柳運動たけなわの最中に作られた句である。「川柳小康」に掲載。

―荒海や佐渡に横たう天の川

芭蕉

俳聖芭蕉の俳諧革新の情熱を、半文銭は彼なりの視点で、その海に仮託した革新川柳への想いをこめた句である。

俳句のような超短詩型の詩は、濃厚な連想が作者と鑑賞者の間に存在することが予測されるわけだが、半文銭は川柳にもそれを求めた。彼の生涯は人間探求派の川柳人として存在したと誰しも考えざるを得ない。

半文銭(本名木村三郎)は、明治二十二年三月に出生し、昭和二十八年十二月に死去し

ている。その六十四年間の生涯は、貧困と逆境の不遇な灰色人生で一貫している。その暗黒の世界を固太く貫流していたのが川柳というたった一条の光茫だけであった。

半文銭が川柳の存在を識つたのは、三歳年長の小島六厘坊の人と作品からであった。六厘坊は十四歳で川柳に手を染めたが、半文銭は十六歳ごろからである。初号三厘坊

「木村半文銭は、貧乏と川柳を一緒にしている。惜しい男である(土団子喫煙室)」

このゴシップは路郎が日車の筆であろう。「土団子」誌発刊の頃は、六厘坊はすでに亡く、彼の同志は日車と路郎しかいなかった。

「大正八年六月「土団子」のあとをうけて「後の葉柳」を出した。「轍」「失車」「雪」

「土団子」と生命的な新しい運動に没頭していた私(路郎)は、日車君とともに句だけを遺しておく意味から「後の葉柳」を出すことになり、それに半文銭を引きずり込んでしまった形である(川柳雑誌・麻生路郎記)

六厘坊主宰の「葉柳」の頃は、清新な気溢れる古川柳調であったが、「土団子」から詩川柳の傾向を強め、次第に大正デモクラシーを彩ったプロレタリア川柳とも称すべき悲惨な人生川柳を手がけるようになった。

「大正十二年度のいわゆる川柳革新運動に参加して以来、窮迫せる生活のドン底に沈みつつ、精神的にも物質的にも幾多の難関に直面し、あるいは家主より家を追われ、金銭より封印をうけ、妻と別れ、住みなれた土地を去り、三人の幼な子をつれて幾度路頭に迷ったかしのないのだ。この間、屈せず所期の目的(革新川柳)を貫徹するため、同志の陣営に提って文字通り悪戦苦闘を続けた(木村半文銭句集序文・昭和八年刊)」

大正十一年ごろの半文銭は、大阪市郊外の萩の茶屋三日路に住み、砂糖の仲買人をやっていた。つい眼と鼻の先に路郎と岸本水府が住んでいた。水府より路郎との交友が深かったが、毎日顔を出すほど生活にゆとりはなかつ

た。砂糖のほか、その仲間を通じて種々の商品ブローカーの小商いをやっていたが、三人の子持ちながら妻君は少々悪妻の型だった。

結局、半文銭句集の序文のような生活苦が襲いかかり、彼自身は人間疎外的な資本主義社会に反発する社会主義者のどん底生活をするところまで落ちた。

— 主義者の背なに家の定紋

半文銭

— 世はなべて金でう街の霜柱

”

そんな貧苦のどん底の大正十二年二月「川柳小康」を出した。同志は日車、馬場踏二、杉村文象に彼の四人だが、同誌第二号で三十八句を発表し、つぎのような柳論を掲げた。

「或時は求めざるものが偶然、私の靈にふれて、直ちに真の声を叫ばしめる。それは現実苦の一断面が、たまたま私の川柳観念に打ち当って、火華となった刹那の具象化されたものである。この川柳一句の苦悩に、私の全てが捧げられている以上は、良いとか、悪いとかの生温い評語は断じて許さない」

昭和二年「小康」は消えて、変つて「底」が創刊された。しかしここには踏二も文象も去つて日車と半文銭ただ二人のみ。この誌に半文銭は自由律の分ち書を試みている。

— ならぬ堪忍の

浪花節なる哉

そうかと思えば、またつぎのような句

— 私は未来の箸を執る

— じつたかき

官報の中の

ひとり ひとり

「(官報の句) これは私の好きな句であるが、官僚の運命を通じて人生が抽象化されている。一旦、抽象化された想が、さらに、うづ高き官報」と具象化されて表現されているため、革新川柳にありがちな難解さがない。

それに自由律により見られるきこちないリズム感もなく、言葉が自然に流れている。これは古川柳に通じ、十七字調に熱心であつた半文銭の探求の結果である。『川柳平安』作家展望4・堀口塊人) — 傍点筆者

田中五呂八は、昭和三年九月出版の「新興川柳論」の中で「木村半文銭の作品」とめい打つ一文がある。以下はその抄録。

「穿ちも皮肉もウイットすらもが、冷く鋭く虚無的な、懐疑的な、批判主義の意識的表現である。そうした川柳の持つ智性の強味をただ単に人間の上つ面や、社会の上層面にだけ働かして、その上層面を皮剥いた生命現象の最深帯まで掘り下げることを忘れてい

たのが既成川柳家の常識的マンネリズムであつた。川柳の持つ智性に詩の衣を与えよ」と主張するのが川柳革命家であり、自然主義の持つ科学的に生命の深さを与えろと叫ぶのがニオ・ロマンチストである。

新浪漫主義は、澎湃たる世界思潮の大流である。それは決して一時的現象たる流行思想の所産ではなく、その先駆思想たる未来主義表現主義すらもが、すでに新浪漫主義のたどりつくべき暗示帯である。

新興川柳 — 川柳十俳句 — 理智十感情 — 理性十直観 — 哲学十詩 — 西洋主義 — 東洋主義 — 新浪漫主義。以上は理窟だ。その理窟を最もよく生かしてくれる一人に川柳詩人木村半文銭がある。氏は森田一二、川上日車と共に新興柳壇の生んだ名作家の一人である。」

— 杖とめた姿永河も刻々に

半文銭

— 机上より一尺低き民衆よ

”

— 鳥籠の籠の中なる大きな手

”

— これやこの瑞穂の土の一と握り

”

— 客観すれば蜘蛛の糸なり

”

— 元日 — 暮る

”

★次回は「西島〇丸」

誹風柳多留廿六篇研究 (十四丁・十五丁)

本多正範・石田成佳・大屋六郎

八木敬一・鈴木 黄・石田晋一

南 得二・小野真孝・多田 光

故岡田 甫

226 たつねにくひのハ小督より楊貴妃

本多「小督」は右衛門督成範の女、高倉帝の寵をうけるが、中宮徳子との恋の立て引きで、徳子の父清盛の邪魔にあい、宮中に居たたまれず嵯峨野へ身を隠してしまふ。高倉帝は源仲国に命じ小督の局を捜させる。『平家物語』巻六、謡曲「小督」によって知られる逸話。

楊貴妃の方は、貴妃馬嵬で死した後、玄宗の命で方士がその魂魄を捜す。(謡曲「楊貴妃」)

同じ行く方を尋ねるとは言え、小督は在世の身、嵯峨野の辺に隠れ、しかも琴の名手と

手掛りにはことかかないが、楊貴妃の方はいかに方士が捜すとはいえ、霊界にさまよう魂魄となれば、楊貴妃の方がはるかに至難であるとの意。

琴をしらべぬと中く知れぬ所コ

四五・18

楊貴妃は金の草鞋で尋ねられ
石田成「賛。本句の先行句に、

こがよりやうきひたつねにくひもの

安四・信4

多田「賛。

あてどなく出て楊貴妃にひよくら逢ひ

天五・智6

岡田「同。

227 まゝ事のよふなて売れる南禅寺

本多「南禅寺。名物の僧坊の一、聴松院で売る豆腐がよく知られ、本句はそれを詠んだ句である。

南禅寺めんとふくさいもて喰イ

三二・2

瀬戸物屋ほとかたつかす南禅寺

三〇・12

など、小鉢が幾皿も並べられた様で、かなり小さい豆腐のようだ。

八木「賛。私、二十年程前京都に住んでいましたが、その頃よく南禅寺へ豆腐を喰べに(本当は酒呑みに)行きました。今もあると思ひ

ます。

多田||贊。江戸では淡雪。

岡田||贊。八木氏は「今もあると思います」と言っていますが、あるところではない。まるで林立。

228 むつかしき精進をして縁を切り

本多||篇中唯一の縁切寺の句。

三年ハ男ひでのりの旅へたち

三〇・20

たちものハ男とそして魚類也

傍二・11

で、生物知りの身にとつては、つらい。煩惱を断つことはそうたやすいことではないから一口に精進をして縁を切るとはいえ、並々ならぬことであるというのである。

多田||贊。

岡田||同。

229 投出した六位のそはに大ひしゃく

本多||不明。詠史句と思うが故事わからず。

多田||私としては「平家」「源平盛衰記」の文覚が法皇の法住寺殿であはれた時の句と思つていました。文覚が投げ出した「六位」のそはに「大ひしゃく」があつたというわけす。

五位六位などハ文覚ふみたおし 三六・41

岡田||不明、難解句。この故事、宿題としておきます。

230 うたうたひ顔をしかめる禿菊

本多||わかりにくい句。

禿菊糸をきらせるとんだ声

二五・28

という句もあり、吉原の句か。例えば、禿が浅黄の下手な唄を無理に聞かされている情景か？

多田||？

岡田||「禿菊」という名の曲があるか？あるいは名曲といわれる「北州」の中の〈禿菊〉のくだりが、ひどく甲高いのか？そのどちらかと思う。甲高いくだりだから顔をしかめて歌わねばならず、三の糸が切れる場合もある。

231 角田川是から髻の道ハなし

本多||隅田川といえは、浅草観音と同じく新吉原を背景として詠まれた句が多く、本句もその類。

隅田川の両岸は、隅田堤の桜、木母寺、三囲稲荷等々名所古蹟が多く、四季を通じ多くの人出で活況をていする所である。観桜や参詣をタシに新吉原へという輩が多いなかで、

髻ばかりは例外で、隅田川止りというだけの句である。

すみた川男だてらにわたれへず

天四・札3

角田川どつと笑れ髻わかれ

四四・7

多田||贊。

岡田||同。

十五丁

237 船番所越すうち芸子汗をふき

石田成||船番所は水路の要所に在った番所の一つで、江戸の附近では中川の御番所が最も有名。

三味線をにぎって通る船番所

一一・24

三味線をはったりやめて通ります

一一三・10

通行中鳴物禁止につき、その間に手を休めながら芸者が汗をふくといったところ。

多田||贊。

岡田||贊。

水煙抄

黒川紫香選

寢屋川市 平松 かすみ

鼻歌は少しおんちも気にならず

両足にカバン挟んで旅キツプ

ギブスして二月のスキーへ予約する

猷立の種を拾うた市場籠

風の子が探す広場の水たまり

米子市 林 荒介

闇深し祠にゆらく絵曼陀羅

むらさきの絵解きを迫るひとの妻

憶病な耳で枯野に出られない

いきさつはどうあれ猫を飼って居る

冬景色天突く杉を見て昏れる

八尾市 高杉 千歩

雪しんしん不義理ひとつへ長い文

鬼さんどちらネオン冷たい風の街

移り香がぬくし亡母のシヨール巻く

原点にかえれかえろう冬の天

お豆腐を窓から貰う雪しきり

西宮市 紀市 郁栄

佗しさの数ほど年賀状を書く

名刺入れにかくせるほどの金を持ち

神詣でのバスで漫画を読んでいる

書留の声に軽い動悸する

旅に弾む女のぬくい手に気づく

尼崎市 丹下 玉子

コンパスの中で家計の知恵しぼる

モダンダンス妻はこの頃若くなる

緑衣着て楽しく踊る森の精

嫁姑玄人はだしの障子張る

小さくとも輝く石に女酔う

尼崎市 関口 幸子

厄払いする気か鱈とった猫

本棚にマンガ以外は見当たらず

よく笑う娘で味にこだわらず

ハンカチに涙の本音聴いて見る

夜も寝ず昼寝ができる程悩み

藤井寺市 赤木和子

筋書を変えて逢いたい人に逢う
ブランコを揺らして少女期に還る
風もよし雨はなおよし二人なら
昼の月あなたを縛るものがない
くちびるに余韻を冷ます雪を受け

富山市 舟渡杏花

似た色で繕う術も年の功
無礼講を鶴呑みに出来ぬ宮仕え
喜劇ずきの悪友主役持つてくる
からめての酒へ麻痺してゆく良心
檜山の道の整備をせかされる

熊本市 宇野昭代

リハビリの夫に合わず妻の足
呉服屋が成人式へ煽り立て
お願いの手紙へ切手はり忘れ
又許す甘さを不肖の子が見抜き
素人のでんぐはプロになりたがり

尼崎市 田中晴子

掘炬燵だれも知らない仲直り
餅を焼く部屋できている色ざんげ
帯解いてやっぱり緑茶が性にあい
よく喋るタクシー信号無事やうか
日だまりは北風さえもよけて吹く

名古屋市 藤井高子

身をすくめ風の起訴状やりすこす

しきたりへ白無垢少しずつ染める

竹光を振って情が断ち切れぬ
掌に乗せた筈の夫が見当たらぬ
僕もいる写真ビントは僕でない

長岡京市 木本如洲

鬼の角秋へ人間らしくなる
底辺に生きて二の矢に裁かれる
雑踏をぬけてひとりの道がある
気の重い話に帰る月の暈
対話なき夫婦が夜の布団敷く

名古屋市 越村枯梢

夕暮れの市場に庶民の知恵が寄る
資料館の片隅にある肥柄杓
落書にせめて本音を書いておく
2DKの城を覗きにくる野豚
道づれは要らぬ孤高の一人旅

和歌山市 中尾まゆみ

みそ汁に朝のご苦労みつけたり
ごめんねをポツリと母の背にもたれ
消えそうな夢を結んで日記帖
レディとして見つけてほしいチョコを撰り
週末を制服で飛ぶショッピンク

吹田市 井上照子

日が落ちてみかんを持った母待つ子
ゆずられた席に合わない腰の幅
恋抱いて雪降る里のあたたかさ

傷心の掌をあたためる大湯のみ
釣り堀に風走り去り人一人

近江八幡市 前川 千賀子

無影灯の下なら寄り添える二人
一瞬の沈黙受話器にある遠さ
果たされぬ約束がある冬木立
結局はひとり易者の灯を頼り
旅の車窓葉牡丹の白清冽に

京都市 松川 芳子

柿一つ枝に残っている不思議
三面記事六十過ぎれば御老人
シルバーシート年がいてもなく拗ねている
一枚の絵葉書旅情をかきたてる
小さな嘘溜まれば大きな穴があき

高槻市 竹内 花代子

外出への寒さをたしかめる
休診が続く用意の風邪薬
柿をむく指は冷えても部屋は春
初夢の中で逢いたい人がある

東予市 小山 悠泉

テッペン柿北風へしがみつ
ビル谷間のぞかれそうな家に住み
石鐘に童話の雪が降る伊予路
学歴が親子の距離を遠くする

豊中市 満仲 きく子

陰口が少し聞こえた春の風

節分の豆から春になってくる
砂時計などは無視して長電話
おみくじのそばに咲いてる白い梅

大阪市 萩谷 まさ

木枯しの暴れん坊が戸を叩く
雲海のさけ目を縫って陽がこぼる
まあまあネどうもどうもで暮らす国
若き子の目より活気を盗みとる

藤井寺市 前山 美恵子

げんこつをくれた先生好きになる
ランクづけされて不満の三学期
回り道しても大きな家が欲し
一言がやっぱ嬉しい妻である

尼崎市 大江 かね子

ふるさとのうず潮橋ももう間近
交番に届けたオオム礼を言う
おみやげに落のとう買う孫をほめ
本読んで今日の献立出来ました

藤井寺市 前山 とみえ

追い出した鬼が裏から入る気配
穴場の湯窓に来て消ゆぼたん雪
清方の絵葉書みじこう書く見舞
あのことを喋れ喋れと飲まされる

唐津市 浜本 ちよ

白ねずみ弾んで家内まめに生き
つたかづらはかない命燃えにもえ

夫に便乗庄助さんの湯に浸る
鉢植えを移して冬に立ち向かう

伊丹市

榎谷郁子

三百円でパレード出来る二階バス

南座の古さを語る屋根の色

立ち並ぶ北山杉は兵に似て

清滝の紅葉に犬も目を見張る

高知県

曾我部裕

おとなりの客が正座を崩さない

雑兵の掟の中の冬の風

悪友がひとりぼっちにしてくれず

閉まらないトイレが一つ空いている

岐阜市

市川鱗魚

北詠りきつい鼻緒の雪しぐれ

何かいい事のありそな向う岸

生活保護うけて乳だけ子に余り

甘い夫でよく包丁を研いでいる

今治市

矢野佳雲

吊皮の姿勢で会社まで届き

一盛りでいくらと個性見てくれず

警察の前へ駐車をする出前

不図目ざめ妻息災という寝息

熊本市

有働芳仙

夫運悪く紫よく似合い

お声だけ聞きたかったと切る電話

赤ちゃんがあくびしている痴話喧嘩

呱呱の声産湯の虹が美しい

熊本市

高野宵草

タクシーを降りたら白鳥座がにらみ

揺り籠の児の目にママがゆうらゆら

お開きのあとが楽しい仲間の灯

車過剰なげいて僕も乗っている

熊本県

大川幸子

どうしても甘い言葉が好きなら

誤魔化しの利かぬ鏡の瞳がこわい

世相斬る漫画見過ごしには出来ぬ

それからの事は聞くまい娘の笑顔

羽曳野市

麻野幽玄

小春日や残せし万年青植替える

娘より高価な化粧品に替え

一日の寿命で日めくり破られる

まだ生きて居る素晴しき初日の出

出雲市

落合正江

木綿縞亡母の遺品で冬ごもり

陽溜りで孫とおやつの足延べる

お年玉入れる袋を買いに行く

モナリザの笑む喫茶店すきになり

八尾市

宮崎シマ子

初詣でみくじに吉と出た二人

息子の客は明るく楽しい女客

小春日を病んでる夫と粥を食べ

昨日の事水に流して靴みがく

和歌山市 後藤正子

春蒔きの種を両手にあたためる

寄り添えば無口でもいい帰り道

留守わびるメモにうれしい合言葉

ごめんねと素直になれぬ日の焦り

和歌山市 福井桂香

沸点を上げると夫および腰

幸せが続けば涙腺乾涸びる

家族への安堵残したデスマスク

カトレアの赤むらさきへ募る思慕

和歌山市 寺田裕美

充電がそろそろ切れる寝返りだ

雑草の中にひっそり母子草

シャッターにふりまわされる良い笑顔

指先へ燃えつきそうなラブレター

和歌山市 中井栄美子

もうひとつ影が欲しいの月夜道

音程は千鳥足でも子守唄

そっとしてあげよう疵が深いから

真直ぐに来るあの人を避けられず

愛媛県 八塚三五島

台風について約束守りに来

よい天気釣り糸垂れたまま呑気

三重まる母ちゃんの夢はや東大

決意悲しダルマももらい泣きをする

吹田市 栗谷春子

病床に邪心のぬけた顔があり

眠いのには雀の降りた音がする

もみじ朱に鶴の様な座主おわす

炬燵にはいつも蜜柑がおともする

宝塚市 丸山よし津

ついて来る事疑わぬいかり肩

聞き飽きた紅白かけてお重詰め

貝殻を耳にあてると海の音

行く時の放置車帰日も夕陽浴び

高石市 浅野房子

帯解いて夫婦は茶漬けの箸を取る

買物に序でが多い暮の街

年賀客絶えし日だまり猫集う

福は内鬼も時どき間違える

吹田市 茂見よ志子

知るだけの童謡歌い孫寝かす

娘のマンション着る服近所を意識する

帰り身は一人車窓で富士を見る

張った気が一度にゆるみ疲れ出る

高槻市 笠嶋恵美子

石臼の昔語りを聞く根雪

セクシーなドレスに胸が納まらず

サ克蘭ボ熟れてひとりを淋しがり

まっすぐに伸びたい枝もあるだろう

大阪市 古川美津枝

さかずきをふせて茶漬の幸せさ

鍋焼で風邪をとばしている中二
不用意にもらず言葉で出た裏目
不用意に涙落してこまらせる

尼崎市 山田保蔵

ロケットに叱られている夢を見た
老いてからふえる肩書みんなタダ
別れざわ昔はハンカチ振ったもの
まじないで病氣治した過去がある

尼崎市 吉永伊三郎

書き初めに初志貫徹と大書する
海征かば七つボタンの挽歌きく
冬籠りする熊爪は眠らない

墨染めの影が何やら生臭い

尼崎市 春城武庫坊

風花が舞うて墨絵の風山
芸術と云うて女を裸にし

混浴に期待はずれの酒を酌み
坪庭の枝折戸冬がたたいてる

尼崎市 児玉歌子

灰神楽一度は許す妻がいる
仲のよい噂を拾う影法師
うれし泣きさせた男が泣き上戸
借り物の白さへとても気を使い

尼崎市 矢萩貞子

戸締りを忘れたドアに朝がくる

瀬の音をうしろにきいてとる写真
家中のカーテン洗う年の暮れ
公園にきて風と逢う冬の午後

米子市 足立由美子

過干渉自立する芽をつんでいる
両親をたつた一人が振り回し
居心地が良くてか風邪に居すわられ
地平線計り知れない謎を秘め

寝屋川市 岸野あやめ

祖母さんになって漸う出た本音
歌わないカナリヤに似た老いの日々
母の歌子の歌リズム揃わない

姫路市 人見翠記

顔見世のまねき見上げる京時雨
有明の月を見上げた露天風呂
滯八丁岩を指さし紅葉さし

守口市 結城君子

七五三親子の着付頼まれる
青黄赤師走のバスは進まない
嫁に鍵渡して万が一頼み

竹原市 石原淑子

霜柱踏む子の歓声こだまして
雪コンコ積っておくれと子の願い
木枯しを避けて寄り道したくなり

鳥取県 羽津川公乃

それなりに子年めでたく年が明け
二次会にお家がだんだん遠くなる
すき焼の肉待ち切れぬ箸が寄り

大阪市 日 阪 秋 子

飛火して来そうな話を聞かされる

私なぞとてもと女乗っている

夕焼けに明日を夢見る冬木立

羽曳野市 天 崎 只 士

会いに来て無口な顔を見せただけ

カタコトが消えるるとふすま張り替える

自叙伝の中に女が居ない嘘

大阪市 板 東 倫 子

子沢山だれかが風邪を引いている

諦観と決めて呼吸が楽になる

強盗の騒ぎの中を選挙力

和歌山市 神 平 狂 虎

心まで冬には出来ぬ靴の音

思い切り泣いて明日を晴れにする

譲れない位置に男の芯がある

西宮市 山 田 喜 代 子

一日の幸せ湯舟で歌になる

宝くじ夢ふくれたりしぼんだり

天性の陽気ささえる日々

芦屋市 上 田 佳 秋

末っ子が帰郷せぬまま屠蘇の膳

コボレ梅撒くぞ雀よ正月だ
松の内血圧計らぬ事にする

竹原市 佐 藤 令 子

見る人の心のままに瀬戸の海

能面の眼のやさしさに魅せられる

待っている人の時計が重くなり

枚方市 二 宮 山 久

今日も又生きる楽しさ知る夜明け

遠まわりしたのに犬にほえられる

七人の敵へ妻は靴みがく

寢屋川市 堀 江 光 子

振りかえる坂に紅葉の日ざしあり

計算をしすぎて女不幸せ

歳暮来る息子一人前に見え

滋賀県 安 田 志 津

子に譲る数だけ宝石持っている

母の座を下りて今日から姑となる

冬晴やどこまでつづく寺の堀

守口市 森 川 ま さ お

腰の大きい看護婦さんに頼り切り

病室の前やきいも屋ながく待ち

予言者はひとりになると笛をふき

箕面市 坪 田 紅 葉

バーゲンで買った服着ないまま

女の気持うまくつかんだ内見会

十二月に入ってからが早や十日

山口県 高崎 雀声

結婚も離婚も自分を売るスタ

男物干され噂の立つ女

新婚の夫婦待ってる羽根ぶとん

弘前市 真喜内 實

夕焼に摘まれてりんごよい機嫌

雪かむり優しくなった岩木山

農継いで上手になった頬かぶり

大阪市 野田 君枝

レーガンが無事に帰った肩のこり

政見に耳貸すひまのない師走

日本語も中国語もない血のきずな

羽曳野市 吉川 寿美

貝割菜土の温みは知らぬまま

げんまんの小指が冷えてそれも秋

秋がゆく雲が流れる道祖神

羽曳野市 田中 隆二

一夜漬石の重さが生きている

蹴った石自分に当たる時もある

砂に書く愛と言う字は風に消え

高槻市 上原 逸

お元日近所となりも静かなり

元旦はただ習慣で初詣で

葉ばたんをもらって鉢を買いにゆく

米子市 本吉 宗光

四十年風土を越えた孤児の顔

てっぺんの柿の実取れぬから残す

花よりも実のなる木から水をやり

弘前市 田中 叶

肉親の耳にはなおも波の音

万国旗これとこれが悪い旗

日本地図しずかに降りて来る鴉

泉南市 坂根 流水

倫理吐き本音を吐かずこれ政治

精神科安定剤で手をはぶき

下り鮎今年もとどき無事と知る

西宮市 朝山 千世子

かるた取りミカンも春の彩で盛る

鍵っ子の母待つしじまの夕茜

瀬戸ミカン自慢の味が届く歳暮

西宮市 松本 一郎

退け時の人の波には笑いあり

歳月が歩幅の同じ妻と居る

悪友の誘いの電話欲しい日も

尼崎市 佐藤 美代子

一膳めし屋おふくろの味受けている

胸に一もつ愛想笑いで安どさせ

お願いします口を揃えた小雀さん

西宮市 飯森 泰世

通勤の流れに入って歩をあわす
素人の手品もたまたわかる種
訪う家に山茶花ばかり咲いていて

八尾市 松下 蕉 露

国宝の仁王の臍に千社札
冷戦の亭主子供を斥候に
バスガイド大きな子供を連れ歩き

岸和田市 奥 礼 子

山露を煮込んで里の母が来る
五指折ればまた川柳と子が笑う
風邪引いて夫の作る粥の味

島根県 東 原 福 子

夕焼に立てば明日が見えて来る
賀状など書いて師走を丸く居る
宍道湖の夕日にそまる渡鳥

尼崎市 野 瀬 昌 子

医者の手を離れ嬉しい美容院
すねかじり終った息子の口に髭
夜の闇靴音響く団地群

倉敷市 赤 澤 剛

ぬるま湯に溺れて摘まむ鈴の綱
秋風にふるえて掴む藁の馬
真中を歩けど見える虹と夢

西宮市 草 刈 墮 駄

雌猿に人気のあるのがボスになる

正月を森閑として妻蜜柑むく
決算がようやく終り冬木立

諫早市 江 副 二 牛

思い出は遠くで見てたお下げ髪
禁猟区忘れず帰る渡り鳥
思い出の宿ねと金婚まだ覚え

益田市 里 本 たかし

初孫のうんこの匂いきつくなる
日の丸が三本揚って行く充実
2DK塀から薔薇が覗いている

島根県 北 川 民 子

ひたひたと足の音さえ師走かな
茶の花がうつむいている朝の霜
抜歯した顔をマスクで仮装する

水戸市 上 鈴木 春 枝

冷蔵庫の残り片付く主婦の昼
私だけ気分が変わる模様替え
出勤へすでに厳しい夫の背

青森県 波 ただお

モチ米を持って妹訪ねて来
親の目が届かぬ所で娘が熟れる
早朝の新雪を踏む爽やかさ

新潟県 高 野 不 二

子に吞ますにはもったいない乳房
カラオケは結局デカンショ節で終え

女だてら酒の銘柄迄聞いて

兵庫県 森脇和子

うまの合う同士でうまい熱いお茶

お世辞聞く耳は片方だけでよい

贈りものお国自慢の味と決め

大阪府 松尾柳右子

給料の重さ見ぬままオンライン

印刷の門松も見る初日の出

理髪店出でから気付くベレー帽

大阪府 田中節子

素人には出せない味を食べに行く

持主の性格のまま靴ぬがれ

いつ来ても玄関に靴があふれてる

島根県 堀江百代

参観日先生も採点されている

掃き寄せてたき火をしたい落葉かな

窓の外噂話を通り過ぎ

守口市 岸野キミ

寝たきりの母の寝息が静かすぎ

立冬のコケシの顔や細い月

ポーナスを横目で聞いて落葉踏む

和歌山市 山川克子

一人旅手には手頃な週刊紙

黒髪がすんなりのびて良い育ち

訣別の煙も重いティーカップ

大阪府 渡部さと美
ジョギングの息子サザンカ抜けて来る
日だまりへねこ点々と丸くいる
豪雪の話などしてこたつから

襖摺が途切れ笑顔をまた作る

もう二度と来ない会社を振り返る

なぜか今日意外な人にばかり逢う

五つ玉離さぬ父の一徹さ

雨を来た音は封書の母の文字

落葉寄せ好きな色だけ額に入れ

持ち寄った問題解けて栓を抜く

冗談が本気になった女の瞳

先生も平手で諭す愛もある

川の子に寝ていて明日他人なり

煙草の輪吹き上げなにも想わない

戦争を知らぬ世代のデモごっこ

追憶のわが師路郎へまた戻り

唐津市 山口高明

奈良県 早川清生

市民表彰

路地の世話方へ大阪市歌が鳴る

総選挙

路地の世話方へ大阪市歌が鳴る

路地の世話方へ大阪市歌が鳴る

路地の世話方へ大阪市歌が鳴る

路地の世話方へ大阪市歌が鳴る

清潔の党から票を乞う電話

島根県 福岡 芳枝

路地裏の門灯明る寡婦生きる

バーゲンセール亭主は喫煙所で待機

指宿市 渡辺 伊津志

目があったその空白が埋められず
保護受ける庭へ翁の白い菊

自己主張する空缶のよく転び
海面を叩きし鳶の影太し

寝屋川市 立床 晴風

泉佐野市 大工 静子

ままごともし億円のお取引き

仲間にもずるいのが居る朝の雪
はん押ししてもらう頭の低いこと

売出しの折り込みケチも読んでいる

夜中からおかず考え嫁の留守
安売りもせず束のまま花枯れて

着ぶくれた母に良く似た人に会う
しじみ舟夕日に染まる嫁ヶ島

出雲市 小白金 房子

大阪市 権安 達一郎

恋人の居ないコンビがしおらしい

松竹梅活け正月の部屋となり
小商売手をもむ程に儲からず

島根県 高尾 よし子

師の声の思いがけなきはつらつき
うれしいな先生電話くれはった

高槻市 芦田 静江

三世代ねずみ寄りそう年の明け
二枚貝少し覗いて守る城

逃げて来たセキレイの目が人を恋う
喰べるには惜しい四季の京料理

大阪市 今西 静子

西空鳥の群妬く一人ぼち

出雲市 河原 恵美子

ナイロンのてるてる坊主に天気訊く
落葉まで追いかけてみる懐しさ

気の弱い女の嘘が丸くなる
金貸した方が疑い深くなる

広島市 望月 晴彦

手土産を持たせてやりたい渡り鳥

岡山県 藤瀬 比沙子

会えぬ夜の師走さぞさぞ冷たかろ
友の愚痴まだまだこちら軽い方

手に負えぬ子が大望を抱いていた
下手くそなお世辞で庭を賞めて去に

島根県 藤原 秀穂

だとするとないないづくしが幸せか

下駄ばきで逢った娘が今の妻

守口市 長谷川 司

痛い事突いて母さん笑ってる

吹田市 園田 文子

甘言のもうだまされぬ靴の音

丹精の木炭かねの音がする
老木の根元の祠小犬嗅ぎ

柿一つ笠置の山の水子像

鳥取市 湯 邨 色 舞

北風に耐えて奉仕のベダル踏む

機窓よりチョッピリ富士が顔を出し
マンシヨンの窓へはミニの花ごよみ

煩惱は消えず写経で立ち向かう

大和郡山市 岡 田 すみれ

娘より喜寿の肌着は温かく

今日も又幸せだったと皿洗う
何も彼も満足をして子は眠る

夕食と知らせて孫はうれしがり

八尾市 葛 幸 子

女客せんざいのお替りして笑い

孫の歌手拍手打ってから弾み
借金も貯金もなくて出直す日

不便さを言わず空気をほめちぎり

大和高田市 岸 本 豊平次

買物のお釣の中から社会鍋

迫るもの迫り北風俺へ吹く
無遠慮な顔でたき火の輪にはいり

一年の騒音を消す除夜の鐘

鳥取市 若 林 一 止

歳の瀬をただの役職こき使う

道楽と言われ思わぬ金が必要
一言が多い女の四十過ぎ

煮えたかと芋にくっさり箸を刺し

島根県 田 中 ヒデ子

嫁入ってはじめて休んだお産の日

さよならをしてから月を見て別れ
差向いにこたつがさせる孫の留守

気圧の谷が昼寝の時間を引き伸ばし

大阪市 宮 川 木 々

またしてもここがお国で年忘れ

流行となればモンペが街を行き
子の夢の片隅枯れた父の夢

万国旗今年も街に暮れてゆく

鳥取県 岡 山 本 玉 恵

またしてもここがお国で年忘れ

流行となればモンペが街を行き
子の夢の片隅枯れた父の夢

万国旗今年も街に暮れてゆく

鳥取県 竹 治 ちかし

万国旗今年も街に暮れてゆく

流行となればモンペが街を行き
子の夢の片隅枯れた父の夢

万国旗今年も街に暮れてゆく

鳥取県 福 田 あや子

万国旗今年も街に暮れてゆく

流行となればモンペが街を行き
子の夢の片隅枯れた父の夢

万国旗今年も街に暮れてゆく

鳥取県 福 田 あや子

万国旗今年も街に暮れてゆく

流行となればモンペが街を行き
子の夢の片隅枯れた父の夢

鳥取県 福 田 あや子

妻の座でモナリザの笑み確かめる
盲目の恋に遮断機降りそこね

和歌山県 森 三枝子

サンマ焼く太目を夫の膳へ添え
アイデアを拾いに行った文化祭

和歌山県 桜井千秀

美しく老いたいとして逆らわず
いやな奴向うもそんな顔で見る

唐津市 神崎多祢

去年今年かわりばえせぬ松の内
七五三だましすかしてハイポーズ

兵庫県 円増貞子

遠く住む親子取りもつ宅急便
義理を欠きそれが気になり寝つかれず

熊本市 北川一進

言訳は風邪になつて不精ひげ
うきうきとはずむカメラの初写し

大阪市 松本ただし

饅頭を切る様に山肌削られる
蛇の目傘追越してゆく法善寺

大阪市 上田柳影

淋しさに負けたのが居る寄席の中
裏切った子だが気になる吹雪く夜

神戸市 岸脩二

テレビに討入りがでて十二月

木枯しの中をとぼとぼ職さがし

豊中市 上田登志実

金がありや人が計算してくれる
雪吊りの雪に見とれる兼六園

大阪市 章久

効く鼻が寝てる虫出す繩のれん
丸い背を影が伸ばした夕まぐれ

八尾市 椎尾公子

神無月神主やつとのんびりと
菊の香の漂う中の法事かな

大阪市 北山悟郎

先頭が好き何時でも傷だらけ
地下足袋で明日のスタミナコップ酒

岡山市 小林妻子

お地藏はもう米寿らし赤頭巾
子の足音さすが母親聴き分ける

和歌山県 西村重彦

銀盤に舞う晴れ姿名コンビ
母と子のコンビいつでも花咲かせ

八戸市 島田昭治

正座して有難過ぎる長い経
すれ違ふ知らぬ人にも挨拶す

唐津市 前田廣幸

厳寒へ先祖の井戸がやさしすぎ
カギツ子のお返しとなる日曜日

決心がつかず煙草は灰となる
孫のかく一癖ゆがんだ老いの顔

鳥取市 松本みさき

高知県 小澤幸泉

父親が独り平和に暮らす夜
テレビにはのらぬニュースを聞く酒場

島根県 田中ゆきさとう

川柳に味がでて来て人も出来
芸術に美女は裸で引出され

大阪市 平井露芳

千本釈迦堂

大根焚く釜もついでに挿んで来
家に鍵かけない非武装中立論

岡山県 池田半仙

聞き捨てに出来ない性質で胃が痛む
雲もれる陽でも嬉しい寒い冬

大阪市 塩田新一郎

飛鳥路に猿石亀石日が暮れる
畑から鐘が聞こえる飛鳥寺

大阪市 北田秀月

何事かなさんとしてコンビ組む
素人のプランやっぱり間がぬける

兵庫県 浜田雅子

頑張るといったあの人先に行き
年取って幸福そうな二人づれ

一昔前金持ちのいた御殿
半分を親に頼ってハネムーン

泉佐野市 真崎浪速子

島根県 岩田三和

撒きエサに飛びつかない鯉もいる
村のむかし仕事と共に唄が生き

兵庫県 野々口悠也

忍一字朝夕書いて丸く住み
希望の灯一つ消しては齡重ね

兵庫県 脇田米朝

安物のニュースも詰めた市場籠
変化球受けて出鼻をこつかれる

大阪市 朝倉利義

三遊間のコンビをドラフト別れさせ
売れて来てコンビがもめるギャラ配分

大阪市 山脇正之

秘密ですあの番組は見逃さず
企業でもコンビ次第で明と暗

大阪市 堀口欣一

顔見世はやはりきれいな人ばかり
次郎長の遺産か清水ゴルフ場

東大阪市 小林勇人

今日よりは新米ですと値も上り
回り椅子実力ですとおだてられ

米子市 宮本佳女男

天運に金婚迎え得たけれど
賞状も貰えず主婦業半世紀

島根県 園山世似

万歳で国会解散空元気

働き蜂のように今日まで生きて来た

鳥取市 武田帆雀

一バック子供も入れて二バック

食い盛り詰めても空で出す弁当

守口市 森川春子

年寄りのジョギング寒い日からやめ

落葉して万両の実の赤が映え

和歌山県 山田久子

欠点をまるく包んで叱る親

足元を見なおすだけの気のゆとり

《ジュニアの部》

東京旅行

境港市 野口志保
(高二)

誘惑のネオンが招く歌舞伎町

原宿がりズムにのって踊りだす

大東京怖い背中をちらと見せ

米子市 八木しのぶ
(六さい)

おばあちゃんんでんわでんわでよるになる

テントのよこにさいていたむらさきのはな

王さまの月がでてくる十五やだ

岐阜川柳社創立30年記念川柳大会

日時 昭和59年3月11日(日) 午前10時開場
会場 岐阜商工会議所2階大ホール

兼題

「帯」 市川 鱈魚選
「突然」 中江 一魚選
「追憶」 加藤 翠谷選
「勝運」 藤原みてい選
「花道」 橘高 薫風選
「素敵」 森 紫苑莊選
「一流」 磯野いさむ選

事前投句

「三十」 野口 初枝選

各二句・〆切正午

☆事前投句は2月末日までに

〒500 岐阜市真砂町7丁目 野口初枝方

岐阜川柳社「川柳大会係」まで

会費 千五百円

賞 知事賞、市長賞他

岐阜川柳社

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

若柳潮花

子育てがすんでダイヤの話など

江口 度

子育てと言う束縛から解放された女性達の話題は当然ダイヤやヒスイなどという宝石の光に魅せられた話題になるのかも知れない。でもそつした話題を持てる女性達の一日は仕合せかも知れない。但し御主人の前ではあまりせぬ方がいいでしょう。

一度だけ鳴いた小鳥の黙秘権

林 瑞枝

小鳥の黙秘権が利いた句である。鶴の一声と言うが一声でも精いっぱい鳴けたらあとは鳴かずともいいのではないか。女性もまたそつした日が欲しいのでは。

店長へこんなに速く陽が落ちる

小 砂 白 汀

一日中汗水を流して働いている者達にとつて時間は一分一秒でも早く過ぎてゆくことを願うものである。しかし使つ者にとつてはど

うであろうか。全くその反対の事が言えるのである。使つ者、使われる者の考え方の違いかも知れない。世の中は お陽さま西 西金こつちとざれ言のようにはゆかないものらしいですね。

ぶつかった途端に勤をとりもどし

堀江 正朗

最近立派な新居を建てられた由。眼の不由な作者にとつては馴れる迄は、ずいぶんととまどわれる事が多いと思われるが、一日も早く新居に馴れて頂きたいと願う。

注連縄の香で春を待つ鳥居

榎谷 寿馬

新しい年を迎える気持が注連縄の香に出ていて嬉しい句である。耳に聞えるものは玉砂利の音らしい。

「まあ聞いて下さい」腹の立つ話

稲葉 冬 葉

中年女性の井戸端風景のひとこまのような感じがして来る。

なべものの湯気へ五体のネジ外す

西出 楓 楽

寒さが厳しくなつて来ると、何と言つてもなべ物の湯気は堪えられなくなる。五体のネジを外して腹いっぱいネジを外して下さい。

平仮名でおんなと書いたような美女

藤田 泰 子

平仮名で書いたような美女とはどのような女性なのだろうか。女という字も仮名書にするとは漢字で女とするよりも字もまろやかであり全く女性の感が変わつて来る。仮名書きにし

たところがいい。一度男たる者、逢つて見た気がする。

雨をきくゆとりになつて共白髪

大森 孝 華

何となく羨ましい感じのする句。私でなくとも静かにふたりで雨の音を聞いて見たい気がする。共白髪はいいですね。

山の子がそつと貝殻見せてくれ

時 末 一 灯

海というものを見たこともない山間の子供が初めて海を見、貝殻を拾つて来た。その貝がどんな貝であつたとしても、その子供にとつて何よりも一番思い出のある大切な宝物にちがいはないと思ふ。そつとが此の句の生命

伝統の火は絶やすまい黒子着る

奥山 弥山人

伝統芸能を守り続けてゆく人々の中には縁の下の力持ちと言われる人が居る。黒子もその一人である。黒子を着て居るからと言つても日舞の世界では後見と言つて師匠株の方が務めるのである。下五に黒子を持つて来たのがいい。

ひとり暮しかと鼠も怪訝そう

谷 垣 史 好

貧しさにあきれてねずみ家出する

高 杉 鬼 遊

住み馴れて時どき顔を出すねずみ

妹 尾 春 江

今年はね年と言つことで、ねずみを扱つた句が十句程あつた。その内、面白い句を三句拾つてみることにした。

59年度

路郎賞

川柳塔賞

候補作品中間発表

自 58年9月号
至 58年12月号

路郎賞候補作品

(到着順)

正本水客

罪を沈めたままゆつくりと潮が引く

八木 千代

梅漬ける確かな姑の顔をして

高橋 夕花

あいまいな笑いの席を抜けて出る

妹尾 春江

秋風や身のすみずみを繕いぬ

小出 智子

白旗の表も裏も白である

岩田 美代

なにかしら秘密ありそう楽しそう

本間満津子

日々好日菊の白さが極まれり

中川 滋雀

俗中の俗 太刀魚の銀の色

谷垣 史好

家計簿が合わない妻でよく笑う

西出 楓楽

秋深し妻も近くで何か読み

横田 英詩

ブランドの力を抜いてからの揺れ

石垣 花子

舌打ちをしてきりぎりす鳴きはじめ

江口 度

病名を聞けば医学書めくりだし

福本 英子

一日を追いかけられている妻が良い

児島与呂志

内へ内へ自分を捲いて行くも秋

安藤寿美子

黒川紫香

罪を沈めたままゆつくりと潮が引く

八木 千代

木綿針女の意地を押し通す

奥山美智子

うたかたの恋が浮いている小ジヨッキ

福本 英子

今朝もまた同じリズムの卵焼

青戸 田鶴

横穴遺跡ビジネスホテルの跡ですな

西森 花村

灯台が見えると船長眠くなる

江口 度

熱帯夜浴衣でチンと座る姑

奥田みつ子

組板が許してやれとくり返す

角野かず子

秋になりバンは六枚切を買つ

谷垣 史好

花の私語広角レンズがキャッチする

林 瑞枝

寝返ればそこにいつもの顔がある

春城 年代

まぎれなく丸い乳房よ女かな

松原 寿子

適材適所不満は持たぬ枕木で

安平次弘道

鉄瓶のさむいジヨークを聞いている

西山 幸

飴一つ舐めても肥えるかと思ひ

岡田 ふみ

幸か不幸か後記を先に読むという

谷垣 史好

銀行が来て定年の気にさせる

遠山 可住

しあわせな枕は一人しか知らぬ

八木 千代

ステテコへ箸から漏れた冷奴

久家代仕男

どん底を見て来た男の縄ばしこ

岩本雀踊子

脇役でいたい私を攻めに来る

妹尾 春江

トラアルの種を上手に蒔く女

福本 英子

突然に軍歌を歌う妻がいる

山口 虹汀

若柳潮花

橋高薫風

川柳塔賞候補作品

西田柳宏子

保険屋の言う方一が気にさわり
お隣の改築頭までひびく
もっ少し奥まで言わす月があり
手話弾む二人に嘘のない話
峰打ちの慈悲へ男は墮落する
引つ越して空も澄みさる物干場
月二斗米食う猫の数を飼い

野村太茂津

寂しさを秘めて笑いこけている
来世まで添うかと聞くを野暮といふ

野呂 右近
高杉 鬼遊

妻の絵の中に他人が一人いる
花咲かす捨身を種は知っている
色即是空とてもととも話です
泣き声になるから黙って肩を抱く

浦野 和子
玉置 重人

幸せは少し欠けてる方がよい
一本でこれこの通りおらが酒
少年のてのひらをひよこ知っている

植山 武助
垂井千寿子

安らぎのかたちで乳房軽くなる
母の背を流すとたまらなく淋し
寝返ればそこにいつもの顔がある

林 はつ絵
飯田 悦郎

自分でも可愛いとわかつてる

春城 年代
安藤寿美子

輪の中の伴せごっこならよそつ
呆けてからホントの事を口にする

林 瑞枝
中川 幸一

拝観料値上げ伏目のご本尊
クリスタル酒屋の棚に如くはなし

石垣 花子

湖の端から秋はおとずれる
結び目が解けたら切れるかも知れぬ

竹内 紫緒
石倉美佐子

横穴遺跡ビジネスホテルの跡ですな

若柳 潮花
西森 花村

泣きに来る場所でなかった夏の海

舟木与根一

昼寝覚めゼリー固まってるかしら

安藤寿美子

鈍刀で渡り合ってる老夫婦
現代の落人かくれ里がない

直原七面山
西出 楓楽

ほろほろと萩がこぼれる句碑のひだ
朝市に日本の母の顔並ぶ

高橋 操子
川口 弘生

黒い金束のまんまで数えられ
富士山の裏を見て来たひとり旅

妹尾 春江
工藤 甲吉

紅い糸ではほころびを縫えぬかも
台風が腕をまくってやってくる

河合 茂雄
和田維久子
小幡 里風

あめ玉をたっぷり呉れる他人様
美しい女をねたむのも女

藤田 泰子
竹内花代子

他人事気になる程の余裕出来
飛びたくてベンベン草が背伸びする

宇野 昭代
笠嶋恵美子

北を指すことしか知らず磁石老い

栄進の妻は孤独にじつと耐え
下町の血が野良犬に味方する

藤井 高子
井上 照子

いつの日か渡れる虹がそのあたり
輪を画いて輪から出ようとしない妻

日阪 秋子
田中 晴子

短所だけ父親ゆすり母ゆすり
叱られた通り人形叱ってる

片上 明水
足立由美子

深く深く火種を残している夫婦
振り向けば味方は自分の影ばかり

脇田 米朝
丹下 玉子

不器用なままで過したまむし指
妻よりも母である日が多すぎる

田中 晴子
春城武庫坊
前山美恵子

谷垣史好

反抗期第一ボタン掛けてない
ネクタイが踊る新任教師です

矢野 佳雲
沢田 千春

巧言令色 河童の皿がひび割れる

一人言だんだん七五調になり

おそろしき色の一つに鳥居の朱

職安で屈託のない長い足

寄り添えば自動ドアに似た女

メロン買うもてなしなれば鷹揚に

目障りになるから僕の妻にする

悪友をワンクツションにして和み

妻よ出て見ないか犬が二正居る

先生が言うてたと言う口ごたえ

猫の尾を踏んで華やぐ留守の部屋

父代り兄の大きなめし茶碗

生涯を重くはないか甲虫

高杉 鬼遊

子に縋るつもりはないが子を思つ

妻よ出て見ないか犬が二正居る

また逆になるのが怖い砂時計

それだけの人がつたのか冬の月

わからんか何か言いたい女の背

りんどうのうす紫は恋の色

さよならを言うのはよそつ今日は何

米櫃一ぱい五十日はめどがつき

藤井 高子

岸野あやめ

小林 一夫

羽津川公乃

西岡 豊

高杉 千歩

中原 諷人

前川千賀子

土居 耕花

伊沢 午郎

田中 晴子

舟渡 杏花

堀江 光子

松本 一郎

土居 耕花

矢野 佳雲

日阪 秋子

古川美津枝

中尾まゆみ

笠嶋恵美子

高杉 千歩

ロボットの腕曲げたまま夏休み

誤解とけ一際花も美しい

父と居て父と語らぬ置炬燵

ほかに知恵がないので竹を踏んでみる

皮下脂肪おんな真冬をしたたかに

すだち貰いかばすも貰い秋すすむ

真実は一つしかない梅雨明け

旅に出て乳房に似てる山と会う

兄さんの仲間を妹不潔がり

迷い道少し冒険したくなる

笑いたい時もあろうに仁王さん

主婦業をしばし忘れた耳飾り

飲み屋から中元がくるあほらしさ

捨てられた女に似てる紙コップ

古里の駅が一番駅らしい

弔客の中に借金取りがいる

膝少し崩し女に隙がない

新しい医者へためしに妻をやり

焼芋の値段庶民を遠ざける

点と線つなく身障者のふたり

人並みと思つ女が少なすぎ

肛門を看た看護婦に又出会い

松本ただし

西口いわゑ

赤木 和子

津山 刀水

藤井 高子

田中 節子

満仲きく子

藤田 泰子

津山 刀水

本多 洋子

松本 一郎

関口 幸子

岩本 笑子

丹下 玉子

矢野 佳雲

越村 桔梢

小山 悠泉

矢野 佳雲

羽津川公乃

中原 諷人

米沢 暁明

土居 耕花

寒中御見舞申上げます

川柳藤井寺

赤木 和子

前山 とみえ

前山 恵美子

楠 昭子

吉田 つや

中原 比呂志

吉岡 美房

笠原 吸江

児島 与呂志

— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

藤村 女

涙する間もなく祭壇靈柩車

浜本 ちよ

この句の通りズバリです。私のおもいも一つ。身内の死亡、それも急逝ともなればそれ着る物だとか、写真だとか、家紋は何かなど泣く間もなく祭壇が出来、仏様が安置される。ほんとに涙の出る時はお骨を拾う時ぐらいいじんと指の先から涙が湧いて来るのでは？小廻りのよくきく夫で出世せず

有働 芳仙

昔から器用貧乏とはよく言ったもので人には大変重宝がられ、いつもかり出されながらも出世欲など持たない夫で、平社員で定年を迎える健康で器用でやさしい夫であれば家庭は円満。こんな倅せに夫婦の愛が育つ御主人を大切にね。

秒針は刻々時を過去にする

八塚三五島

一分一秒時はのろまな人を待つてはくれま

せん。時間は有意義に、悔いのない人生を、そして歳はゆつくり取って下さい。感銘の句。仏壇がいつもきれいで祖母達者

片上 明水

祖母が達者ならこそ朔十五日と今日は誰の命日とか、お花を取替え掃除してお灯明が上る。これは若い人には仲々出来ない事。仏壇と祖母とで出来たいい句。核家族には見られないし、思いつかない句です。

いたわってやろう働きすぎた指

田中 晴子

仕事を持っている女性、針を運んでる人とか指を使う仕事、今日一日も無事に終り御苦労様と言いたい指。私も同感です。お大切に出品の菊は疲れて戻つて来

竹内花代子

丹精こめて育てた大輪の菊、菊花展に出品したら入賞して閉会になる迄陳列、戻った時は咲ききって色つやもあせて何となく淋しい人生のたそがれを思ふ。花代子さんのやさしい心根が手に取るように感じられます。

人の愚痴聞いて我が身を良しと知る

松川 芳子

女性は愚痴が多い。まして老人ともなれば家の恥を平気で喋る。お嫁さんやお孫さんがどうのこうのと、それを聞く時自分がいかに倅せかとわかる。人それぞれ言いたい事は皆持っているのですね。どうかいつ迄もお倅せを大切に、御主人大事に欲は言わない事。

どんじりに貰うた風邪の重いこと

満仲さき子

莫迦は風邪を引かないと得意顔が最後に貰うとほんとに重いので不思議、ズバリの句です。私もどんじりに貰い、一週間苦しみました。お互い気をつけましょう。

嫌われていてもあわだち草きれ

宇野 昭代

あわだち草の花粉が喘息を起すと、外国から来た公害の草として嫌われるあわだち草だが、広い高原いっぱい真黄に咲いてとても美しい。人に置き替えても言える句。世の中にはこのあわだち草に似た人も多い。

ここだけの話が回る市場籠

脇田 米朝

ここだけの話ですがと言いながら女のお喋りが回り回って話に尾鰭がついて取り返しの出来ない様な事にもなる。下五で女のお喋りが出ていますね。口は災禍を招くの通り、お互いつつしみましょう。

紙面に制限がありますので、次に私の好きな句を上げさせていただきます。

貧しさの中で枝雀に酔っている

紀市 郁栄

それ程でないが心が美人です

平松かすみ

少しだけ北に向いてた水枕

関口 幸子

看護婦の不機嫌ホータイきつすぎる

宇野 昭代

辛口の冷やで寝酒の甘き夢

草刈 墮駄

愛染帖

橘高薫風選

町田市 竹内紫鏘
るのうへはラスト母校は遠くなり
小半日縦書きばかり葬儀場

唐津市 松高多々子
プラモデル戦艦だけは作らせぬ
みそつかすだけが父親恋しがり

西宮市 飯西ミサヲ
寺詣り仏にすがる顔でなし
ちぐはぐな人集つて寺参り

島根県 小砂白汀
歯切れよいカスタネットに煽てられ
影のあるうちはおのれを信じよう

米子市 青戸田鶴
冬木立の中でうつすら寒桜
そのうえになにがあるのか絹の道

笠岡市 松本忠三
偶然の一致に裏があるらしい
八十の母から習うことばかり

島根県 堀江正朗
見られてる目と目と目とを手で探る
暮れの音目にも力を入れて聞く

島根県 松本文子
哀しみのボトルは亡父と飲みあかす
ヒョットコの面外せぬ訳があり

平田市 久家代仕男
貧農の憂いで染まる草紅葉
大国の野望随所に吹出もの

富田林市 岩田美代
神前にさまさまの厄燃えている
老斑は言葉にならぬ悔いを持つ

大阪市 萩谷まさ
秋深く柳も細る中之高
秋深く若者の色濃くなり

寝屋川市 堀江光子
才覚を顔には出さず歳の市
うれしい時もかなしい時も同じ歌

寝屋川市 宮尾あいき
山茶花の去る年おしむ色で咲き
ねずみの目ケネデリーの目によく似てる

寝屋川市 岸野あやめ
春琴の様に世話してやると言い
無器用な佐助はんやろなど笑い

和歌山市 山川克子
見つめ合い雪溶けの音聞く炬燵
斬新な柄は春への挑戦か

羽曳野市 吉川寿美
帯ゆるうゆるうに締めて姑となる
太陽も見事に沈む日は稀か

和歌山市 若宮武雄
所得番付朝餉の家族さりげなし
ロボットの父家族らで充電す

唐津市 前田広幸
ろうそくに無念無想の焰見る
口口市 羽原静歩

大阪市 渡部さと美
絵を抜ける心地で駆けて冬木立
頭だけ出して野仏雪の中

青森市 工藤甲吉
前書も後書もなく人を恋つ
松原市 佐藤藤子

益田市 里本たかし
新聞の首相の顔を憎んでる
留守番の窓へ時々日照り雨

富田林市 中村優
啄木の背文字が重いエトランゼ
銀婚へ幾度替えた夫婦箸

伊丹市 榎谷寿馬
仏には勝てぬ仁王の上り眉
鈍行で着く友情の温かし

高知県 曾我部裕
日向ほこ死の順番を待つように
喧嘩していたのと違つ浜言葉

西宮市 林はつ絵
クッキーが焼き上がり鍵あいている
冬木立少うし太い線を描く

笠岡市 木山遠二
待っている本まだ着かず十二月
貰いもの手に訪なえはお留守なり

和歌山市 西山幸
独りつく手毬の音に責められる
星光るものなど持たぬ身に

町田市 竹内紫鏘
秋深く柳も細る中之高
秋深く若者の色濃くなり

寝屋川市 堀江光子
才覚を顔には出さず歳の市
うれしい時もかなしい時も同じ歌

寝屋川市 宮尾あいき
山茶花の去る年おしむ色で咲き
ねずみの目ケネデリーの目によく似てる

寝屋川市 岸野あやめ
春琴の様に世話してやると言い
無器用な佐助はんやろなど笑い

和歌山市 山川克子
見つめ合い雪溶けの音聞く炬燵
斬新な柄は春への挑戦か

羽曳野市 吉川寿美
帯ゆるうゆるうに締めて姑となる
太陽も見事に沈む日は稀か

和歌山市 若宮武雄
所得番付朝餉の家族さりげなし
ロボットの父家族らで充電す

唐津市 前田広幸
ろうそくに無念無想の焰見る
口口市 羽原静歩

大阪市 渡部さと美
絵を抜ける心地で駆けて冬木立
頭だけ出して野仏雪の中

青森市 工藤甲吉
前書も後書もなく人を恋つ
松原市 佐藤藤子

藤井寺市 赤木 和子
松園にあらずかの子になおあらず

高知県 赤川 菊野
逝く父の背に冬天の星が降る

西宮市 草刈 墮駄
カラッポの財布に不徳が満ちている

八尾市 高橋 夕花
ときどきは欲しいとおもつ花の面

羽曳野市 麻野 幽玄
葬列の先頭を行く役目の歩

鳥取県 林 露杖
義理一つ果たし雪積む音をきく

岡山県 山本 玉恵
たくあんの音が夫婦に有る和音

兵庫県 野々口 悠也
散り紅葉孫の掌よりも大きくて

指宿市 渡辺 伊津志
魚の啼く声して雪の軋み街

今治市 月原 宵明
乾盃も万才もないロケットで

弘前市 真喜内 實
夕焼に燃えてるすすき夢見てる

米子市 小西 雄々
茶の間では政治の話などよそつ

米子市 宮本 佳女男
百歳に照準当てていて余生

尼崎市 西村 かすみ
諦めた女の部屋に窓はない

尼崎市 伊藤 春子
秋の蝶亡びの舞のあとやさき

堺市 高橋 千万子

やり手だと思つ電話を横で聞く

米子市 八木 千代
虹を渡る氷河も渡る雁のみち

高槻市 上原 逸
節分の豆をまかぬか親子病む

岡山県 嘉数 兆代買
人生暮色鏡の中も既に冬

京都市 山本 規不風
霧深き宿に老境の果て想つ

宝塚市 丸山 よし津
つまらない週刊誌買つ松の内

高知県 松岡 三吉
流し台の下から妻が金をだす

今治市 矢野 佳雲
水道工事水の澄むのを待つて去に

大阪市 西森 花村
箒の目自分の引際考ふる

富田林市 藤田 泰子
火祭が終つて闇が深くなる

八尾市 松下 蕉露
下戸の身を女将の部屋の長火鉢

米子市 澤田 千春
渡られぬ岸で手をふる遠い亡夫

倉敷市 藤井 春日
正月に飲む約束の友が逝き

米子市 雑賀 美世
遠ざかる音は追つまい一人旅

名古屋市 越村 枯梢
ぬいぐるみ中味はぼろであつたとて

近江八幡市 前川 千賀子
霧晴れてみれば枯野に続く道

京都市 都倉 求芽
見逃がした名所を駅の家内図

尼崎市 春城 武庫坊
無人病室冬の光が余つてる

島根県 榊原 秀子
野苺をふくむと聞える夕焼小焼け

豊中市 満仲 きく子
良い鬼もきつといるいる年の豆

鳥取市 森田 熊生
煩惱を捨てて炎の色をみる

吹田市 栗谷 春子
荒れた庭植木屋一存あるらしく

唐津市 浜本 ちよ
買い物にちらし一枚別に置く

鳥根県 堀江 芳子
芳子さん芳子さんと夫こき使つ

唐津市 山口 高明
口上を言うばかりで陰に居る

高知県 小澤 幸泉
この人のどこに惚れたか倦怠期

高知県 川口 弘生
ちよつとだけひがみも混る暮れの酒

大阪市 岸野 キミ
還暦へ不景気な顔して居れず

守口市 松川 杜的
歌も下手踊りも下手でお酒好き

京都市 浦野 和子
考えりや今日一日しやべつたは妻とだけ

和歌山市 福田 あや子
実篤の画のじやがいもは本物で

鳥取市 福田 あや子

円い石転んだ数は覚えな

八尾市 山下 みつる

ジーパンの娘が神妙に針を持つ

兵庫県 脇田 米朝

筆先に心の隙を覗かれる

唐津市 仁部 四郎

この賀状二分足らずで書いたかな

奈良市 宮川 古都路

お礼心行きたい旅を妻にやり

吹田市 西川 景子

繰り言を聞いてほしさに町の風呂

羽咋市 三宅 ろ亭

もの言わぬ物と対話ができる歳

名古屋市 藤井 高子

時々夫嫌いの菜指

西宮市 奥田 みつ子

お互いの弱味握って仲が良い

長岡京市 木本 如洲

鈍行の駅まっすぐに山へ向く

米子市 本吉 宗光

化粧したまま寝るのかな前衛句

岡山県 池田 半仙

正調という民謡の土臭さ

和歌山県 中尾 まゆみ

聖なる日チョコも耐えてる片想い

和歌山市 福本 英子

抱いて欲しい母の乳房が老いている

鳥取県 奥谷 弘文

目高には目高に似合う浮き沈み

岡山県 岩道 博友

肩書の裏を読まず気名刺呉れ

大阪市 上江河 勝子
風むきへ掃けば落葉もつっぱねる
西宮市 朝山 千世子

ミカン剥き在りし日語る置炬燵
和歌山 岡井 やすお

泣きそつ顔で万歳解散劇
岡山市 川端 柳子

ウエディングマーチ教室の窓は雪
高槻市 田崎 あき子

再審で人情法の下に負け
愛媛県 八塚 三五島

耕すに畑無く雨詠だけはやれ
豊中市 田中正坊

良きこともあるかと思ふ雨戸繰る
西条市 片山 明水

勲章を貰って腰がしゃんとする
岸和田市 原 さよ子

我儘を通せる淋しさに気付き
尼崎市 児玉 歌子

赤裸々な親子の情が絵馬にある
西宮市 津山 冬子

矢を放つとき口笛を吹いて見る
吹田市 西岡 豊

土下座して事件の風静ませる
弘前市 田中 叶

いま起きて飲む水過ぎるものありし
多紀郡 奥野 テル

地下足袋を履けば仕事の詩になる
宝塚市 吉田 笑女

人生よつらい別れをくり返す
和歌山市 神平 狂虎

背伸びして自分を試しているグルマ
河内長野市 竹中 綾珠

新茶飲む贅沢位は許されよ
吹田市 井上 照子

冬の風さすが老木受け流す
島根県 田中ゆきさとう

あやしたが結局泣いたまま返し
守口市 森川 まさお

後頭部よく似た孫が生れてき
守口市 結城 君子

不機嫌を見抜かれました電話口
高知県 山下 登舟

風邪気味の妻と仲良く玉子酒
堺市 大道 乙女

鍵っ子が夕陽へ石を蹴る不満
豊中市中桜塚三丁目13-15

投句先 千560 橘高薫風宛(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題「咳」 選者 橘高薫風

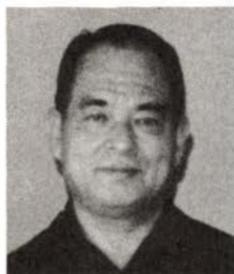
締切 2月10日

(ハガキに三句以内)

投句先 大阪市東区馬場町3-43 NHK

発表 2月26日(日) ラジオ第一放送

午前10時から



中筋三幸氏を悼む

川柳わかやま主幹

野村太茂津

人間をやめたいような日の師走 三幸
予言のような、入院前師走の句である。川柳不毛の地を耕し、和歌山市に川柳の種を播き、故麻生路郎師、清水白柳師を講師に招き川柳人を育てたのが三幸さんである。

「川柳普及啓蒙」を掲げて、講師には現川柳塔理事長西尾栗先生や橘高薫風編集長、ゲストには漫才作家の元祖・秋田実、その弟子の

不二田一三夫や、作家の花登篁、藤本義一の諸氏を招いてお話を聞いたりした。川柳の苗に水を遣り肥しにするためだった。

しかし彼は特異なワンマンで、句会に参加出席する者全員が「お客」であった。現在の我々の句会の運営方法とは異り、彼一人で自社の事務員に裏方をさせ、句報柳誌の編集をする人だった。そのため三幸さんが病氣や、御身内の要件、社用のハプニングが起きると句会の運営編集も休まねばならなかった。

そのため我々は再三残念な気抜けをしたものである。あるとき熱心な有志だけ集り意見を出し合い、運営のことで談合し、意見を開陳、アドバイスしたが、「諾」は得られなかった。

休刊中のある夏のこと（昭和45年7月）故

垂井葵水氏が、「たもつつあん、これではどうにも仕方がないではないか」と相談を持ち込んで、現在の「川柳わかやま」を創刊した。月日が流れて、三幸さんも再開したので、我々も句会に参加していたが、相変らず以前の状態の繰り返しであり、だんだん遠退していた。

「三幸川柳教室」として初心者を集め、盛會になつていったのは、菅井智水庵氏の大きな梃入れによって、益々盛んになつていった。その矢先に東京女子医大病院に入院、動脈瘤手術、ふく代夫人の献身的な看護の甲斐もなく、「川柳」に熱い思いを残して、路郎師の待つ雲の峰に行つてしまわれた。

生前は思いがこみあげると夜半でも、私に電話で話しかけたり、彼を訪ねて談合するたびに「俺の方で智水庵さんと二人で、皆のレベルを上げたら、君の方へ勉強にやるから頼むよ」という、三幸さんの情熱に打たれて帰つたのも再三である。

まだ若い六十三歳、惜しい人を失つた。川柳のために悲しい。

「川柳教室」は智水庵さんとふく代夫人で続けてほしい。私もあらゆる助力を惜しまない。どうか安らかに眠り下さいますように。

三幸さんの播いた種は花をつけ、実りつつ

昭和58年12月30日

午後10時43分逝去

法名 真行院祥光徳

享年 63歳

ある。さようなら三幸さん。

合掌

中筋三幸先生を偲んで

菅井 智水庵

三幸先生が亡くなられたという報らせを奥さまから受けて、息のつまる思いがした。十日ほど前に、いつものようにドスの利いた口調ながら、極めて軽やかに「東京で動脈瘤の手術をして来ます。留守をよろしくお願いします」とお電話を受けたが、まさか大晦日の深更に無言のご帰宅をされようとは夢にも思わなかった。

三幸先生から地元の新聞社協賛の「三幸川柳初歩教室」のお手伝いを頼まれた時も、到底その任にあらずとお断わりしたかったのだが、先生の短詩型文学、特に川柳に対するこれまでの並々なぬ情熱をよく知っていただけに、むげにお断わりできず、お引受けしてから三年、微力な私が、こんな難かしい、分り過ぎた仕事を続けてこられたのも、先生の情熱に惹かれたからである。

今は学校の先生でも、高校までは押しなべて「教諭」だが、私たちの時代には小学校の先生は「訓導」と称していた。先生は川柳の道で、その「訓導」を終生貫いてこられた人だった。後進の指導にあたっては「教諭」でも「教授」でもなかった。ご自身、いくら実力があっても、決して小学校初級の生徒に微積分や三角函数を押しつけるようなことはしなかった。一プラス一を噛んで含めるように教える人だった。

先生が亡くなって、この「三幸川柳教室」の支柱が失われた形になった。「私が死んでも、この教室の灯は消さないでほしい」と、いつも口癖のように言われていたが、こんなに早く現実のものになろうとは思わなかった。これからは、どうあってもそのご遺志を継承しなければならぬという、背負い切れぬ責任を痛感している。諸先生方のご指導を心からお願ひ申し上げます。

昨年の十二月月上旬、朝日新聞から「仲間と川柳を楽しむ」というテーマで取材を受けた。その掲載紙は、ついに先生のお目通しが得られなかったが、その時も先生は「一読して分からない川柳は作者の責任。初心者に教えるのはたいへんですが、半年もすればたいい形となつてきます」と吐露しておられた。そ

尼 緑之助氏（出雲市）より

句集「生かされて」出版記念として

金一封

ご寄贈いただきました

川柳塔社

村上千穂様（奈良県）より

故春巳氏満中陰供養として

金一封

ご寄贈いただきました

川柳塔社

して、請われるままに「師走」をテーマに詠まれた句、

人間をやめたいような日の師走 三幸

しかし、まさかこんな形で、師走の三十日人間をやめてしまうとは思っても寄らなかつた。先生はご自身の天命を知っておられたのだから、うか。

話しかけそうな遺影に別れ告げ 智水庵

柳界展望

集録・板尾岳人

まされ、本葬は1月26日(木)午後一時より和歌山市鷺の森別院にて取り行われた。

★58年度第14回唐津市文化祭川柳塔唐津支部1周年記念大会が唐津市文化館にて同人多数参加のもと盛大に催された。

★第30回観桜川柳大会

★中筋三幸氏(和歌山市)は昨年12月23日、東京女子医大病院にて動脈瘤を手術されたが、その後の経過が悪く12月30日午後10時43分不帰の客とられた。謹んで哀悼の意を表します。密葬は1月2日親族のみで済

★第18回岡山県芸術祭文学選奨川柳の部に同人小野克枝さんの文学選奨の授賞式が岡山市のまき山会館孔雀の間にて行われ、まこと

▽お便り△
■川柳の町・久米南町の句碑の写真が毎日新聞社発行

水煙抄(追加)

西条市 片上 明水

寝ころぶと空の広さが倍になる
コンパスの輪で分けられた敵味方
呼子笛詰まって遠く子と離れ
補聴器へ足音ばかり十二月
焚火の輪順に話を継いでゆく

のエコノミストに載っていました。

(林 瑞枝)

■河村日満氏の後を継ぎ鳥取県川柳作家協会の会長を務めることになりました。日川協の全国大会をひかえ重責を果たすよう頑張りたいと存じます。

(小林由多香)

■長野文庫氏文部大臣表彰の通知と共に西条市の片上明水氏を文庫氏と二人で同人の推せんを致しました。明水氏は川柳塔社への縁は浅いけれども、柳歴20年、西条市役所の課長職にありましたが、数年前職を辞し県下で川柳活動を致してお

(水粉 千翁)

ります。

新同人紹介

波多野 五楽庵
— 甲吉・薫風推薦

高須賀 金太
— 与呂志・敏・笑風・喜醉推薦

(月原 宵明)

兼題||舌・事故・つなく・家庭

▽句会案内△

■東大阪川柳会

時・2月25日(土)夕6時

場所・東大阪市社会教育センター1-2階

兼題||心境・別室・酒・グルーブ

■西宮北口川柳句会

時・2月13日(月)13時

場所・西宮中央公民館

兼題||寒い・底力・自由吟

■富柳会

時・2月20日(月)13時

場所・富田林駅すぐ中央公民館・資料室

兼題||漬物・泣く・見栄

■菜の花句会

時・2月10日(金)夕6時

場所・西郷会館

素人

森井菁居選

言ひ訳をするから素人らしくなる
素人の腕をスカウト見逃がさず
素人くさいところが魅力の居酒屋で
素人が結んだ帯でずれてくる
素人の限界発言がずれている
失敗も素人だから許される
素人にしてはうまいとほめてくれ
素人と見えぬ素人名人会
陶芸展素人ばかりと思われず
素人はだしなどと素人をおだて
其の道の以外はやはり素人で
素人はこわい恐さを知らぬから
女にない素朴さの味が受け
安来節踊る農婦の背が丸く
知事賞から素人が狂い出し
プロにならなければ日本一だった
脱サラがたちまちかぶる不況波
素人のヒントもほしくなるピエロ
ファイルが惜しくて壁を乗り切れず
思う事ずばずば素人だから言え
素人浄瑠璃阿波のおつるに泣かされる
素人がプロの真似して火傷する
この棚は日曜大工にまかされぬ
素人が登る梯子の上が無い

与呂志 一進
景子 三吉
静歩 克子
弘朗 やすお
かすみ 兼治郎
有 人
節子 軒太楼
房子 脚色のない素人の人生譜
可住 素人のくせに外野がやかましい
満津子 素人芸お国訛りの味がある
正坊 素人の振るサイコロなら信じよう
雄々 素人を拾って捨てるマスメディア
可住 刃が欠けたまま素人の道具箱
右近 天
美穂 素人の凶星に何と答えよう
里風 軸
文平 変化球投げて素人自滅する
婦美子 玉恵

素人で通せば光る芸であり
素人は客に呼ばない名士劇
素人も素人もない阿弥陀くじ
大物を釣る素人の中に溶け
素人の舞台は庶民の中に溶け
素人ならここままでよい舞扇
素人の芸を集めてボランテ
アマチュアの誇り五輪へかける
素人の選挙に落とし穴があり
経験は問わぬ募集へ年齢差
鐘三つ鳴らしてプロへ撞れる
素人の蝶が羽化するネオンの灯
素人の不運はプロに勝つてから
素人のこだわりのない句が天位
素人の眼に下手糞なピカソの絵

千秀 四郎 虹汀 七面山 喜代子
秀 郎 汀 山 子

歩

政岡日枝子選

毎朝を歩くよるこび持つ夫婦
嫌な世を忘れて歩く古都の旅
根性というりハビリの道歩く
歩道橋足の先から冷えて来る
六十路まだ彼岸目指して日々歩く
へとへとでやっとノルマの万歩計
道のりを歩いて来たんだ共白髪
車椅子終生歩く夢捨てず
登山道までアスファルトなるのかな
ひたすらに歩いた道を子に残し
宵宮の参道頭が歩いてる
旅好が地図を拡げて目で歩く
広告に偽りがある徒歩五分
真直ぐに歩けば強い風当たり
歩きましよう老いは足から来るそう
寂しさが歩く背に出る釜崎
セールスと言う名で歩く決意する
歩けるときに歩こう腰が痛み出す
人生を歩く善意がまだ残る
矢印に沿って歩けば寺へ出る
お先にどうぞ歩いてゆきますよい日和
歩き方までが似てきて父の年
ちよっとだけ前を歩いた人生譜
たそがれてとぼとぼ歩きりぎりす

弘朗 あき子 浪速子 司 ちよ 幸一 多々子 右近 宗光 文子 高明 玉恵 本蔭棒 はじめ よ志子 久 保夫 素身郎 与呂志 墮駄 天彦 芳水 恵美子

集 路

ここからは歩きなさいと言う紅葉

目標のない歩みだから疲れま

歩かねばならぬライバル追ってくる

廻り道歩いて運を待ってみる

髪切つてひとり歩きがまだ出来ぬ

近道を歩けば苦しい坂がある

そんな事聞けば歩いて見たくなる

歩き疲れて話は弾む石地蔵

この道を歩けば塔が見えてくる

峠歩くそこに極楽ありそう

妻の影踏めば痛いと言われそう

言い張った嘘がひとり歩き出す

影武者が歩いて騙す敵味方

エリートと歩けば疎外感の風

当り前なのに歩いた歩いた

手さぐりで歩く一歩の重いこと

佳

少年の特権前へただ歩く

この俺と離れて歩く影法師

歩くだけ歩け父さん此処にいる

一歩ずつ歩いた道は忘れない

歩を合わすいつか一人になる日まで

人

歩くものと思ひこんでる足をもつ

歩調とれとれと闇から声がする

地

妻として歩く最後の骨抱き

天

軸

歩き足りたのかほほえみのデスマスク

コンビ

宮園射月芳選

フルムーンオールドコンビの名場面

病床のコンビへカンパ届けられ

病床へコンビ嬉しい顔を見せ

三遊間コンビをドラフト別れさせ

足並が揃うてコンビゴールイン

五つ子のコンビシャッター音続く

良いコンビ何時も話せる距離におり

名コンビ組んで首脳陣不動

ライバル意識秘めてスクラム組むコンビ

コンパスが揃うコンビはよく走る

銀婚で夫婦の箍を締め直し

退社ベルそれぞれ指に来るコンビ

いやいやで組んだコンビがテコとなり

小屋つぶれ師走の風に立つコンビ

カラオケのコンビで妻に危ぶまれ

ヌーボールの夫に妻はこまねずみ

ジョギングは犬とコンビで朝を吐く

二人三脚日暮れて遠い峠茶屋

四十年タブーも知っているコンビ

与野党のコンビで国会幕をひき

政権へコンビくるくる風見鶏

われ鍋にとじふたコンビで添いとける

気の合った二人酒好き旅も好き

楽屋では互に無口な名コンビ

お互がライバルコンビ伸びてゆく

顔に傷コンビの靴の人生譜

雰囲気を芸に溶かして名コンビ

母と子のコンビに弱い審査員

コンビ解消次の選挙に出るつもり

里神楽おかめとひよつこ呼吸が合い

名コンビと言われ抱いてる不発弾

コンビ組む相手をチラと眼で探り

コンビから解放されている笑顔

一人では出せぬコンビの味加減

孫程の彼奴と酒はいいコンビ

あの帯を結べる着物持って居ず

客の前夫婦コンビでおもてなし

よいコンビ気の向く旅の温泉が溢れ

万才大賞コンビで磨く高架下

お互いの灯りで前を見るコンビ

お互いの灯りで前を見るコンビ

はつ絵

佳

娘だるまに夫婦喧嘩を笑われる

母と娘のけんかはギャグで稼げそう

相手のトチリにアドリブでるコンビ

ご互いの貧乏くじは言わんとこ

工事場にコンビが来ない火が煙い

人

もともとは他人コンビは弱いもの

夫婦茶碗小さな傷では捨てられぬ

神様が呉れたコンビに付いて行く

雄々

重人

よし津

はじめ

ひで

赤木和子

景子

あやめ

あやめ

あやめ

山久

虹江

木魚

満津子

泰世

千世子

武水

悠泉

達子

静子

幸一

木魚

兼治郎

地

天

満津子

廣幸

廣幸

初歩教室

題 — 運 —

本田恵二朗

- ボケットに彩り揃う運の糸
 毎日を好運にすこし凡夫婦
 (毎日が好運過ぎて凡夫婦)
 運不運の岐路に無情な風が飛ぶ
 (運不運の岐路に無情な風が吹く)
 健康と努力ひたすら運を待つ
 (健康と努力で運の糸つかみ)
 子が病んで運のよい家崩れ出し
 (子が病んで運がそっぽを向きそめる)
 大吉のみくじ今年の運を賭け
 (おみくじに子年の運を賭けてひく)
 運不運風にまかせてケセラセラ
 (ケセラセラ運も不運も風まかせ)
 落ちこんだ末に運勢ももらい
 (落ちこんで八卦に運を聞いてみる)
 落ちこんだ果てに八卦の戸を叩き
 (夢想だにしなかつた運今開き)
 夢想もせぬ運に出合つてちとあわて
 (夢想もせぬ強い子連れて行き)

さと美 同 克子 同 ひろ子 同 愛子 同 小愛 同 紀雄

- 運鈍根皆寝てる間に運掴もう
 (みんな寝ている間に運を掴まねば)
 信号の色がかわつて運開け
 (信号が青に変わつて運開け)
 (青信号みたいに運の戸が開き)
 努力の蔭に寄り添う運の神
 (努力の蔭にしのび寄つてた運の神)
 こつこつと汗の苦勞へ運が向き
 (汗の苦をいとわぬ道で運に会い)
 戦争が変えた運命まざまざと
 (戦争が変えた運命にあやつられ)
 (戦争が変えた運命にあやつられ)
 金運と縁無い律義子沢山
 (金運と別に子宝ばかりふえ)
 男運女将は今夜も泣き上戸
 (男運悪い女将で泣き上戸)
 お多福の女房と添うて不可も無く
 (お多福と添うて可も無く不可も無く)
 行く先は矢切りの渡しにまかせよう
 (運不運矢切りの渡しにまかせよう)
 岐路に立ち賽は振られて運にかけ
 (岐路に立ち振られた賽に運を賭け)
 もつ一人母は日日待つ結婚運
 (あと一人の縁運願う母ごころ)
 幸運の美酒に酔うおとし穴
 (幸運の美酒にもあつたおとし穴)
 あんなにも良い人なのになぜ不運
 (なぜだろう善人過ぎて不運過ぎ)
 ゴキブリの運がみはなし逃げられず

同 幸泉 同 まさ 貞子 柳右子 サワ子 同 美津枝 同 吉子 同 よし津 同 照子

- (ゴキブリの不運逃げ穴見つからず)
 失敗をとにかく運の所為にして
 (失敗の言い訳運の所為にする)
 悪運の強い方ねとおだてられ
 (あみだくじ運がよければ走らされ)
 (あみだくじ運が良過ぎて走らされ)
 本物の指輪で運のない女
 (にせ物の指輪で好運拾い当て)
 百円を拾つた幸運募金する
 (募金箱へ拾つた百円生かさされる)
 菊の花祝儀不祝儀連別れ
 (菊の花祝儀不祝儀連別れ)
 運不運だれが決めたか歩くのみ
 (運不運は横を素通りするらしく)
 (好運が横目でちらつと見て過ぎた)
 九は努力一は運だと言ふけれど
 (強運だやれと易者は無責任)
 (強運だやれと易者は軽く言い)
 運は天に任せて善人欲張らず
 (負うて来た苦の種共に成長し)
 (苦の種と仲良く伸びて苦にならず)
 占師金運女難なしと言ひ
 (金運も女難もないと易者言ひ)
 開運をアルミの賽銭打つて待ち
 (運の戸をアルミの賽銭であけるか)
 (運の戸をアルミの賽銭でこじ開けた)
 運勢に縁なく趣味が多岐になる
 (運勢に縁なく趣味の枝繁り)
 同 忠広 同 かつみ 同 あや子 同 久子 同 脩二 同 ちよ 同 一止 同 みつる

福運と縁はないけどくじを買う
運ですと首位打者軽く受け流し
根よりも運に任せる人がふえ
(根よりも運に頼るも時代相)
開運暦買って師走の街急ぐ
週刊誌運勢欄がみな違い

同 やすお
同 同
春枝
同

(週刊誌の運勢欄がみなはずれ)
運がつきはじめたとたん気にかかり
(つきそめた運に心配つきまとい)
好きだから悪運なんか気にしない
(運なんか気にはしません好きな道
てのひらの運は今年も来てくれず
てのひらの運が今年もこすじまい)
当らぬも八卦を当てにまでも立ち
素晴しい手相にぎって釜ヶ崎
八起き目の達磨が乗った運の波
(八起き目の達磨が運の波に乗り)
その運も努力でいくらかカバーされ
(不運暦を努力で幾分かカバーする)
欲からむのへ幸運はついて来ず
(欲の虫だと運の神知っている)
運命のいたすらいつもすれ違い
(運命のいたすらまたもすれ違い)
悪運の強い男で脂切り
運を天に任すと捨てるように言い
(運は天に任すと捨てるように言い)
金運が無いと貧乏甘んじる
(金運が無いよと貧乏が負け惜しみ)
また追われる運を野良犬知っている

同 同
山久
同

志津
同

素美
同

保夫
同

同 同

ふみ
同

兼治郎
同

同 同

同 同

同 同

(野良犬はどうせ追われる運と知り)
運うらまぬ残留孤児の目が哀し
(残留孤児の不運うらまぬ目がかなし)
こつこつと種蒔き芽が出運も出る
運試しこつこつと長蛇の宝くじ
(運試し列長々と宝くじ)
バス停におくられて乗れる運のよき
(終バスが運良くおくられて乗れました)
今日の運天氣に任すのんびりと
(今日の運のんびり天氣に任せとき)
事故にあい運のよしあし紙一重
(運不運は紙一重だった事故現場)
心がけよければ運も回いてくる
(心がけ良いから運に惚れられる)
再婚へ運命線など欲しくない
非常口近く奇蹟の人となる
若咲きの出世は運も加算され
出走馬喜怒哀楽の運背負い
開運の扉はいつも開いてる
努力家に運がこつそり加勢する
幸運の扉となった非常口
不運だと未練太鼓が鳴り止まず
嫌われて転動したら運が向き
福運をさすけ給えと鈴を振り
伴せの船に運良く乗り合わせ
運命を背負いながらも虹を描き
開運の達磨に値札がつけてある
運試し石ころボンと蹴ってみる
万分の一秒と言う運もある

同 同
芳水
同

よ志子
同

同 同

武水
同

歌子
同

同 同

柳五郎
同

同 同

幸子
同

同 同

同 同

同 同

十字路で運の行方が迷い出す
秘めた意地運の強さのなかに見る
拒んでも不運の糸が伸びてゆく
同 同

(恵二朗短信)
『小ねずみが年輪一本持って来た』
一本だけでよかった。二、三本束にして運
んでもろては困るのである。この一本を生き
た年輪に仕立上げるように皆んな努力しよ
うではないか。

題一境界 2月20日締切(4月号発表)
宛先 岡山県倉敷市下津井一―九―三四
◎七二一 本田恵二朗

若葉集

(川柳塔十二月号より)

一休みしてから
頂上遠くなり
竹原市 佐藤 令子

(寿馬)

本社 一月句会

会場 なにわ会館

七日 午後六時

ものプランクはあつても、近いうちには川柳塔に手堅い句風を培う大きな力になられるだろうと結ばれた。

今月の月間賞杯は和歌山の福本英子さん。席題二、兼題一の天位獲得という快挙。おめでとつ。

(史)

(受付—与呂志・庸佑・敏)

出席者—与呂志・庸佑・英子・メ女・は

つ絵・武庫坊・年代・寿美・鬼遊・栞・太茂
津・勝美・隆一・敏・只士・水客・寿馬・形
水・文秋・右近・喜風・三男・覚然坊・白兔
狂虎・蕉露・紫香・重人・白水・健司・潮花
凡九郎・滋雀・小路・天笑・月子・狸村・み
つる・史好・鎮彦・弘生・幸・正坊・登志代
柳宏子・可住・泰子・智子・みつ子・山久・
萬的・頂留子・公一・柳伸・浩一郎・たつお
冬葉・英子・春蘭・恒明・勝晴・静歩・規不
風・射月芳・悦郎・吸江・雀踊子・あいき・
度・楓楽・吐来・弥生・薫風・洋子・岳人・
寿子

席題「吊る」 遠山可住選

吊るされた服たくましき汗のあと
初年兵吊るし上げてた悔いがある
大根を吊ると田舎の景になり
吊り皮にもたれてはく顔になり
吊りしのお前も春を待っている

鎮彦
与呂志
文秋
天笑
メ女

出稼ぎの父ちゃん待つてる吊るし柿
勲章を吊って漫画になつてゐる
ウィーナスの腕に値札が吊つてある
開店の花輪に顔がぶら下り
カレンターの吊つてる部屋の電話番

千羽鶴祈る心で吊るされる
ひきつった顔を鏡に見られまい
取りあえず鴨居に吊るす転任地
吊り皮へ今夜も残業だと言おう
単身赴任吊りつ放しの日が流れ
首吊つた真似をどれだけした事か
吊皮にまだ新年の酔いがあり
首吊りによい枝ぶりをほめてゐる
出稼ぎの父は帰らぬ吊し柿
干蛸つるして海峡の絵は暮れんとす
吊り皮にもたれて今日を逃げてくる
首吊りのサイズに合わず年の暮れ
鼻先へ吊るにんじんは許されぬ
吊り皮に飯面はずしてぶら下り
中肉中背上から下まで首吊りて
吊り橋で迷つと霧が深くなる
吊皮に定年までを運はれる
吊り下げた中から捜す僕の服
シャンデリア吊る夢を見る宝くじ
短冊を吊るして父の部屋となる
水褌は枯らさぬ慈母の吊りつるべ
ダイエツト吊しの服が合う日まで
雪吊りが眼に浮く雪の日の別れ
首吊りがヒタリで夢のない思

重人
水客
射月芳
英子
年代
狂虎
鬼遊
吸江
恒明
萬的
はつ絵
英子
はつ絵
天笑
三男
柳伸
楓楽
凡九郎
幸
弘生
寿美
正坊
たつお
吐来

同じ会場、同じ顔ぶれながら年あらたまり新春初の句会ともなれば、おめでとつ。の挨拶がそこそこで交され、やはり嬉しく楽しいものである。その中でご多忙は重人さん。今年も恒例、短冊交換のお世話でご苦労さまでした。

58年度本社句会全出席者(三十名)と、月間賞杯永久保持(正本水客氏)の表彰が行われ、本年初のおはなしは橋高薫風氏。

元日のNHKテレビ「川柳天国いい気分」にご協力を願つて好評だったことに礼を述べられたあと、還暦を迎える川柳塔の記念行事への協力を重ねてお願いされた。

去年出版の「なにわ川柳この一句」を書店で買って読んだと旧友の早川清生氏から電話があり、作句をうながされたところ、早速に水煙抄に投句があり、非常に嬉しいと、清生氏の旧作を披露、鑑賞されて、その視野の広さ、作品の仕立て方のうまさに触れ、二十年

吊るし柿都会へ消えた娘を案じ
 吊るし柿ぬくい日差しと語りあう
 もう来ない人の丹前壁に吊る
 吊皮にしばし主張を伏せておく
 吊り橋で夫婦の絆考える
 吊るし柿仲の良い子が山にいる
 信心を吊って老後を身構える

席題「フェンス」 河内月子選

フェンスない友人ばかり新春の酒
 フェンス越し小さな好意届けられ
 笛吹いてフェンスの穴を抜ける風
 フェンスが不安で垣根また作る
 文明の悲鳴をオイルフェンス聞き
 四面楚歌わたしを囲うフェンス欲し
 フェンスの向うで嘘の花が咲き
 フェンスから覗かれてるとは知らず
 フェンスを一步入れば鬼となる
 開けっ放しの生活でフェンスなどない
 フェンスでもめると女も負けていず
 フェンスの高さで生活見下ろされ
 フェンスでしきられるやろか人
 フェンスして狂う日もある女独楽
 情のないフェンスが続く風の街
 フェンスの向うで虎が又負けた
 出しやばってならぬ心にフェンス張る
 フェンスの向うため息聞こえない
 値上りを待つフェンスも破れかけ
 ブロックをフェンスに変えて伸直り

月子
 健司
 蕉露
 重人
 吸江
 英子
 可住

フェンスが貼ってあるのは人の土地
 フェンスの死角で敵が覗いている
 肩の力抜いて心の柵外す
 犠牲者が出てからフェンスとりつける
 フェンスから隣の見栄が漏れてくる
 国境のフェンスにきつとある覚悟
 政治家と庶民の間にあるフェンス
 フェンスを挟んでお伽ばなし聞く
 フェンスに雑草の意地しがつつき
 元気のある蟻でフェンスかけ登る
 天国と地獄を分けるフェンス際
 フェンスのなかで春の芽動き出す
 フェンスぎりぎり好アレー珍アレー
 ライバルの球がフェンスを越えてくる
 フェンスなどあるから越えをみたくなる
 どちらからともなくフェンスを越えていた二人
 フェンスの高さを月が笑っている
 高いフェンスを破ることだけ考える
 フェンスのまん中へんにあるたるみ
 楽園か獄舎かフェンスの中の猿
 お隣のフェンスを好きなバラのつる
 境界のフェンスが見てる地獄絵図

柳伸
 弘生
 潮花
 只士
 文秋
 楓楽
 与呂志
 庸佑
 はつ絵
 あいき
 与呂志
 滋雀
 凡九郎
 悦郎
 浩一郎
 みつる
 鎮彦
 白兎
 喜風
 度

健司
 雀踊子
 楓楽
 柳宏子
 寿馬
 幸
 武庫坊
 規不風
 雀踊子
 鎮彦
 天笑
 年代
 恒明
 浩一郎
 楓楽
 吸江
 可住
 太茂津
 健司
 射月芳
 英子
 月子

兼題「点滅」 宮西弥生選

点滅すざれどロマンの灯は消さじ
 漁火の点滅じつと見てる思慕
 点滅のネオンがうつる涙壺
 赤信号点滅してる胃と寝起き
 山上の点滅誰の恋の灯か

点滅をする火へ男吸われゆく
 航空灯点滅夜が生まれている
 パソコンの点滅に人使われる
 赤信号点滅ですよというカルテ
 コンスタントな点滅にある安堵感
 点滅の信号女は走り出す
 山茶花の散る時点滅する如く
 点滅のグラスふるさと遠くなり
 点滅の灯にメルヘンとなる影絵
 ネオンの灯点滅しきり都市砂漠
 点滅を盲導犬は心得る
 紫の点滅がある母の夜
 点滅へ女の意志が強すぎる
 ネオン点滅人買舟の女吹
 点滅の目玉がにらむ不法者
 点滅の六畳の灯は不眠症
 漁火のまばたき別れの波の音
 灯台の点滅涙のUターン
 無視されてとてもかなしい点滅灯
 点滅がどこまで続く風の音
 点滅は一度もしない青い地図
 点滅を気にせず踊る風見鶏
 点滅に気づかず墓穴掘っている
 点滅へ一期一会の人想つ
 点滅が悲しい別れをさす絆
 点滅の記憶は母のこと母のこと
 点滅の合図へ父の目が光る
 点滅に真心欲しい朱の女
 点滅する灯台嘘はつかぬ海

形水
 柳宏子
 蕉露
 三男
 柳宏子
 月子
 与呂志
 可住
 右近
 恒明
 可住
 月子
 雀踊子
 狸村
 栗
 滋雀
 柳宏子
 幸
 健司
 浩一郎
 悦郎
 悦郎
 浩一郎
 たつお
 悦郎
 栗
 英子
 悦郎
 萬的

その時に点滅してたのは黄色
点滅にしてからホルモン屋ようはやり
弥生

兼題「じわじわ」 江口 度選

じわじわと軍靴の音が高くなる
軽い荷も距離がじわじわ重くなる
じわじわと思秋期火種を溜めていた
コーシヤル通りじわじわ効いてこす
柳宏子

凡九郎
氣のせいも手伝いじわじわ毛が生える
ライバルがじわじわ伸す棒グラフ
じわじわと謎かけてくるつけ黒子
じわじわとこられ手汗を拭いている
じわじわとあとで応える京言葉
じわじわと日脚が伸びる早春の音
じわじわと五体に迫る老いの影
女文字妻にじわじわせめられる
天笑
山久
栗
鎮彦
年代
寿美
たつお
弘生

なや・けんのすけ

「掌紋」

《句集紹介》

谷垣史好

タテ14・7cmヨコ9cmの手帳サイズ。一頁
一句建て84頁。ポケットにも入る小冊子だが
この句集が発する放射能は誠に強烈である。

はからずも私は、日野草城の「ミヤコホテル」
連作を連想した。昭和9年、今宵妻となりぬ
を大担に俳句にうたったこの連作は花鳥諷詠
を事とした当時の俳句界に大きな衝撃を与えた
が、かんじんの場面は省かれていて龍頭蛇尾、
微温的という批評を受けねばならなかった。

「掌紋」所載の約80句は、まさにその省か
れている部分―性愛をテーマとしている。

痴言やがて神のうたともなりゆくや
こころが地底かマグマ燃える中に融け
奥ふかき脈動に果つ木の実かな
なにゆえにかくは適うと呼吸迫る
ようせろと海熱しきて再び喪

「今まで川柳の私たちが避けて通った、あ
るいは試みても成し得なかつた霊肉一致の愛
を斯くまで美しくうたいあげていることに驚
く。格調の高さ、内在の重さ、リリシズム
に貫かれたその美しさ。至難のわざである性
愛(というテーマ)をここまで純粹に書きき
った川柳がかつてあったであらうか。(時実
新子・解説より)

■申込先 姫路市鍵町40 時実新子宛
■頒価五百円、送料二百円、切手可

じわじわと袋のねずみになる地球
じわじわと母の葉が効いてくる
じわじわとキナクさくなる世界地図
じわじわと効きます女の酌いだ酒
じわじわと手抜き工事へ水が浸み
政治地図底でじわじわ変化する
鍋じわじわ煮詰まり外は雪になる
じわじわと時刻が迫る失語症
じわじわと原爆脅威増して来る
じわじわと行つてもトンボに羽根があり
じわじわと隙間広がる倦怠期
善人の悲鳴がじわじわ聞こえてき
言い勝つてじわじわと来る自己嫌悪
じわじわと右へカーブをきる日本
じわじわと足の裏からくる不況
背筋からじわじわ凍る不況風
じわじわと素顔に戻る爪をとき
じわじわと春の支度をする小草
じわじわと軍拡軌道にのせて来る
じわじわとロボット人間追いはらう
持久戦という漢方薬にする
よるこびの酒はじわじわ効いてくる
じわじわと氷河期が来るポタン鍋
毛穴からじわじわ滲み出てくる小言
湯豆腐にじわじわ解けてゆくしこり
清物の味じわじわと石に耐え
コーシヤルじわじわ財布に効いてくる

頂留子
泰子
みつ子
萬的
たつお
みつる
萬的
正坊
右近
悦郎
覚然坊
水客
蕉露
敏
武庫坊
吸雀
滋江
覚然坊
洋子
楓楽
白兔
狸村
史好
幸
泰子
与呂志
度

兼題「頭」 谷垣史好選

空っぽになつた頭の隅に欲
ライバルへ頭ひとつが追い越せぬ
頭から言へば尻から解いてゆく
角栄が読む善人の頭数

空っぽの別に形を見る昼の月

中味もう尽きた頭でサンマ焼く

思案もつくれぬ頭でサンマ焼く

努力かも知れぬ頭かも知れぬ

頭から馬鹿にされてる柿の種

頭でつちの話を黙って聞いている

借金が頭にあつて笑えない

本を積む頭の錆を落とすべく

頭数揃えば用のない頭

悪人になれず頭を掻いて寝る

頭ごなしにくさして呉れた温い声

怒鳴つてる声は頭の上を行く

漫才を聞いてもほぐれない頭

切りかえなアカン頭と知っている

頭数だけで勝つとは限らない

ロボットの頭信じて生きるのか

頭からモテぬと決めてはるお方

大根の白さを知っている頭

頭目になるとお髭が欲しくなる

肩書があるから頭下げておく

石頭やがて孤独になるだろう

ぬくい飯が取り戻せない頭骸骨

頭から数えてくれる位置にいる

ライバルの頭伸々禿げてこぬ

頭打つ顔が見たいとほつとかれ

幸一
赤木和子

耕花

吐来

たつお

右近

英子

弘生

寿美

水客

可住

楓楽

隆二

右近

吐来

健司

幸

滋雀

文秋

幸

天笑

健司

弘生

紫香

頭数揃えば戦したくなる

頭から怒鳴り自分に負けている

頭から信用されて言い出せず

頭ごなしに怒鳴つてからの風の音

頭数敵もまじっているだろう

頭は動く針のない時計

頭数のうちでも力になるらしい

頭かすに入れて置くよとさり気なし

ぬるま湯の中から頭は出しよう

頭で考えると神様が逃げる

一月も七日頭を切換えろ

兼題「表情」

西尾

葉選

ヒョットコの表情もして聞き上手

表情がとつても好きな泣きぼくろ

表情のやさしさにすぐほだされる

表情を読んでセールス坐りこみ

表情を読んで主治医無表情

口惜しさが表情に出る人の良さ

明暗の表情残留孤児帰る

表情を変えない冬の鬼瓦

表情をかくす表情読んでいる

年代

メ女

水客

楓楽

雀踊子

蕉露

洋子

水客

楓楽

射月芳

史好

耕花

英子

年代

正坊

勝晴

狸村

正坊

紫香

重人

滋雀

吸江

メ女

モナリザの表情女からもらつ

もてたこと言つても妻は無表情

無表情な祈りが神に近くなる

表情を盗まれ話が明日になる

表情も変えず一点みつめ出し

懐しめ女将の表情もつ変り

冷たい表情心は炎えている

つかれ切りましたと寡婦の無表情

修羅を経て表情慈悲にみちてる

表情を少しくすずし初鏡

心すぐ表情に出て善人で

表情がまるまるしてると子と出会つ

地獄から抜けて表情生きてくる

表情に笑みが戻つた恢復期

無表情まだなおらない苦勞性

風の日には灯台守もいい笑顔

よく喋る九官鳥の無表情

表情がやわらいできて恐くなる

ポーカージェイスのとでもうまいのが社長

親切を疑つている表情さ

水仙のような表情もつ女

バックした顔表情はくすされぬ

父と子に表情のない朝の膳

月子

泰子

静歩

滋雀

右近

英子

あいき

右近

はつ絵

潮花

楓楽

鎮彦

只士

頂留子

頂留子

紫香

悦郎

水客

度

恒明

智子

潮花

英子

(清記・楓楽)

■訂正 1月号46頁佐藤藤子さんの私の一句
を次の通り訂正。

ひとひらの欲も持たない春の雪

雑用の中で見付けた人生訓

雑用を追って追われる年となり

雑用に振り廻されて十二月

雑用へ情とどかぬ嫁の位置

雑用を手帖にメモし妻が病み

お茶の間に未生流という柔和

川柳高知

幸せにとつぷりつかり飢えている

花言葉はしい私は造花です

口封じ何処かに穴が開いていた

シャンテリア吊す農家の応接間

隅このテーブル只今恋愛中

謎ときのうまい男の水心

紅白の幕売り出しの華やかさ

叙勲記事何のかがわりない暮し

セールのいじらしい程低姿勢

落ちそうな眼鏡で座る会計課

掌の温み消えないまま別れ

座ぶとんの足らぬ句会が盛り上がる

ひれ酒に罪をかぶせる悪い酒

たいくを恋の炎でもやしたい

盆栽へ値切るつもりつけ

翠洋会

胡耀邦角の選挙にタイムینگ

ため息が聞える坂の戻り岩

山の神怒らしてから植樹する

ひとすじに燃えて紅葉はやがて地に

独歩

三つ江

寿満湖

雄々

とめ子

苦句

松風報

菊野

千鳥

千鶴

佳風

三吉

草風

康子

竹萌

春枝

青果

弘生

広風

登舟

幸泉

影法子

綾子

景子

仙吉郎

光子

昭子

オリオンが映えて烈しく燃えるもの

計算機無愛想に出す億の数

踏ん来て来た花道けわし舞う紅葉

もう人が歩いたら足らしい雪の朝

正月元旦から物足らぬ物足らぬ

耳よりな話はそつと妻に告げ

耳よりの話が飛び出す縄のれん

孝行の耳を明治の父に貸す

聞き馴れた亡母の小言が耳にある

嫁姑言いたい事も半分です

半分は化粧で作った珍しさ

金持ちの子に貧乏の美しさ

金持ちも同じ三途の渡し銭

金持ちの門灯一番早く消え

濃厚なお人でしたと敵もなし

二枚舌ある日突然もつれ出し

社長からお呼びがあった肩たたき

死期せまるベッタに燃える草紅葉

進学を望む所に子は行かず

好調の目に見さわやかな虹の色

方調で友を見つけた縄のれん

胸のうち見すかすつた年月の沓え

あの時の旨さを喰べたい熱の床

帆船のいくさを知らぬ美しさ

もう耳にしたのか噂まきに来る

川柳しんぐう

貧乏のついでのように怠けてる

みつ子

あき子

兼治郎

薫風

武助報

希久志

狸村

一二三

さよ子

礼子

浪志子

富速子

ゆづる

幸代

照江

春栄

世界人

ことう

満政

甘平

射月芳

ひで

武助

白光子

操子

白水報

忠雄

怠け者向きの製品発明展

ゲートボール老いにふれ合いある温さ

ゲートボールで茶飲み友達まで射止め

診察券ゲートボールに見捨てられ

家庭田満ゲートボールの音沓え

ゲートボール足腰の灸笑い出す

太陽を素通りさせぬ妻の竿

空を蹴る姿で地下足袋干してある

豊かさへ干飯作る知恵捨てる

作業服干された形で乾ききり

甲ら干す亀に焦りを見抜かれる

初めての司会を終えた酒の味

初めのも一寸酔ってる披露宴

花嫁に後光がさした名司会

結婚式名司会者が泣かされる

初めての司会慰勞の拍手湧く

わかあゆ川柳会

たつぷりと秋の味舌つづみ

舌先がうるさくなって年をとり

なぜだなぜ焙岩流の地獄絵図

掌を合わせ目とじても鬼は住み

おみくじはなぜか私に嘘を言い

家中が笑いころげる孫の舌

おふくろの舌に習った秋を煮る

なぜ怖いかわい我が子の苦なもの

金積めは自由が買える法はなぜ

豊かなる乳房の乳がなぜ出ない

ふみ

三千代

千寿子

武雄

緑良

幸

狂虎

溪水

すみれ

大輪

道子

勇太

十郎

平和

昌子

富子

朝子

敏明

世似

惠美子

秀穂

民子

輝水

ヒデ子

美栄

英子

清泉

百日草ぶしつけな目をさげずます
地下足袋になぜかお金が集まらぬ

川柳わかやま

堀端

ハンクリーになれば見事な画が描ける
切り返す言葉に花をそえてある

温室の見事な花が匂わない
剥がされたメッキ見事な嘘で塗る

苒つぶす女の見事な嘘を聞く
人を見事に騙して砂の味を知り

貯金帳見事に減って行く師走
両親の短い見事に娘につがれ

母といふ足跡見事な花咲かす
お見事な世辞へ本音がいい出せず

建て前と本音を見事使い分け
無警戒の弥陀にすがっている素顔

真心のノック警戒ゆるみ出す
古傷をつなぐと警戒心になる

鍵束の数だけ警戒心がある
他人を恠い他人を警戒して生きる

肩書がとれて警戒がなくなる
難を抱く近寄りたない眼の動き

さりげない話で警戒同業者
警戒の網をくぐっているスリル

正々堂々警戒線の裏をかく
警戒をすぎてチャンスをもた逃し

警戒と無防備な芝居する
無警戒雑踏を往く身の軽さ

警戒警報まだ覚えている耳の底
警戒を解けばどの目も温かい

番犬がなついで警戒心を解き
苦勞買う明日の自分の為を買う

天痴人 白汀 三男報 芳郎 凡九郎 克子 太茂津

メ女 狂虎 紀久郎 十郎 千寿子 稚代

凡太 武雄 光代 富子 大輪 三二代

紫香 登志代 紀美女 正子 和子 信子

きみ 正博 英子 裕美 真琴 緑良

冷笑を買う生真面目に気がつかず
一生の不作お互い買っている
余りにも見事に負けて敵を賞め

金で買えぬ人柄買つてくれた役
夫唱婦隨見事阿吽の呼吸あい

正義感他人の喧嘩買つて出る
美少女が買つ父さんの痔のくすり

観劇券やる当てもなく二枚買つ
妻に買つ土産は小さい物にする

労働にまけて買わせたコンパイン
帯買つて女心静かに揺れてます

月に土地買つて毎晩眺めよう
毛皮より妻に勲章買つてやる

夕風へきれいな明日を買いにゆく
目標を外し近くの旅を買う

騙されておこ見事な嘘だから
お見事な受賞ともあれ馳せ参す

川柳ささやま 河原みの報

大らかな笑顔に胃薬など要らぬ
薬にも頼りお不動さんにも頼り

流石旧家土蔵に残っていた薬研
梅干が薬毎日一つたべ

市場籠中味は嫁とほぼ似てる
市場籠子供のお顔も入れてある

市場籠子の笑顔を隅により
独り居の晩菜籠の隅に乗り

真心がいつも市場の籠に乗り
得心の上で判押す日の誤算

得心のいかなないままで酒にされ
札束で得心先祖へ詫びる香

許すとは言わず送つて来た初着
数え唄一番星へ手をつなぎ

水客 まさ子 柳宏子 勇太

天彦 栄美子 豊太 庄平

漢水 三枝子 公子 武庫坊

春江 幸子 三男 年代

米朝 文平 みのる 越山

やよい 一盃 素水 靖子

貞子 百合子 百合子 テル

可住

数え唄十まで唄って嫌われる
一つとや二つと数えて子の育ち
かぞえ唄人の道説く一つとや

駒つなぎ川柳会

里 小路報

機嫌酒おねだりをするタイムミング
切り札を握り反証聞き流す

ひたむきな姿ノルマを追いかける
少しいじきな姿で初冬の道を行く

ジープの好きな女の母性愛
地下街の死角にあつた落し穴

証拠があるような話にひっかかる
菊の香に酔う日本語の美しさ

帆船の雄姿を競う秋の海
ゼロふたつ消せば好みに合うのだが

宗珠 一盃 翠公 柳宏子 重人

萬彦 鎮砂 真風 規不

邦晴 善信 健司

佳句地10選 (前月号から)

藤田泰子選

しばらくは夢を見ていた貝割菜
支払いをするのにこんなに並ばされ

海へ向く墓はドラマがありそうな
老婆はボケた写真がお気に入り

秋風の誘いにわくら葉のつてゆく
銭湯で又良い下駄とはき違え

宝石はきらいと妻が言ってくれ
まじないが効いたか夫は一直線

冬の日に神経細き子の微熱
反響を受け止めていた日のだるま

静子 圭水 静子 光重

シゲヨ シマ子 みる 覚然坊

あき子 小路

地下街を出る度違つ場所になり
 疑いはあるが証拠が見当らぬ
 老いてきた証拠を笑う針の穴
 不発弾がかえてあいつ酔っている
 程々に酔つて丸味のみしき
 姿見に女ごころの隙を見せ
 影の無い姿が羅漢の瞳の中に
 飼育されいつか好みの味になり
 追従者上役好みに合わす色
 税務署がうるさいからと領取書
 反論をお待ちします証拠品
 面白いことに証拠に気づかない
 仕置場の底が賑う虹の町
 気にくわぬ妻の好みに目をつむる
 ちよっぴりと妬心がのぞく酔い心地
 頂点で人の姿が見えますか
 雨の日の空白地下街のコーヒー
 疑いを持たぬ証拠の手を握る
 やりくりを誰も知らない暗れ姿
 べっぴんに見える分だけ酔っている
 紫を好む女で花を活け
 雑兵の背にペーソスがある屋台
 地下街の風のぬくさに騙される
 地下街でおろき鳴いて秋深し
 とても意外な人が握っている証拠
 傷口が痛む悲しい酒に酔う
 健康な証拠に妻がよく笑う
 詩を好み春の音譜を探してる
 流れ星証拠残さず聞となる
 紅はいて今日のノルマへ立ちすがた
 酔ったから言うのじやないは父の癖

凡子 射月芳
 千代三 潔
 美津枝
 一志
 幸生
 文秋
 覚然坊
 萬楽
 凡九郎
 信義
 甘平
 小路
 花仔
 楓楽
 美代
 二二三
 史好
 恒明
 鬼遊
 恭太
 弘生
 春蘭
 浩一郎
 雀踊子
 天笑
 悦郎
 美幸
 柳伸
 不二夫

法廷で首相本当の姿出し
 子の極漫画の本を入れてやる
 地下街にとり残された時の恐怖
 米子きやま木川柳会 石垣
 朝やけの気まま知ってる秋の靴
 片親の子へ渡し船まだ来ない
 掌に受けた朝陽歎び湧いて来る
 対岸の花へいそいそ橋渡る
 渡し場に来るまでの路崖の路
 ぬかるみを渡ると先が見えてくる
 美しい会釈の朝を振り返る
 虹を渡る氷河も渡る雁のみち
 渡せない財布を別に持つておく
 世渡りを小刻みに聞く秋の道
 背を向けた日もある父の橋渡る
 母さんの弾む指から朝が明け
 彼岸まで渡る錦を今日も織る
 川柳塔まつえ 恒松
 グッドバイ言わずに死んだ九官鳥
 昭和史の縮図が並ぶ切手展
 幸せな切手は真っ直ぐに貼られてある
 これしきでなんどと辞表読られる
 約束を破った男に陽が落ちる
 又書いて破った紙片にヒントあり
 指切りを破った寝顔が濡れている
 ライバルを破る裏道掘りおこす
 鍵つ子が父の画像を破りすて
 約束を破って小指が疼き出し
 広告のように瘦せぬ腹撫でる
 ボーナスの風に広告のつてくる
 黒粋へものあわれを感じる日

雅風 頂留子
 以兆 花子報
 なみ 花子
 あい子 美世
 千春 田鶴
 瑞枝 千代
 伊都 とも子
 みど里 純子
 富美子 富美子
 鶴丸 叮紅報
 叮紅 舞呂二
 舞吉 寿美子
 満江 鳳人
 雄々 昭二
 多賀子 敏雄
 きみえ 愚童

広告がどぎつくなつて歳の市
 大新聞だから広告信じ切る
 広告で千羽鶴折る付添婦
 みくびつた小粒に背負い投げを喰い
 一粒の米まで拾う戦前派
 指触れて粒がはじけた鳳仙花
 米粒をひろつて母のひとり言
 ひと粒の真珠へ母とその母と
 粒撰りの豆コンペアで背伸びする
 山椒の小粒が効いたさわやかさ
 尼崎いくしま川柳会 角野かず子報
 灰皿が男のあせり知っている
 鶴の園という園ありき鶴等老い
 ねむの木の子等にきれいな夢がある
 言い聞かす心に突るものがある
 子供部屋なくて親子は仲が良い
 北風を屋台にさけるコップ酒
 たそがれの寡婦には遠いおもちや箱

「夜市川柳」募集
 第九回「爪」 中尾藻介選
 締切 2月29日
 投句先 千593 堺市堀上緑町二一九一
 河内天笑方 堺川柳会

文子 由郎
 樹郎 巡歩
 春梢 代仕男
 登美也 荒介
 瑞枝 与根一
 玉子 牧郎
 美智子 礼子
 かす子 墮駄
 かすみ

灰にして少し安らく古い疵
親不孝したのがいちばん先に泣く
あの川を渡ると軽い軽い灰
沈丁花肩を抱かしただけのこと
わら灰の温き囲んだ人ら亡く
これだけはくじ引にするかたみ分け
瀬戸内の夕日が恋しい冷凍魚
小正月しめ縄の灰風に舞う
負けこんだ男の口が尖りだす

老妻のボヤキが増える十二月
思い出を拾う枕が冴えてくる
人生に花の咲く灰映かぬ灰
外遊もホームシックになる茶漬け
泣きながら宿題やつてる孫娘
日本列島大根めしに泣いている
紅葉を紙に包んで京の駅
泣けるだけ泣いてあげなと慰める
手鏡で姑が拾っている想い
独り居の小さな幸せ花飾る
古里で話が尽きぬ菓の灰
閑居して郵便受に人を恋う
雪のなまけを確かに持っている男
掌で鏡の私を拭いてみる
みちのくで拾った情け噛みしめる
市場から妻が拾ってくるニュース

水だけは都会に勝る里の味
秒針をどうやらならぬ答案紙
追いつかぬ時計の穴を兎が広げ
提灯がゆれてまっすぐ帰れない
紫へ待ち針なにか言いたそう

菜の花句会

高杉

鬼遊報

- 晴子
- 定人
- 伊三郎
- 伊升
- 年代
- 美代子
- 春江
- 貞子
- 郁栄
- 佳秋
- 春子
- 良征
- すえ
- 保蔵
- 幸子
- かね子
- 清太
- 歌子
- 君子
- 紫香
- 一郎
- 恵美子
- ゞ女
- 静江
- 弘生
- 喜風
- 春蘭
- 章
- みつる
- 勝美

都市に住む鼠は二つの穴を持ち
まっすぐな針で魚を釣っている
撞れた都会で汚ない裏を知り
鍵にぎる男を他人には出来ぬ
針の山 鬼が下駄をはいている
大穴を当てたばかりのなまけくせ
出世して欲しい真直ぐ帰ってきて欲しい
男の愛を拒みとおした冬帽子
弱弱に何の恨みか針供養
お天気をいつも見ている鼻の穴
他人行儀など他人に叱られる
初産へ白い帽子を編んで待ち
蜂だけでない妻にも針があり
まっすぐな子供で少しものたらす
穴あれば出たい男の選挙戦

京都塔の会
松川
杜的報
持つものを持って弱気が逃げて行く
今大石角栄邸へ討入りらん
七人の敵が討入りした飲み屋
討入りへ二八のそばが隠れみの
塩まんじゅう四十七士の味がする
討入りに殿の短気がうらめしい
高提灯討入り隣から助け
討入りの明日は散る気のそばの味
討入りのように二次会肩を組む
影法師いそげはいそいでついて来る
縫い急ぎする正月の子の晴着
急がしいお入でしたと通夜の席
騒音をすべうち消す雪の朝
小雪舞えばほほえむように紅椿
大雪に朱の橋渡り湯女に逢う

豪雪地穴いくつかは露天風呂
足跡のない雪道を行く怖さ
人はみな無言で降りる雪の駅
千年の根雪にいとむ若さあり
五百羅漢雪から生えたように立つ
どこからの車か雪を乗せて来る
路地白き雪に一番道の跡
雪明り墨村の駐在さんも仲間入り
雪明り墨村のよように立つ女

富柳会
藤田
文化財白壁だけが映えている
壁のしみ思い出おいて別れの日
かべの顔一枚取ればこわい顔
初恋は土蔵の壁を背なにして
ホールベンその一行がもつれさせ
核交渉もつれとく鍵ないものか
少年の恋がもつれる糸電話
憎しみの果からもつれとけて来る
鬼心仏心の中でもつれ出す
寒い日のもつれた糸を解く親子
もつれ解く積木くずしがまたもつれ
吐く糸がもつれて墮ちる女郎蜘蛛
そばんの玉がもつれを解きほぐす
壁紙の私の夢が語ります
もつれ解く祖母の手きわのあざやかさ
子の寝顔もつれが溶けて来る夫婦

川柳たけはら
森井
さむくてさむくないよはしりっこ
エレクトロニむつかしくてまんばるよ
友達とゆく魚つりおもしろい
一番のなやみはせいがいひくいこと

- 蕉露
- 鬼遊
- 柳宏子
- 柳伸
- 雀踊子
- 頂留子
- 度
- 射月芳
- 夕花
- 糸葉
- 幸生
- シマ子
- 悦郎
- 冬葉
- 栗
- 英王子
- 武庫坊
- 落穂
- 芳子
- 栄
- 年代
- 白漢子
- 紅陽
- 水客
- 孝鳥
- 杜的
- 巨詩
- 美穂
- 笛珠
- 和友
- 紫香
- 求芽
- 冬子
- 花村
- 花代子
- 如水
- 春江
- 潮花
- 藤田
- 泰子報
- 正信
- 美緒
- 千代
- 冬二
- 維久子
- 岳人
- 美代
- 泰子
- 森子
- 慶子
- 栄一郎
- 美佐子
- きぬ
- 幸一
- 保
- 小三純
- 小四美
- 保

青い空見てたら小鳥が飛んで来た
 誕生日何を送ろかまだ迷い
 にちよびみんなおやすみうれしいな
 ちびきんぎょスイスイおよげいきぬいで
 ころんでも自分でおきるタルマさん
 日本に秋ありすてきな文化祭
 進学を控え適度のネジを巻く
 四季感の湧かぬイチゴの乗るケーキ
 通り雨待った甲斐あり山紅葉
 地方版の隅にこの上ない栄誉
 正論をぶつて動悸がおさまりぬ
 発想の転換はかる終電車
 期待やら夢やら編んで子が二人
 孫去んでから肩こり悩まされ
 一つずつ灯りを消して夫を待つ
 煙ひとすじさよならという語の重さ
 覚めてほし寝ていてほしい術後の子
 立冬へ譜面も変わる風の音
 ふっと出た嘘どこまでもつきまとい
 地球儀の円さを知らぬ核の傘
 売らんかな健康の落し穴
 好きだから肩もこらずに筆が持て

小四重貴子
 小六恵子
 小一ゆうこ
 小二方昭
 小六仁昭
 中二紀
 高二愛
 あやの
 令子
 静水
 菁居
 純舟
 比呂子
 房子
 淑子
 蘭幸
 笑子
 節夫
 貞子
 一路
 シゲヨ
 博子
 元一
 幽谷
 柳五郎
 玉水
 秋月
 青銅
 幸好
 照路

井上柳五郎報
 老齢化自画像迄が色褪せる
 自画像の大きな鼻が漫画めき
 自画像にすこし口惜しい恐妻家
 自画像を覆いたくなる日の焦り
 妾宅に居たアリバイは言いそびれ
 アリバイを喋って浮気はばれてくる
 アリバイに蜂の一と刺し目白台
 居直ったアリバイだんだん崩れかけ

ナ大阪川柳会
 中川
 滋雀報
 柳伸
 滋雀
 久彦
 鎮子
 悦郎
 章久
 千代三
 楓楽
 公一
 春蘭
 善信
 秋子
 一三
 浩一郎
 凡九郎
 覚然坊
 柳宏子
 智子
 節子
 洋子
 雅風
 重人

目移りの末につかんだ小さい幸
 目移りの男が覗く万華鏡
 目移りをしさない眼鏡を買いにゆく
 目移りへ決断させた人には値札
 多情多恨はじめの人に惚れている
 どの料理喰べよか箸が迷っている
 目移りにみんな買いたくなる呉服
 物好きのメガネは曇りがちである
 儲からぬ世話物好きと陰の声
 世話やきがすぎて物好きともいわれ
 物好きで買った陶器が値打出る
 もの好きが私を拾ってくれました
 物好きは二柳で共に苦労する

番茶
 和夫
 定平
 哲郎
 健一
 桃風
 博友
 草風
 柳伸
 滋雀
 久彦
 鎮子
 悦郎
 章久
 千代三
 楓楽
 公一
 春蘭
 善信
 秋子
 一三
 浩一郎
 凡九郎
 覚然坊
 柳宏子
 智子
 節子
 洋子
 雅風
 重人

打吹川柳会
 奥谷
 弘朗報
 亮二
 みをき
 寿満湖
 節子
 梅朗
 吉朗
 高代
 ゆり子
 観洋
 文子
 幸枝
 孝美
 舎人
 雄々
 いわ子
 早苗
 柳風

流行を好む娘が風邪をひき
 流行へ夫婦そろってカギをかけ
 早や六十路流行などには無関心
 流行りなら乞食ルックも着る娘
 流行語ほんに世相をよく捕え
 流行のゲートボールを古稀が追い
 前髪の長さ気になる当世風
 流行の色に染まると故郷捨て
 特売の山で流行追っている
 原宿やパリの流行過疎も視る
 大正児はやり言葉でこそをかき
 流行に速い形見が捨て切れず
 流行の髪純情でないみたい
 流行の服で職安には行かず
 月賦だけ残り流行逃げてゆき
 流行を追うとき生活がふとのぞき
 はやり語となつて倫理は地に落ちる

真砂
 雀踊子
 庸生
 弘生
 喜美子
 恒明
 文秋
 頂留子
 凡子
 慶三
 喜風
 喜風
 早苗
 柳風

不景気の世に不景気の歌流行る
流行を追って暮せるいい身分

西宮北口川柳会

妹尾

春江報

武庫坊

出し抜けに進軍ラッパ鳴る夢も

出し抜けの別れ話に星流れ

出し抜けの誘い多情の虫動く

海山の幸に出抜けに届く春

出し抜けの旅に出たがるのも女

出し抜けの出費サラ金借りようか

出し抜けに第九を鳴らすクリスマス

出し抜けに予先が来る会議室

出し抜けにさげんでみたい時もある

出し抜けに鬼がふり向かくれんぼ

出し抜けに雪崩をおこす妻のメモ

風邪引きに焼いたみかんは恋の味

凍りみかん遠いべチカを想い出す

みかん好きな子だった少年航空兵

寒さ聞く頃からみかんうまくなり

ぼっと出の青いみかんの青い恋

おみかんも出産地名で売れます

みかん畑漁師の墓は海を向く

鍵かけておく程貴重品もなく

共稼ぎ夫の鍵にも鈴をつけ

合鍵を握って妄想かど覚める

影武者のキーは黙否権しいられる

合鍵の鍵あけぬまながて冬

本心に主婦の不倫ま影がある

鍵っ子が豊かさの中にある孤独

すれ違う夫婦の鍵に雪が降る

スベアキー此の頃おとこ出入りする
つまずいた心見下す鍵の束

弘生 弘朗

静子

笑風

薫女

半歩

伊升

春子

よし津

幽香

鬼遊

すみれ

せいた

花村

いわゑ

年代

よ志子

杜的

喜代子

光子

春平

春江

みつ江

隆子

一子

冬子

しげお

かすみ

遍路の身鍵など既に捨てている
触れてみる心の窓を開く鍵

鍵音におびえ続ける死刑囚

新潟の三区へ旅がしてみたい
気が合って互いに注ぎ合うのれん酒

夢に見る母校の庭はいつも春

ああ瀬古が日本人がテープ切る

民謡の島の主人は音痴です

影法師何処まで僕について来る

校長が楷書のような話する

喜寿の師へ活躍祈る除夜の鐘

渡り鳥今日は日本も氷雨降る

京寒し千枝漬を妻に提げ

木屋町の雨は蛇の目が好きらしい

石庭で石の言葉盗み聴く

山茶花の白さに恥じる古帯

花詞たずねて花を哀れがり

編みかけの帽子へ冬が追ってくる

冬至南瓜それほどうまいものでなし

包まずに打明けた夜は眠り満ち

金のこと女を少し傷つける

背伸びする度にネクタイきつくなる

火葬場の煙に泣くと負けになる

好きと言う歩幅に師走の風が抜け

影法師不満もあらうが従いてくる

悪心を起す気もないふところ手

サークル檸檬

田形 美緒報

あわただしく年の整理も出来ぬまま

日記帳インクの重さ掌に沈む

窓拭いてみたけど庭も枯葉色
振り向けば悔いばかりなり除夜の鐘

墮駄 紀雄

右近

歌子

あき子

弘生

伊三郎

東洋男

保蔵

千世子

奈々

日の出

恵美子

婦美子

幸子

照子

きよ子

眉水

英壬子

郁栄

園歩

美恵

紫香

千代

登美子

慶子

もう裏はむけぬ落葉に昼の雨
ジングルベル聞けば財布の紐ゆるめ

猫の手もブラシに入れる歳の暮

娘とはあれはあそこ通じ合い

川柳化粧槽

植村客遊子報

あつさりと妥協している下心

聖職と自認先生ストをする

古くさいと言った知恵を借りにくる

ふるりに掃り祭りの屋台練る

朝市が女の足音から明ける

広告に欺まされそうなる暮

喝采はなくとも妻の酌が待つ

足音をしのばす病室午前二時

編上靴の音が追って寝汗かき

職探し足踏みなどははしておれぬ

年の暮年賀辞ちらはらと

主導権嫁にゆずった祝い箸

御社の玉砂利掃いて初詣で

福寿草盆栽に植え春待つ娘

雲海の富士から拝む初日の出

同じバスに乗るだけで済むセーラ服

川柳大原

白岩 文衛報

仲間だからライバルだから許せない

思いきり仲間と駆ける象の夢

呼べばすぐ集まる仲間いてくれる

仲間からはずれたくない葱坊主

転動地仲間も出来た子のなまり

母さんの仲間はすぐに台所
思うことあって仏間の灯を見つめ
漫才を終えるとコンビ黙り合い
銀婚へ金切り声とまだコンビ

章子

森子

美緒

恭子

岳詩

葉香

大鷹

実男

秋月

越山

紅月

秋信

さとる

永楽

みね子

輝月

サワ子

とし

客遊子

正己

はるみ

みさこ

やよい

悦子

秋子

寿恵子

耕花

ひでの

別々の車でコンビ楽屋入り
どこでどう馬が合うのか名コンビ
日めくりの速さ失うものばかり
オオタへ歩く姿も見てもらう
うわさ聞いたと畳屋やってくる
嬉しさを包みこめない片えくぼ

川柳大阪

田中笑風報

コトコトと煮物しながら千秋楽
空の旅地上で事故に遭う誤算
長寿国軍靴の声で福祉立く
家計簿も息切れしそう十二月
脇役に徹する妻はぐち言わぬ
平凡な或る日が怖い砂時計
山間の枯葉に埋もる水車小屋
ここだけの話みんなが知っており
均一のすがべルトで客を呼ぶ
ポスターの笑顔にいつもだまされる
財布持つわずみを友に初詣
お世辞より嬉しい本音聞かされる
行商の詠りにコロッと欺される
脇役の子供可愛く主役食い
会議室主役が多少とまたらぬ
息切れもせず定年のテープ切る
本当の芸を脇役知っている
一巡をしてから買い出す市場籠
息切れの妻待ってやる老いの坂
遠くても安い市場に妻の足
父ちゃんも脇役ママの荷物持ち
かすのこに決心がける市場籠
息切れをしますぞ背伸びせぬことだ

ゆきお 元江 いさむ 文恵 文衛 敏子 キミ 醉花 醉舟 天平 金太 和世 比呂志 司 君枝 みつる 喜醉 本蔭棒 謙清 鉄心 笑風 敏 与呂志 しげお 兎山 道子 重人

分相応無理に生きれば息切れる
婦人票求めて市場に金バツジ
尾浜川柳会 黒川 紫香報
鎌ならぬ赤い牙研ぐ北の国
古里で米研ぐ母が鎌を研ぐ
霜の朝小さい音が鎌を研ぐ
寒い日も一人暮しの米を研ぐ
気にせず溝越えてゆく若い人
溝理めて道幅広くするそうな
ミニバイクの深さを話しこむ
髪洗いいれば犬用シャンプーなり
日溜りがやさしくなつて深む秋
美容院から秋の女になって出る
落し穴うすうす知つてゆく女
一穴を税務調査は見逃さず
あちこちに首が浮いてる露天風呂
窓際の思ひは首のことばかり
ダルマさん首がないからすぐ転び
五十年首を振り振りついできた
野仏に当ると風が丸くなる
食べて寝ることが日課の十一月
熱燗で湯豆腐俺は冬が好き
すげ変えの首に社長は判を捺す
勝山双葉川柳会 鈴木 節子報
母さん待って砂場が黄昏る
対談に聞き上手なものエチケツト
黄昏もやっぱり急ぐサラリーマン
黄昏をめぐらへ急ぐ鳩になり
輪をつくり唄えば誰かが寄つて来る
ひと呼吸遅れて気付くお人好し
輪の中に入って行けぬ法師

だるま 弘雄 いわを 勝見 弘治 夢之助 昌子 歌子 江美 すみ 牧郎 義嗣 清太 よしお 土岐 新吉 光重 伊三郎 貞吉 住秋 紫香 節子報 寿美 喜美子 ハル子 勝子 好子 頂留子 柳伸

黄昏のポストは何か言いたそう
黄昏の堤防あしたへ続く道
かこめの輪抜け出た鬼に角がない
ワントンボを刈らせ真似をして踊る
黄昏で稲を刈るとる里恋し
輪のひと瞳がきらり光つてる
エチケツト上座下座ともめてる
エチケツト言うていられぬ遅れてる
煩惱は百八つでは捨て切れず
遅れても私の席がちゃんとある
人様に迷惑かけぬを作法とす
知恵の輪が解けて大人になりました
童心に還らせる夜の鐘がなる
城北川柳会 神夏磯道子報
ふるさとの紅葉を抱いた母の文
素人と思えぬ様な撥さばき
娘から喜寿の肌着のあたたく
日曜大工たまには妻がほめてくれ
笑わせてほろりとさせる名コンビ
幾星霜夢の祖国で血をたぐる
五百羅漢どれがわたしの顔だろか
定年になつて遊びを考える
素人芸甘さを笑うプロの水
木枯らしに馬子と眠れ石舞台
素人の民謡プロより味がある
素人の芸を集めてポラントピア
やすきよのコンビの良さが芸に生き
宮仕え褒めねばならぬ社長芸
赤のれん素通り出来ぬ腹の虫
独り住む心に沁みる除夜の鐘
一日の幸せ湯舟で唄になる

藤子 洋子 千里 智恵子 妙子 いくの 秋子 芙佐女 いく子 久子 楓 智子 節子 佐津乃 すみれ 茂一郎 星斗 登志代 テルミ 節子 悟郎 新一郎 利義 倫子 正之 公一 秀月 達一郎 喜代子

人生を生き抜く妻が居てくれる
集まった素人計りで埒あかず
上方芸和事の好きのわかる年齢
友人なら茲で笑いが来るところ
御近所の声を集めて落葉焚く
性格の違いを見せて名コンビ
妻多弁何かい事あつたらし
核を生み核に亡びて行く地球
裏方に蛇にまかせた十二月
幕間に本番がある見合劇
留守の家さんか計り咲いて居る
距離置くとか夫にわびる事計り
漫才のコンビほろほろ鳥のよう
銀盤に舞う晴れ姿名コンビ
友人もはだしてですよと冷かさ
階段を登る何かを期待して
オイハイと夫唱婦隨の五十年
東大阪川柳同好会 齊藤三十四報

山久 茂樹 千世子 満津子 右近 静子 婦美子 竜子 弘生 泰生 道子 静歩 重彦 午郎 美恵 三十四 三十四 三十四 頂留子 良京 喜風 喜一郎 みつ子 千代子 雅風 右近 美子 滋啓 柳影

体験を生かし第二の道を行く
体験の演技で峠を切り抜ける
体験は過去の遺物として秘める
芋ずるは食えるものだ知っている
ケロイドに戦さを憎む鶴を折る
あれから無口で通す人嫌い
にた川柳会 西村 早苗報

羨望に射られて玉の輿退社
紅葉をめでたいて湯へ姉いもと
出前持ち帰ると次が待っている
朝蜘蛛より早く逃げろ湯が迫る
死ぬのを待ってた様に叙勲来る
個性の芽摘んで仕上げる規格品
逃げられぬと知って猫で声を出す
跳ね返る言葉がなくて独り言
最早血も涙もなく遺産分け
ねむったまんまでさらばする気らしい
マイク持つ二人嘘八百を振りしめ
妥協する二人仲よくみかむく
選挙カー師走の風をかき廻す
本音かな好きだ好きだから酒
停年に百姓という天下り
土に掃す命を昏んが持っている
息切れもたまにはあろう蟻の足
うん十万ポリーナスの声遠く聞く
寒い管雪が舞うてたはしこ酒

川柳はびきの 塩満 敏報

休日も外を向いて父の靴
冷蔵庫満杯にして妻は旅
八方破れ女は夜叉の面かぶる
宝くじロケット無心の風車

金太 悦郎 覚然坊 弘生 湖風 雀踊子 独仙 孝華 孝美也 晴月 龜甲 幸一 夢酔 多賀子 巡歩 花子 栄 女 寿美子 景子 裕 雀踊子 雄々 宗光 早苗 隆二 寿美 只士 末一

町人のど根性残るたたき売り
北風へ借金無しの背すじ伸び
衆院選挙めば疲れた二枚舌
もう言わぬやっぱり言おう娘へ小言
まだ赤い血が出るこぶし握りしめ
男の背見送っている女の瞳
無人化の駅で売店生き残る
年頭はラッパに耳を傾ける
踏まれてもどっこい靴が支えてる
妻らしくなれぬ女の三面鏡
ためらいの指が素直な人にする
映画村平次の留守に上り込み
組紐の駒がかさこ話しかけ
床上げの妻へ大輪菊見せる
玉ねぎを刻んだせいでない涙
どなたにも師走の風が止まらない
反論へ黙って聞いている自信
メルヘンの中の私は自信家で
齢が邪魔まだまだ自信あるのだが
言い訳をしなけりやならぬ終電車
決裂す白紙に戻す午前四時

Y・F・C句会 人見 翠記報

買物についてが多い暮の街
おだてられ押しの一手に買わされる
五割引で買った自慢を見せ歩き
二つなら安いと無駄を見せ歩き
自販機で酒買う単身赴任の夜
バーゲンのブラウス似合う輪となり
バスが出るレジが跳ねる土産店
買物に遅れた言訳初時雨
たのまれた買物だんだん持ち重り

一屯 伴子 吐来 敏 忠宏 阿隆 与呂志 喜代子 キミ 白水 美代子 胡村 和良 美恵子 石橋義一 志津 房子 たき子 たず子 よし忍 翠記 絹子 節子 栗

香川醉々句集本社2月句会
「光背」発行記念

日時 二月七日(火) 午後六時
会場 なにわ会館

天王寺区石ヶ辻町19-12
地下鉄谷町九丁目・近鉄上本町下車東南
電話 06・772・1441番

兼題 おはなし
「側面」
「すんなり」
「梓」
「判断」
西田柳宏子
西出楓
植山武助
高杉鬼遊
阿萬萬的選
各題三句以内厳守

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川 柳 塔 社

3月の兼題 「先決」「じっくり」「自帯」「自立」

3月の本社句会は7日(水)

香川醉々句集

「光背」

志半ばに逝った香川醉々氏の句集「光背」が完成しました。

□序文 西尾 栗

□跋 塩満 敏

□B6判 三百頁

□頒価 二千元

発行所 川柳塔社

● 募 集 ●

四月号発表 (2月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栗 選
水煙抄(10句) 黒川 紫 香 選
愛染帖(3句) 橘高 薫 風 選
課題吟(各題5句以内)
「武器」 野呂 右 近 選
「似る」 福本 英 子 選
「都会」 両川 洋 々 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

五月号発表 (3月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栗 選
水煙抄(10句) 黒川 紫 香 選
愛染帖(3句) 橘高 薫 風 選
課題吟(各題5句以内)
「忠告」 中川 滋 雀 選
「輝く」 嘉数 兆代 賀 選
「沼」 小島 蘭 幸 選

★愛染帖・課題吟へは同人誌友を限らず。
★用紙は川柳塔社柳箋をご利用ください。

2月の常任理事会は1日(水)

定価 五百円(送料50円)

半年分 三千二百円(送料共)

一年分 六千三百円(送料共)

昭和五十九年二月二十五日印刷
昭和五十九年二月一日発行

〒545 大阪市阿倍野区三木町二丁目一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話 06・661・6914番
振替口座大阪 8133368番

編集後記

言温故知新という言葉がある。故きをたずねて新しきを知るとは、先人の所説や行状を学び、心に温め養い新しい意義や見解を展くの意と解釈する。川柳塔誌の題名の年に当り、この言葉をかみしめたい。

会中島生々庵名譽会長に、久しぶりにご挨拶を執筆頂いた。まだ外出はなさっておられないが、室内のリハビリに専念のご様子である。会恒例のおめでとう会に、東野大八先生が出席して下さいました。お顔を見るだけで川柳塔の力になる。生々庵名譽会長、葉玉幹、好郎、水客、紫香、潮花の皆さん方で座談会が持てたらとは夢に過ぎぬであろうか。

会大晦日に私は一週の手紙を受け取った。小林一夫君「二十三才」からのものであります。次のような内容だった。

会私は、先年川柳と出会ったことから、川柳や俳句を中心とした短詩文芸に励く

心を怠かれ、自身、その道に進んで行こうと決心する

と同時に、何とかそを、今の私と同世代の若者にも広めたく思っています。今の若者は、私自身を含めて言葉に飢えたい世代なので感ぜずにはいられません。活字離れした若者などと言われますが、それは正確には、雑多な映像その他のメディアの氾濫の中で、活字から離れている若者と見た方がいいのではないのでしょうか。世の中全体の傾向から、「見る」ことに飽食しきった若者は、今もう一方の「読む」世界を求めはじめていると思います。世紀末から来世紀へかけて、川柳にとってほ若返りの大きなチャンスという気がしてなりません。

私は小林君の靴の紐を結ぶつもりになって、とても明るい新年を迎えた。昔新年早々、中前三幸氏の訃に接した。心から哀惜申し上げる。

多くの方に故人を偲んで頂きたい。

▼去る十二月十八日の衆議院総選挙の結果は周知の事実である。野放政如氏でないが、随分この目に期待をかけていたのである。秦野前法相はこの程度の政治と言ったことあり、「この程度の国民」の政治意識だったのかと今となってはあきらめざるを得ない。残念である。

▼暮れの二十四日夕方、忘年会をするとして梅田の紀伊国屋書店前に集まった。他の場所と違ってある程度の混雑は予想していたが、お祭り広場に集まったような人出に驚いた。『会う場所』は少キゼだが紀伊国屋「史好」は二年間の作である。今はキゼどころでなく俗である。世の中すべての推移いちじるしく、八尾村の住人にはただただ驚くばかりである。

▼詩集「人間一抱載の木村三千手さんの詩一落葉」の一節を借用する。『袖つ

けがほころびていますヨ」と声をひそめて、言ってくれた人がある。聞いても「すんなり笑うことが出来ない」当節はやりの穴あきフッシャシヨン、よれよれ感

覚に作った服に、破れ穴をあけ、下に着ているものや肌が見えている靴下。私に過日、地下鉄のホームで破れ穴から覗いている乳房を見たのである。好奇の瞬は去って、無難作に穴

からこぼれてゆく大切なものの方を思った。(き)今年度の読書事は買った『ホヤホヤの「広辞苑」を編いた。』三承知のように「広辞苑」第三版は昨年十二月上旬発売された。十四年前に刊行された第二版を基礎としながら、殆んど全面改稿ともいふべき新版で、コンピュータを使い四年余の歳月を費したという編集作業の裏話が新聞で紹介されたのを見たとき、天啓の如くこれは買わねばならぬと思ひ、59年の読み始めはこ

れにしよう」と心に決めたのである。

台僕はこれまで大辞書というものを持ったことがなくコンパクト用辞典が用字便覧の類いで用を済ませていた。大辞書のあの重量は想像するだに非力な僕に一種の怖れを抱かせるのである。で、今回は、わが家に一番近い小さな本屋に注文し、取寄せてもらい、出来

るだけ肉体的負担を軽減することを考えた位だ。

☆そのうち家庭にコンピュータやファクシミリが普及し、ニューメディアによる高度情報化社会が実現すれば、例えば電話で必要な情報、知識を相手のコンピュータから自由に手に出来ることが出来るようになる。そう遠い先のことではない。そうなれば大辞書の出版という手間のかかる事業はこれが最後になるのではないか。そんなことを考えながら手に余る重さを小半日愉しんだことであっ

た。

日刊

電波新聞

投稿欄案内

川柳 選者・橘高薫 風

(掲載日) 毎週水・土曜日

俳句 選者・小寺正三

(掲載日) 毎週火・金曜日

短歌 選者・佐々木信夫

(掲載日) 毎週月・木曜日

〈投稿規定〉

はがき一枚に一句(百)以内(川柳・俳句・短歌と明示すること)投稿随時

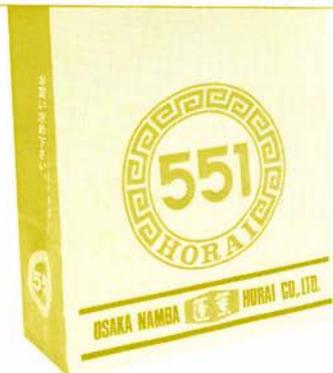
自由課題・秀句には掲載感謝状

〈投稿先〉

〒535-0111・大阪市北区中之島2-1-1・朝日新聞ビル9F・電波新聞大阪本社「学芸部」あて。

ボリュームたっぷり スタミナ満点!!

豚饅・焼売・焼餃子



ほうらい



TEL641-0551

なんば戎橋筋本店
その他有名百貨店でどうぞ